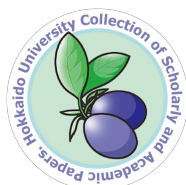




HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	アレクサンドル・ネフスキーとモンゴルのルーシ支配：研究史上の問題点
Author(s)	栗生沢，猛夫
Citation	北海道大学文学研究科紀要，110，1-107
Issue Date	2003-07-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/34048
Type	departmental bulletin paper
File Information	110_PR1-107.pdf



アレクサンドル・ネフスキーとモンゴルのルーシ支配

——研究史上の問題点——

栗生 沢 猛 夫

はじめに

ロシア史上、アレクサンドル・ヤロスラヴィチ・ネフスキー（ウラジーミル大公、在位一二五二—一二六三年）の名はよく知られている。かれはルーシを外敵、とりわけドイツ人やスウェーデン人など西方の敵から守った英雄として歴史上にその名を留めている。かれの名を付した勲章が帝政期にも、スターリン下のソヴィエト時代にも存在し、時代の多くの英雄たちの軍服を飾ったことも、またエイゼンシュテインがかれを主人公とする映画を撮影し、プロコフィエフがそれに音楽をつけ、後にそれを独立のカンタータに仕立て上げたこともよく知られている。夥しい歴史小説がかれを好んで扱っていることももちろんである。歴史家もかれについては多数の研究書や論文を発表してきた。

学校の歴史教科書もこの英雄にふれないですますことはなかった。

ただ、それらのなかで主たる注意が払われているのは、もっぱら一二四〇年のスウェーデン人との戦（ネヴァ川の戦）⁽¹⁾と、一二四二年のチュード湖上におけるドイツ騎士団との戦（氷上の戦）であり、これらの戦での勝利こそが、アレクサンドルの英雄たる所以とされてきたのであった。⁽²⁾しかるにかれが生きたのは、いうまでもなくモンゴルの侵入があり、そのルーシ支配が次第に確立していった時代でもあって、いわばルーシにとり未曾有の危機の時代であった。アレクサンドルがこの困難な状況下にあつて、モンゴル（オルダ、すなわちキプチャク・カン国）のカン⁽³⁾の支配を受け入れ、カンとの良好な関係の維持に努めたことはよく知られている。ただ問題は研究史上そのことに十分な注意が払われず、アレクサンドルのいわばノヴゴロド公であつた時期の前半生と、ウラジーミル大公となつてモンゴルとの直接の関係に入るようになってからの後半生とが有機的・統一的に捉えられてこなかったことにある。換言するならば、ロシアの歴史家たちはアレクサンドルを研究するにあつて、かれの時代のルーシ・オルダ関係に十分な注意を払ってきたとは言いがたいということである。

本稿の筆者の課題は、このようにある意味で一面的な見方をされることの多かつたアレクサンドル・ネフスキーを、とくに後半生における、キプチャク・カン国との関係に主たる注意を払いながら、時代状況のなかに全体として位置づけることにある。そのためにまず第一に、これまでの研究をできるだけ詳しく見ながら、それらが抱える問題点を具体的に明らかにし、ついで第二に、あるべき研究のあり方について「史料」の記述を検証しつつ論じてみようと思う。すなわち、具体的には史料に基づくアレクサンドル像の構築を目指すことになるのであるが、その際の史料とはいうまでもなく主にさまざまな年代記であり、多数の写本で残されている『アレクサンドル・ネフスキー伝』（以下本

稿ではこれを『伝』と略記する）である。これら数ある史料は相互に矛盾し、相いれない情報を多数含んでいる。それゆえこれらを批判的に検討し、選別的に利用する必要があるが出てくる。個々の史料をどのように活用すべきかを探ることが、この考察の中心課題となってくるであろう。ただしあたり本稿では以上の課題のうち前者に取り組むこととし、後者については別稿において論じることとした。⁽³⁾

一 これまでの研究におけるアレクサンドル・ネフスキー

研究の伝統はいうまでもなく長く、古い。ロシア史を前近代を念頭にいれつつ全体的に論じる研究者で、アレクサンドル公に触れずにすまず者はほとんどいないといつてよい。本稿ではそれらすべてを検討することはできない。主に二〇世紀の諸研究のなかから若干を選んで、史家の記述と史料の取り扱い方についてみていくことにする。

すでに指摘したように、これまでの歴史家はノヴゴロド公であった時期のアレクサンドルの対西方諸勢力との戦、西方「国境」の防衛にその主たる注意をむけ、⁽⁴⁾ルーシ・オルダー関係におけるアレクサンドルの位置には十分な注意を払ってこなかった。

(一) A・N・ナソーノフ

今世紀の歴史家でこの問題に最初に本格的に取り組んだのは、ソヴィエトの歴史家A・N・ナソーノフであろう。かれの北東ルーシ諸都市における一二六二年の反タタール蜂起をめぐる見解は、ここでも重要な論点を提示する。す

でに別稿で論じたように、ナソーノフはこれらの蜂起が「ルーシ諸公」、それどころかアレクサンドル・ネフスキー大公その人の指示で行われたことを主張したのであったが、その際かれが依拠したのは、『ニコン年代記』や『ウスチュグ年代記』、また『スチューベンナヤ・クニガ』など後代の年代記であった。かれは当時モンゴル帝国のカーンとキプチャク・カンとの関係は緊張しており、一二六二年の徴税官は帝国から派遣されたものであったが故に、親キプチャク・カンのアレクサンドルが反タール徴税官蜂起に出ることは十分にありえたと考えたのである。⁽⁵⁾

これにたいし、G・ヴェルナツキーやV・T・パシュート、J・L・I・フェネルらはナソーノフを批判しつつアレクサンドルの蜂起への不関与を主張したが（本稿の筆者もこの立場に立っている）、それについては繰り返さない。ただここではナソーノフ自身がその後、A・A・シャーフマトフの研究の成果をとりいれて諸年代記にたいする姿勢を変化させ、『ウスチュグ年代記』など後代の年代記の利用については、慎重になつてゐるという事実を指摘しておく。⁽⁶⁾

（二）ユーラシア主義者

アレクサンドル・ネフスキーのオルダーとの関係の問題は、一九二〇～三〇年代に活発な執筆活動を行った亡命知識人グループ、いわゆるユーラシア主義者たちの著述において大きな位置を占めた。かれらはそもそもモンゴルによるルーシ「支配」をロシアにとつての悲劇とみる伝統的な見方を批判し、それがロシアの後進性の原因ではなかったこと、それどころかモンゴルはロシア国家を強化し、宗教的、文化的、習俗慣習的に一体的な存在とした動因ですらあったことを主張した。モンゴル時代を「くびき」の時代とみることを拒否し、逆にその肯定的・積極的意義を認めようとしたのである。⁽⁷⁾

ユーラシア派のアレクサンドル観をもつとも明瞭に表明したのは、後にアメリカ合衆国に渡り、そのロシア史研究の草分けの一人となる若きヴェルナツキーであった。かれは一九二五年の論文「聖アレクサンドル・ネフスキーの二つの偉業」において、ネヴァ川とチュード湖上におけるスウェーデンとドイツ騎士団とに対する勝利をアレクサンドルの一方の「偉業」「戦闘の偉業」とするならば、もう一つの「偉業」はモンゴルのカンにたいするその従順な態度であつたとする（「恭順の偉業」）。その際かれはアレクサンドルをオルダーに抵抗しようとしたルーシのもう一人の公ダニール・ガリツキーと比較し、ダニールの反タタールの志向は結果として「南西ルーシのラテン」「カトリック」世界への隷属をもたらしただけにたいし、アレクサンドルの親タタールの政策的政策は「偉大なるロシア国家」を生み出すことになったとする。アレクサンドルのこの政策こそルーシに平和と安定をもたらし、その後のモスクワとロシアの国家的発展の基礎となったというのである。「二つの偉業」論文は一般向けの、やや通俗的な性格を帯びており、史料的にも主に『伝』に依拠していたという点では今日こうした見方をただちに受け入れるわけにはいかない。ただ新たな理解しやすい視点を提供したという点でその後の研究に大きな影響を与えたといえる。⁽⁸⁾

(三) V・T・パシュートらソヴィエトの歴史家

アレクサンドルをダニールに対峙させ、その上で両公を当時のルーシが取るべき二つの路線（親タタールか親西方か）のそれぞれの代表者とみる見方はすでにA・E・プレスニャコフにおいてみられるが、⁽⁹⁾ソヴィエトではS・V・ユシコフがルーシ諸地方のリトアニアへの「移行」、すなわちリトアニア支配の西部ルーシ諸地方による受け入れがこれらの地方のモンゴル・タタールのくびきへの恐怖からの解放を意味したこと、そしてこうした「移行」はそれらの

地方の諸公にとつて、また「すべての住民大衆」にとつて魅力的な道であつたであろうことを指摘していた。⁽¹⁰⁾ またB・D・グレコフやI・U・ブドーヴニツツ、V・V・カルガロフらは、いわば階級史観の立場から民衆が反タタール蜂起に立ち上がったとき、諸公や貴族層は自身の特権の維持をはかるためタタールの側に立つたことを強調している。⁽¹¹⁾ ただこうした共通の大前提の上に立ちながらも、アレクサンドル公の取り扱いにおいてはソヴィエト史家の間に微妙な食い違いが見受けられるのも事実である。たとえばここではブドーヴニツツの場合をみてみよう。

ブドーヴニツツは一四世紀までのルーシにおける政治・社会思想を扱った著書の、タタールの侵入に関する諸年代記の記述について論じた箇所^{レトビセツ}で、とくに『ガリーチ・ヴォルィニ年代記』（『イパーチー年代記』の第三部）におけるダニール・ロマーノヴィチ公の取り扱いと、スーズダリの年代記者（ウラジーミル年代記、その記述は今日『ラヴレンチー写本によるスーズダリ年代記』へ以下『ラヴレンチー（スーズダリ）』と略記）の形で残されている）におけるアレクサンドル公の取り扱いを比較検討している。これは先に紹介したヴェルナツキーの際にもみられたようによく知られた比較であるので、ここで詳しくは紹介しないが、かれによれば、前者においてはダニール公はタタールに抵抗する英雄として描かれ、タタールへの屈服後ダニールがバトウ・カンの下で得た厚遇を「ああ、タタールの榮譽は何と悪しきことかな」と形容しているほどであつた。他方、ウラジーミル年代記はスーズダリ地方の諸公のタタールに対する関係をまったく異なる立場から見ている。それは諸公のオルダー（カン国）参りを好意的に伝え、諸公がカンの厚遇を得た場合には率直に「大いなる榮譽を得て帰国した」と肯定的に記している。ブドーヴニツツによれば、ウラジーミル年代記におけるこうした表現はタタールに対する単なる隷従の姿勢の現れではなく、ヤロスラフ、アレクサンドル父子のようなウラジーミル大公が意図的、計画的に採用した政策の表現に外ならなかつたという。すなわ

ち、ブドーヴニツはアレクサンドルらの対タール恭順策は、東西からの危機がルーシに迫った困難な時代に、ロシアの将来を考慮に入れたうえで選択された長期的展望とプログラムに基づく現実的な政策であつたのである。アレクサンドルは「国土と人民を救うために」一身を犠牲にし、止むを得ずタールに対する服従を受け容れたとされる。⁽¹²⁾ブドーヴニツのこうした見解はある意味ではソヴィエト、というよりロシア人研究者の多くにみられる典型的なものであるが、後にドイツのW・フィリップに厳しく指摘されたように、史料の根拠を欠いている。アレクサンドルらが後のモスクワの台頭、それによるロシアの統一、そして実力によるタールの「くびき」の廃棄を見通して、まずは実力養成のために辛抱したかのような見方は、後世の歴史家による結果論的で超歴史的な、また願望の入り交じった解釈にすぎないように思われる。⁽¹³⁾

ソヴィエトでもっともよく知られたアレクサンドル・ネフスキー研究者は歴史家V・パシュートであろう。かれはガリーチ・ヴォルィニ史やリトアニア大公国史の専門家で、西部ルーシ、およびルーシと西方諸国との対外関係などに詳しく、その意味でも西部国境の防衛者としてのアレクサンドルは格好の研究対象であつた。すでに注2にあげたように、かれは一九五一年にアレクサンドルとルーシの防衛に関する著書を出版していたが、その延長線上で一九七四年には、いわゆる偉人伝シリーズ (Zhizn) の一書として『アレクサンドル・ネフスキー』を上梓した。本書におけるアレクサンドルのかれによる歴史的意味づけは、おそらく次の一節にもっともよく表われている。

「かれ『アレクサンドル』はその慎重で用心深い政策により、ルーシを遊牧民の軍隊による徹底した破壊から救つた。武力闘争、商業保護政策、選択的外交策により、かれは北方と西方における新たな戦争の勃発、ルーシにとって起る、だが致命的なローマ教皇との同盟締結、そして教皇庁並びに十字軍とオルダーとの接近を阻止したのである。

かれは時をかせぎ、ルーシに自らが強化し、恐ろしい荒廃から立ち直る余裕を与えた。かれはモスクワ諸公の政策、ロシア復興政策の元祖であつた。⁽¹⁴⁾

ここにはアレクサンドルが西方の敵と武力を用いるか(対騎士団、スウェーデン、リトアニア)、あるいは外交的手段を用いてか(対教皇庁)戦い、他方東方の敵(モンゴル)にたいしては戦略的に屈する政策(慎重で用心深い政策)、「選択的外交策」をとつたこと、それにより無用の犠牲と荒廃(「徹底した破壊」)を回避したこと、西方諸国との交易は積極的に促進したこと、教皇庁のオルダーへの接近を阻んだこと、全体としてかれがルーシに休息の時間を保証し、後に同様の政策を採用したモスクワ諸公(初代モスクワ公ダニールはアレクサンドル・ネフスキーの末子である)の手本となり、ロシア集権国家形成の基礎を築いたすぐれた政治・軍事指導者であつたことが強調されているのである。一見して先のブドーヴニツツの見解に類似していることが明らかであるが、これにさらにアレクサンドルと正教会の長、「キエフと全ルーシの府主教」キリルとの密接な関係の構築(パシュートはもちろんこれについても別の箇所で見られている)を加えれば、ソヴィエト、ロシア研究者の一般的、最大公約数的アレクサンドル像の基本的な要素は網羅されていることになる。

ここで良質な歴史家としてのパシュートの名譽のために断つておかなければならないのは、かれにはよくみられるような(たとえば先に触れたヴェルナツキーなどにもみられたが、とりわけ後述するようなL・N・グミリヨフにおいて顕著である)、西方カトリック勢力をルーシの併合を企む不倶戴天の敵と決めつけ、他方、宗教的・思想的に「寛容な」モンゴルはルーシのよき同盟者とするアプリオリに反西欧的な傾向はないとは言わないとしても、過度に強くはないということである。かれはアレクサンドルが対西方強硬路線、対東方従属路線を採用した理由として、西方の

敵に比しモンゴルが軍事的に圧倒的に強力な敵であったことをあげ（ちなみに、これに対してグミリヨフの場合はモンゴル軍はわずか四千で、決して大軍ではなかったと主張する）、あくまでも事実在即して現実的に考えているのである。

パシュートのアレクサンドル像を支えている史料の基盤についてもみておく必要がある。かれは本書の冒頭で、アレクサンドルに関する史料が多くないことを指摘しつつ（全ての情報を並べても一〇頁を越えないという）、それを列挙している。ルーシの諸年代記、ドイツの諸年代記、スカンディナヴィアの物語史料（複数のサガ）、教皇からの二通の書簡、アレクサンドルの編んだないし裁可した法的諸文書、複数の国際条約、そして教会が編纂した『伝』――これ全てである。⁽¹⁵⁾ 一般向け偉人伝という本書の性質上、残念ながらかれはこれらを具体的に明記し、本文執筆の際にも典拠として注記することはしていない。かれがすぐれた歴史家としてこれらの史料をフルに活用したことは疑いないけれども、それでも史料をどのように利用しているか、史料が語る以上のことを語ってはいないか、などについて検討する余地は残っているように思われる。以下に、いくつかの箇所についてこれを行ってみよう。

まず若きアレクサンドルの対スウェーデン、対リヴォニア騎士団戦についてみてみよう。

パシュートは次のように書きだす。「アレクサンドルはその生涯を祖国にたいする不断の困難な奉仕に捧げた。かれは安易な決断、すなわち自身にとっては容易であるが、国にとっては破滅的な同盟「西方カトリック勢力との同盟を念頭に置いている」の締結に心動かされることはなかった……かれは「家庭生活を犠牲にして」戦のことを考えることを余儀なくされた。それは富の獲得や略奪のためではなく、ルーシの名そのものを守るためであった。「戦が行われるべき」その地では、ルーシの名はいまだかつてタタールの湾曲したサーベルによっても、騎士団戦士の重い剣によつ

でも辱められたことはなかったのである……北西「ルーシの」国境地帯を守ること―それは名誉に関わる事業であつた。⁽¹⁶⁾

広範な読者を対象とした書物におけるこうした記述は、歴史家がある種の社会的責任を負う存在であることを考慮にいれるならば、それほど問題にすべき事柄ではないかもしれない。実際、本稿でとくにこうした点をあげつらおうとしているわけではない。だが厳密に考えれば、ここでいくつかの点を指摘しておく必要はある。

まず、著者は「祖国」をすでに固定的なでき上がったものとして考えているようにみえる。「祖国」はすでに一つのものとしてあつたとしてもどうかのごとくである。ここでは当時のルーシに、また北西地方、ノヴゴロドに限定してさえも、多様な政治勢力の存在したことが考慮にいれられていない。あるエトノスに属することがそのまま一つの政治体に属すかのごとくとられている。次に、アレクサンドルやノヴゴロド市、また北西ルーシ諸公がこの方面で戦うとき、それが本当に「名誉」のためであつたと言えるかどうか疑問である。そのようにいう場合、それではモンゴルに屈することは「不名誉」ではなかったのかという疑問がでてくるであろう。またアレクサンドルの率いる軍勢によるフィン系などの原住民からの略奪はなかったといえるであろうか、大いに問題であろう。アレクサンドルを不斷に祖国のために奉仕した英雄と描くのもいかに「偉人伝」、「聖者伝」風である。少なくとも歴史研究にはなじまない。このようなスタンスがある種の危険性をはらんでいることを自覚しないと、問題は広がることになる。

パシュートはこれに続いて、次のように書き進める。「スウェーデン王の政府は船隊をフィン人―エミ人に対してというよりは、ノヴゴロド・ルーシに対し送ることに決定した。⁽¹⁷⁾」著者ははたしてスウェーデン政府が上のように「決定した」ことをどのようにして確認できたのか、明らかにしてはいない。またこれに続く次のような記述も問題なしと

しない。「一二四〇年にスウェーデン人がいつものやり方に反して冬ではなく夏にイズボルスクとプスコフに攻撃をかけてきたとき、アレクサンドルにはスウェーデン十字軍の攻撃がリヴォニア騎士団戦士の動きと示し合わせたものであることに對する疑いはなかった。」⁽¹⁸⁾ここでも、はたして著者がどのようにしてアレクサンドルがスウェーデン人と騎士団の間の「共謀」を知りえたのか、明らかにしてはいない。スウェーデン人、ドイツ人、デーン人、さらには教皇庁が一体となつて、ロシア侵略の機をうかがっている（「西欧からの脅威」⁽¹⁹⁾）とするのはソヴィエト史家によく見られた図式であるが、パシュートもこうした先入観から完全には自由でないようにみえる。

ネヴァ河畔におけるアレクサンドルの見事な勝利について述べた後、著者はその後まもなくして騎士団の脅威が高まつたことを指摘する。前線に位置するプスコフは貴族層のなかの親騎士団派の策謀で動揺する。この事實は、当時北西ルーシにはいくつかの政治的立場がありえたことを物語っているのだが、一つの「祖国」を強調する著者はそうは考えない。これらの親騎士団派貴族はあつさり「反逆者」、「裏切者」と言い換えられる。⁽²⁰⁾ノヴゴロドにおいても騎士団との協調派は「欲深い貴族層」と特徴づけられる。アレクサンドルもかれらには用心してその「先々のことを考えた計画」を打ち明けることはしない。⁽²¹⁾騎士団を迎え撃つアレクサンドルは先手を打ってヴォジ人（バルト海沿岸部のフィン系人）地域を攻め、これを「解放」する。騎士団側についてたヴォジやエスト人は「裏切者」、サアレマ島において騎士団に對する反乱に立ち上がったエスト人は「英雄的住人」とされる。⁽²²⁾騎士団に對する一二四二年の戦は「祖国のための」「正義の戦い」⁽²³⁾であり、その勝利は「全ルーシとそれと結びついた諸民族にとつて」⁽²⁴⁾大きな意義をもつたと、フィン系などの「諸民族」とルーシとの一体性が強調される。

対スウェーデン、対騎士団の戦そのものの経過等についてはここではふれない。これらにおけるアレクサンドルの

戦闘指揮の天才的巧みを称え、その勝利をロシア史上画期的な出来事とする点において、パシュートも他のロシア・ソヴィエト人歴史家と変えることはないからである。ただここでは後述するように、両会戦の規模や歴史的意義を低く見積もり、アレクサンドル像の再構築をはかる動きが研究者間にあることを指摘しておくに留める。

次に取り上げたいのは、アレクサンドルの大公位就任の経緯に関するパシュートの見解である。アレクサンドルの父ヤロスラフの死（一二四六年）後、ウラジーミル大公位はその弟スヴァトスラフの手に移ったが、モンゴル帝国本国において大カーン・グユクが没し（一二四八年）、その後オグルーガイミシュが実権を握るに至ると、アレクサンドルとアンドレイの兄弟にカラコルムへ出頭すべしとの召喚状がとどく。それはパシュートによれば、オグルーガイミシュもグユク同様バトウと敵対しており、かの女が後者の任命になるスヴァトスラフ大公を受け入れたくなかったからであるという。ここでパシュートは新大公スヴァトスラフがバトウにより任命されたとする史料の根拠を出していない（諸年代記にはそのような記述は見当たらない）のみならず、やがて間もなく新大公が甥のアンドレイないしミハイルによつて（そのどちらによるのかが研究者間で議論されているのであるが）追放・廃位されることになる次第にはまったく触れていない。だがそれ以上に問題なのは、オグルーガイミシュがスヴァトスラフをバトウの走狗とみなしながら、何故アレクサンドル・アンドレイ両兄弟、あるいはいずれか一方をバトウの走狗とはみなさなかったのかについての説明がなされていないことである。つまり、両公のカラコルム召喚の理由が結局は明らかにされていないだけでなく、同じく反バトウでありながら、どうしてグユクではなく、その死後に寡婦の方が両公を召喚するに至ったのかも不明なままになっているのである。だが今このことはこれ以上問題にしない。

いずれにせよ、サライ經由でカラコルムへむかった両公はオグルーガイミシュにより、アレクサンドルは「キエフ

と全ルーシ」の大公に、アンドレイはウラジーミル大公に任命される。これはパシュートによれば、アレクサンドルに肩入れし、かれをルーシ全体の支配者となそうとするバトウの意図を挫き、ルーシを分割し、それにより両兄弟公の間に隙を裂き、両者を相互に敵対させるのみならず、バトウとルーシ及び兄弟諸公との間にも楔を打ち込もうという大カーン妃の巧妙な策略であつたという。著者のこうした「読み」がどの程度事実を反映しているか、史料がないので判断は難しいが、ここではこの点を指摘しておくに留め、さらなる検討は控える。

ルーシへ戻つた両公は、アレクサンドルは（キエフではなく）ノヴゴロドへ、アンドレイはウラジーミルへ赴いて、それぞれ統治し始めるが、バトウがカラコルム宮廷における自らの影響力を拡大したため、オグルーガイミシュは失脚し、新大カーンにバトウの推すモンケが就く（一二五一／五二年）。パシュートによれば、これを好機到来ととらえたアレクサンドルは一二五二年サライのバトウのもとへ出かけ、その結果アレクサンドルが「兄弟中の第一人者」、「全ルーシの大公」とされたという。後述するところからも明らかにするように、この直後にウラジーミル・スーズダリ地方とガリチ・ヴォルィニ地方へタタールのネヴリユイ軍及びクレムサ軍が襲来し、甚大な被害が出されるのであるが、パシュートはこれをもつばバトウのイニシアティブにより説明する。すなわち、バトウはアンドレイ公（前ウラジーミル大公）、ダニール公（ガリチ公）ら反タタール「同盟諸公」がアレクサンドルへの服従を拒むであろうことを予測し、それで両公、両地方を襲撃させたのだというのである。ここではアレクサンドルはまったく関与していなかつたかのごとくに扱われている。本稿の筆者は、後述するようにアンドレイ大公失脚の件はアレクサンドルの関与なしに説明することは困難であると考えているが、パシュートはいわばここでアレクサンドルを「免罪」しているのである。これも一種独特の仕方ではアレクサンドルの聖化をはかった、聖者伝風の描き方であるといつてよからう。

次の箇所も同様である。ガリーチ地方を襲ったタタール軍（クレムサ軍）のなかにはアレクサンドルの盟友であるスモレンスク公の部隊も加わっていたが、そのことについてパシュートは次のように記している。すなわち、「アレクサンドルは『ガリーチ公』ダニールが、なされたこと『つまりクレムサ軍によるガリーチ地方襲撃』でかれ『アレクサンドル』を赦しはしないだろうことを理解した」としたあと、「だが、これを行ったのはアレクサンドルではなく、バトウであったのだ」と、わざわざアレクサンドルには責任がなかったことを強調しているのである。アレクサンドル自身に代わって歴史家がかれのために「釈明」をしているのである。⁽²⁵⁾

もっとも、パシュートがすぐれた歴史家であることをうかがわせる分析も、以下の記述のうちには確かにみられる。すなわち、大公となったアレクサンドルはノヴゴロドを子のヴァシーリーに委ね、自らはウラジーミルへ去る。ところが「自由」の伝統に誇りをもつこのノヴゴロドやアスコフにおいて、おそらくは強力な大公権力の存在を嫌って、また部分的には大公のオルダーへの恭順政策への反対の気分もあったかもしれないが、反大公的動きが活発化する。一二五五年、ノヴゴロドはヴァシーリー公を追放し、アスコフ公となっていたヤロスラフ・ヤロスラヴィチ（アレクサンドルの弟）を公位に招く。アレクサンドルは軍を率い、ノヴゴロド領トルジョクを占領、さらにノヴゴロド自体をも攻める構えをみせる。ヤロスラフは兄の強硬な態度をみて逃亡し、孤立無援のノヴゴロド市は内部で分裂する。結局親大公派が勝利をおさめ、ノヴゴロドは大公に屈服するのであるが、これ以後ノヴゴロド公位には基本的にはオルダーでカンの承認を得、ウラジーミル大公となった者が就くという伝統が確立することになる。

さてノヴゴロドが分裂したとき、反大公の立場にたったのは「小さき者たち *men'shie*」であった。かれらは民会に集まり、「ノヴゴロドの真実 *pravda* のため、おのが父祖の地のため、生か死かを問わず、すべてが立ち上がる」こと

を決定する。⁽²⁶⁾一見してお定まりの貴族層と庶民層の対立という図式のようにみえるこの箇所を、パシュートは慎重に次のように分析してみせる。

まずかれによれば、「小さき者」とは小封建領主層、一般の商人、都市民そして庶民層である。かれらはおおむね大公のノヴゴロド支配強化の意向に対し反対していたが、そのなかには大公のおかげでノヴゴロド市や大主教の土地や財産の分配に与った者たちもあり、すべてが反大公的であるわけではなかった。大公との衝突を回避しようとして「小さき者たち」の反発をうけることになったのは「大いなる者たち *great ones*」であるが、それはいわゆる都市貴族層である。ただしパシュートによれば、かれらも一様なグループではない。そのなかの親アレクサンドル派はスーズダリ地方と長期にわたる交易関係で密接に結ばれてきた門閥貴族Ⅱ上層商人である。しかしかれらとてアレクサンドルが入城しようとしたときに、かれが反大公派の頭目とみなして引き渡しを要求した市長アナニヤを守ろうとした。ましてや反大公派の貴族層にいたっては民会に集まった人々を結集し、大公軍との戦闘を決意して三日間大公軍と対峙したほどであった。かくてアレクサンドルも要求を和らげアナニヤ罷免で矛を収めざるをえなくされ、やがて騒擾は収まり、アレクサンドルのノヴゴロド入城が可能となったという具合である。

パシュートが一般向けの書物においてすら、通り一遍の図式で事を単純化しようとしていないことは明らかである。加えて、かれはノヴゴロド民が貴族層も含めて親大公的であろうと、反大公的であろうと、示す態度はそのときどきの状況によるところが大きいということ、かれらは「共和制」的な都市国家の一員として強力な支配権を要求する大公には常に警戒を怠らない存在であったということを、適切に指摘しているのである。

最後に、一二六二年の反タタール暴動に関する叙述をみよう。この年北東ルーシ諸都市においてイスラム教徒のタ

タール税徴収請負人に対する大規模な暴動がおき、徴収人が追放あるいは殺害される事態になったのであるが、これについてはすでに論じたことがあるので、ここで詳しくは述べない。⁽²⁷⁾アレクサンドルのこの蜂起に対する関わりについて考えるとき、問題となるのはかれがこれに直接に関与していたかどうか、あるいはそれを呼びかけたとする一部の年代記(『ウスチュグ年代記』など)の記述が正しいかどうかということに集約されるが、これについてのパシュートの判断は、結論的にいえばおおむね妥当と考えられる。かれはアレクサンドルが蜂起を呼びかけたり、それを指導したりすることは、それまでの経歴からしてありえないことと考えている。かれは次のように記す。「アレクサンドルは、民会の警鐘が広大な地方のすべての都市に鳴り響くのを聞いた……、この民衆の激発を知って、かれは喜びと深い戦慄の念の入り交じるのを覚えた。」⁽²⁸⁾歴史上の人物の感情にまで立ち入って描写するのが歴史家の務めであるかどうかはともかくとして、これはときに歴史家にも要求される無理のない想像力といってよいであろう。

パシュートのこの点に関する叙述で問題なのはむしろ別のところにある。まずかれは上の短い引用にもあるように、蜂起をルーシ、あるいは北東ルーシの全都市を巻き込んだものと考えているが、そのように伝えるのは一部の後代の年代記である。初期の年代記(たとえば『ラヴレンチー(スーズダリ)』はロストフ、ウラジーミル、スーズダリ、ヤロスラヴリの四都市しかあげていない。それゆえ厳密に言えば、「すべての都市」とは断定できないのである。次に、かれは徴税請負人をモンゴル本国のクビライ・カーンから派遣されたものと考えているが(これはナソーノフ説に従ったものであろう)、別稿ですでに指摘したように、やや無理のある解釈である。またかれが一方では、アレクサンドルがクビライとキプチャク・カン(ベルケ)との間の対立に期待しつつ自ら決断して素早くオルダーに出かけ、カンに事情を説明してありうべき懲罰という不幸を避けようとしたかのように記しながら、他方では、公が「カン・ベルケ

の召喚にに応じて」オルダーへ急いだと記すのは、矛盾とはいえないにせよ、説明不足の感は免れないであろう。そして最後に、もつとも問題なのはパシュートが、オルダーに向いたアレクサンドルがこのときカンにタタール税徴収の義務にして権利をルーシ諸公自身の手に移すよう説得しようとしたとする点である。そのようなことは史料にはまったく記されていないのみならず、この義務と権利が実際にルーシ諸公に引き渡されるのはバスカク制廃止の時期の問題と関わってくるのだが、早くみても一三世紀末、場合によっては一四世紀に入ってからだというのが多くの研究者の考えるところなのである。⁽²⁹⁾

以上にパシュートのアレクサンドル・ネフスキー論についてみてきた。ここで明らかになったのは、すぐれた歴史家であるかれにも問題になる点は少なからずあること、それはおそらくは研究対象の英雄という評価があまりに強く定まっていることからくる、避けるのがきわめて難しい結果であろうこと、その意味でその研究にはより一層慎重な態度が要請されるであろうことである。(ソヴィエト史家でもう一人シャスコリスキーが重要であるが、かれの注意は主にスウェーデンを中心とする西方カトリック勢力との戦に向けられているので、本稿で特別に論じることはしない。)

(四) L・N・グミリョフ

パシュートがやや難はあるものの、正しく歴史史料というものから出発しようとしていたとすれば、これと対照的なのがL・N・グミリョフである。独特なエトノス理論に基づき、その立場からいわば自らの思想の命ずるまま、あたかも想像力の飛翔するがままに歴史事象に接近するこの思想家にここで関わる必要があるかどうか、いささか疑問

であるが、その影響力の大きさを考えるとき、⁽³¹⁾かれにふれずにすますことはやはり問題となる。とくにかれがロシア史におけるアレクサンドル・ネフスキーの役割をきわめて大きなものとして重視し、またそのアレクサンドル論が独特でありつつも、全体としてはアレクサンドルの聖化、英雄化を推し進めるものでしかないことを考慮に入れるとき、これに言及せずには済まされなくなるのである。

グミリョフはその独特なエトノス生成史論からロシア史の分析へとむかうのであるが、ここではかれの理論そのものについてはふれない。⁽³²⁾ただそのアレクサンドル論についてのみ検討する。⁽³³⁾

まずモンゴル（バトゥ）の大遠征とルーシとの関連についてのかれの見解をみると、この遠征によって引き起こされた「ルーシの滅亡」（ここでグミリョフは、いうまでもなく、今日では冒頭部の断片でしか伝わらない、おそらくはバトゥの侵入直後に書かれた『ルーシの地の滅亡の物語』⁽³⁴⁾を念頭においている）は、ルーシの分裂や諸公間の内紛のゆえではなく、また「野蛮な」隣人（ポーロヴェツ）やモンゴル人そのもののゆえでもなく、ルーシが当時その民族生成史上の最終段階にあつたために起つたことであるとする。ルーシはエトノスとして消滅しつつあつたがゆえに「滅亡」に瀕したとするわけである。ここには歴史を現実から内在的に理解するというのではなく、予め設定された「理論」から説明するという、かれに典型的な、いわば超歴史的な方法がよく現れている。

グミリョフによれば、モンゴルの侵入について考察するときに注意すべきは、ルーシはこのときモンゴルによって「征服」されたわけでも、それに「隷属」したわけでもないことである。何よりも、モンゴルにはルーシを征服しようという意図がなかったのである。モンゴルの敵はポーロヴェツであり、かれらはそれを追つてルーシを通つたにすぎない。このときルーシが抵抗したことが不幸を招いた。抵抗さえしなければ、それは安全であつた。抵抗したウラジ

ミル大公ユーリーの戦死後に大公位に登ったヤロスラフは、反抗を控えたことで北東ルーシをそれ以上の悲劇から救った。

さらにモンゴルにはルーシを完全に荒廃させるだけの兵力がなかったことにも留意する必要がある。それは精々三万、馬匹一〇万程度で、これまでは時には何十万人とするなど過大に評価されていた。ルーシの被害も過大に見積もられてきた。遠征は征服を目指したのではなく、精々のところ「襲撃」にすぎなかった。それでもルーシが「滅亡」の淵に立たされたのは、愛国心の低下という現象に現れた「古ルーシ・エトノスの「消滅の」危機」のゆえであった。しかしそれでも一気に消滅には至らず、むしろ逆にそれに代わる新たなエトノス「新ロシア」の誕生に至ったのは、まさにアレクサンドル・ネフスキーのおかげであった。

ではグミリョフにとってアレクサンドルの功績は具体的にどの点にあったのか。いうまでもなく、タタールの襲撃を受けて弱体化したルーシを背後から教皇庁によって糸をひかれたドイツ人とスウェーデン人の攻撃から守ったことである。他方アレクサンドルはバトウとは同盟を結んだ。それは同盟であって服従ではなかった。そもそもキプチャク・カン国は兵力を四千しかもたず（多くは東方へと去っていたのである）、ルーシを支配する力はなかった。両者が結びついたのは、ともに西方カトリック世界を敵としていたからであった。ルーシもモンゴルもカトリックとは肌合（コムブリメンタルノスチ）が合わなかった。八〇〇万の「東欧」（ルーシ）人が四千のモンゴル人に服したのは、ひたすらカトリックの侵略に対抗するためにほかならなかった。アレクサンドルの政策は、南西ルーシにおいてカトリックと同盟したダニール公のそれと対照的であった。アレクサンドルはロシアを直接的に救ったわけではなかったが、モンゴルとの同盟というその先見の明ある政策で、生まれつつある「新ロシア」をエトノス生成史の孵化段階に

おいて保護し、「受胎から誕生」を保証したのであった。

以上がグミリヨフのアレクサンドル論の概要である。すでにふれたように、それはそもそも自らの構想した「理論」から歴史に接近するという点で歴史学的方法とは相いれないものであったが、具体的にかれが論ずる点がどのように史料に基づかないものであるのか、以下にみる。グミリヨフの見解はこれもすでにふれたヴェルナツキーらユーラシア派のそれを思わせる部分が少なくないが、ヴェルナツキーが曲がりなりにも史料に依拠しようとしたのに対し、グミリヨフは史料から大きくかけ離れていることが示されるであろう。

まず、グミリヨフはバトウの侵入が単なる「襲撃」にすぎず「征服」ではなかったとして、侵入の被害やその程度をできるだけ低く描こうとしているのであるが、これを史料的に裏付けるといふ志向はかれにはない。しかるに同時代の年代記は、例外なくバトウの侵入をルーシの悲劇と捉えている。『ラヴレンチー（スーズダリ）』や『イパーチー年代記』のように、被害にあつた地方の年代記だけでなく、『ノヴゴロド第一年代記』のように直接侵入をうけなかつた地方の年代記も、ウラジーミルや南西ルーシ地方の惨劇について相互に独立に、しかし同じ様な筆致で描いているのである。確かに、諸年代記の嘆きを額面通りに受けとつてよいかどうかは問題になる。被害を受けた当事者の感情にはそれなりの誇張もあらうからである。しかしだからといって、根拠なくして被害がほとんどなかったと主張するのも正しくはないであらう。これまでの研究者は史料が残されるにいたつた、あるいは残されなかつた理由をも含めて、また考古学資料を駆使してあらゆる方向から検討しつつ、それに基づいた結論をえようと努力してきたことを、グミリヨフはあつさり⁽³⁵⁾と無視しているのである。

次に、アレクサンドルの父大公ヤロスラフは、カラコルムからの帰路不審な死をとげるのであるが、それについて

のグミリヨフの見解も、興味深いといえ問題である。それによれば、大公ヤロスラフはバトウをさしおいて直接大カーン・グユクと同盟を結ぶべくカラコルムへむかったが、ルーシのモンゴル帝国とのこうした同盟は西欧カトリック世界にとっては大きな脅威であつた。それゆえカトリック陣営はルーシに手を回し、かくしてルーシには「ラテン人の支持者」が少なからず現れることとなつた。その一人に貴族フォードル・ヤルノヴィチがおり、かれはグユク・カーンの母にヤロスラフがひそかにカトリックと結び、モンゴルを叩こうとしていると誣告した。疑うことを知らぬ「シベリア女性」はこれを信じ、ヤロスラフに毒を盛らせた。「犯罪が明るみに出た。それは亡き公の子供たち―アンドレイとアレクサンドル―をグユクから離れさせた。(フォードル・ヤルノヴィチはヤロスラフの子らにより捕らえられ、サーベルで斬り殺された。誣告者は己が裏切から何一つ得るところがなかった。)かくして、父の殺害者に助力したくはないという自然の感情がアレクサンドル・ヤロスラヴィチを「グユクに敵対する」バトウの支持者とした。アレクサンドルはバトウからの同盟締結の提案にただちに応じた……かくしてルーシに『親モンゴル』派が形成されたのである。」⁽³⁶⁾

大公ヤロスラフの死因については、すでにプラノ・カルピニがヤロスラフが皇帝の母の招待を受け、かの女手ずからのもてなしを受けた後発病し、七日後に死去したこと、その遺骸は「青ずんだ灰色に」変色していたこと、そのため「誰もかも、タルタル人が公の領土を自由また完全に占領しようとして、公をそこで毒殺した」と考えたことを記している。⁽³⁷⁾ また『スーズダリ年代記続編(アカデミー写本による)』(『ラヴレンチー年代記』第三部、付録)もヤロスラフがタタールの地で「非業の死」を遂げたことを伝える。⁽³⁸⁾『ソフィヤ第一年代記(古輯)』はヤロスラフのことを「ツァーリに中傷」したのが「フェオドル・ヤルノヴィチ」某であることを伝えている。⁽³⁹⁾『ガリーチ・ヴォルィニ年代記』(「イ

パーチー年代記』第三部）も、ダニール・ロマーノヴィチ公のタタールへの屈服を嘆くなかで、スーズダリのヤロスラフが毒薬で殺害されたと記している。パシユートは年代記の「フョードル・ヤルノヴィチ」と、カルピニが別の箇所⁽⁴⁰⁾で記しているヤロスラフの「騎士の一人テメル」とを同一人物と推測している。

史料状況が以上の如くであるから、ヤロスラフが毒殺されたとグミリョフが考えるのもある程度納得がいく（疑いがない事実であるかのように断定しているのは問題であるが）。しかし、かれが記するようなさまざまなディテールについてはどうであろうか。大公ヤロスラフがバトウをさしおいてカラコルムの大カーンと同盟を結ぼうとしたなどと、どこから言えるのであろうか。フョードル・ヤルノヴィチがカトリック勢力の回し者であることはどこに記されているのか。フョードルがアレクサンドルらによって捕らえられ、サーベルで斬り殺されたというのはどこに書かれているのか。アレクサンドルが父親を殺害したグユクの母親が憎くてバトウに接近したというのは、事態を矮小化してはいないかなど疑問が尽きないのである。

同様のことは一二五七年の出来事に関するかれの記述にもいえる。すでに別稿で詳しく記したように、このときノヴゴロド民は徴税のために人口（戸口）調査にやってきた調査人たちに対し蜂起に立ち上がる。当時大公となっていたアレクサンドルはこれを鎮圧し、同市の公につけていた息子のヴァシーリーを蜂起に何らかの形で関与したとして捕らえた。この事件をグミリョフは次のように解説する。それによれば、蜂起を指導したヴァシーリー公は「飲ん兵衛」で「愚か者」である。アレクサンドルは蜂起の指導者たちを「残酷に処罰した」。かれはかれらの「眼をえぐり出した。人がもし周囲で起っていることを見ないならば、かれには眼など不要だと考えたのである。」⁽⁴¹⁾この、いわば小説的興味をそそる解説も残念ながら史料的裏付けを欠いている。ヴァシーリーが酒好きであるかのような記述はどこに

もみられない。少なくともグミリヨフは典拠を示していない。にもかかわらず、かれはみずからのこの「創作」がよほど気に入ったのかさらに続けて、父は数年後「酒が原因で」⁽⁴³⁾「息子」が「静かに安らかに死ぬ」がままにまかせたと記している。

アレクサンドルの死についてのかれの記述も問題である。ある箇所では、アレクサンドルの死に「ドイツ支持者の陰謀」がからんでいる可能性があるとする。他方別の箇所では、アレクサンドルはヴォルガ川河畔のゴロジュツで死亡したが、「そこにはドイツの手先が入り込むことは不可能であったし、タタールにとってはかれは友であり、同盟者として貴重な存在であった」とし、毒殺説は捏造であると結論づけているのである。⁽⁴⁴⁾単なる見解の変化というのではなく、諸ディテールについては史料の有無に関わらず、勢いに任せて思うがままに書いていると言ったほうがよいようにみえる。これもかれのいわば超史料的、ないし史料外的な手法、いづれにしても非歴史学的な手法の産物といえるのである。⁽⁴⁵⁾

(五) J・L・I・フェンネル

歴史家は、いうまでもなく史料そのものの歴史的価値を問い、史料批判を行う。本稿との関連でこれをとくに行っている一人がイギリスの中世史家J・L・I・フェンネルであろう。かれは諸年代記の記述の綿密な比較検討を通じてさまざまな事件の復元をめざす研究を多数発表しているが、そのなかにバトウの侵入やモンゴル支配下のアレクサンドル・ネフスキーの行動が年代記においてどのように扱われているかを論じた研究がある。

たとえば、かれは一九七三年に「アンドレイ・ヤロスラヴィチと一二五二年の権力闘争」という論文を発表してい

るが、これはすでに記したような、アレクサンドルが弟で時のウラジミール大公であるアンドレイに代わって自ら大公となった経緯を、諸年代記の綿密な分析を通じてたどったものである。かれはここで、事実はいわゆるアレクサンドルよりの年代記や『伝』などの史料が伝えるところとは大分異なることを主張している。その四年後には、かれはバトウの侵入についても同様の試みを行っている。⁽⁴⁷⁾ こうした研究をまとめる形で一九八三年に出したのが、『中世ロシアの危機。一二〇〇—一三〇四年』である。⁽⁴⁸⁾ まずはこの著書におけるかれのアレクサンドル論を追ってみたい。

本稿はアレクサンドルのとくにモンゴル支配との関係に注目している。フェンネルの論も同様である。しかしフェンネルの著書では、いうまでもなくそれ以前の、つまりアレクサンドルが大公となってキプチャク・カンと直接関係するようになる以前の、ノヴゴロド公時代の扱いもその後の部分と有機的に関連しており、また内容的にもきわめて独創的であるので、まずその部分を簡単にみておく。

アレクサンドルが単独の実質的なノヴゴロド公となったのは一二三六年、かれが一六歳のころであらう。⁽⁴⁹⁾ それ以前にもノヴゴロド公であったことは何度かあるが、それは父ヤロスラフや兄フョードルなどと共にであり、少なくともかれ自身の目立った活躍は伝えられていない。かれがノヴゴロド公として実質的に北西地方の防衛を担ったのは、リヴォニアのドイツ騎士団やスウェーデン、またリトアニアからの脅威が次第に醸成された時期でもあった。かれはミндаウガス大公下のリトアニアのポロツク方面への進出を抑えることはできなかったが、西方諸勢力のプスコフ・ノヴゴロド方面への進出を阻止することに成功したことは、すでに周知の通りである。

なかでも一二四〇年と一二四二年のスウェーデン人、ドイツ人の攻撃に対するかれの戦が華やかに喧伝されていることも、すでに記した通りである。フェンネルの通説批判の重要なポイントもまさにこの点に関わっている。かれに

よれば、諸史家のこれまでの見解はもっぱら『伝』に依拠したものである。『伝』では「二つの比較的小さな勝利」が
あたかも英雄叙事詩的な規模に膨らまされているのである。⁽⁵⁰⁾

こうした立場から、著者は『ノヴゴロド第一』、『ラヴレンチー（スーズダリ）』、『ブスコフ第二』、『ソフィヤ第一』
などの年代記を比較検討しながら、一二四〇年の攻撃が教皇庁によって指導されるスウェーデン人、ドイツ人、デー
ン人の共同作戦とする見方を批判し、さらにそれがノヴゴロド地方の併合をめざしたのではなく、フィンランドと
カレリアの支配をめぐるそれまでのロシアースウェーデン間の一連の衝突の続きにすぎなかったことを主張した。か
れによれば、『ノヴゴロド第一（古輯）』は夥しい数の敵が倒れたとする一方、ノヴゴロド側の損害を二〇人と驚くほ
どに低く伝えている。他方ノヴゴロド以外の年代記（『ラヴレンチー（スーズダリ）』など）やスウェーデン側史料は
戦そのものについてまったく伝えることがない。こうしたことから、大会戦が行われたという結論は信頼しがたいと
いうのである。⁽⁵¹⁾

一二四二年のチュード湖上のドイツ騎士団に対する勝利についても著者は偶像破壊的である。それによれば、『伝』
や後代の諸年代記の詳細な描写の多くは「明らかに著者たちの想像の果実以外の何ものでもない。」もつとも、同時代
の記録もそれほど助けにはならない。たとえば、『ノヴゴロド第一（古輯）』は「四〇〇人のドイツ人が殺され、五〇
人が捕らわれ」、「無数のチュジ「エストニア人」が倒れたとするが、当時騎士団が戦場に送りうる騎士は一〇〇人を
超えなかったのである。しかもその多くは、おそらくその頃クルラントで別の敵と戦っていたとみられるというの
である。いずれにせよ、一三世紀末に書かれた『リヴォニア韻文年代記』は二〇人の騎士が倒れ、六人が捕虜となつ
たと伝えているという。⁽⁵²⁾ こちらはこちらで損害を低く伝えようとしていたと考えることもできるが、どちらにしても

ロシア人のドイツ人に対する劇的大勝利とか、ロシア史における決定的転換点とするのは明らかに行き過ぎだということである。

これとの関連で興味深いのは、同じく同時代的な史料といえる『ラヴレンチー（スーズダリ）』においてはこの戦の記述がきわめて簡潔で、しかも中心的役割はアレクサンドルというよりはむしろアンドレイに割り振られているようにみえることである。⁽⁵⁴⁾これは一つには、スーズダリ地方の者にとって戦は少なくともその直後にはそれほど大きな意味をもっていなかったことを示しているが、もう一つには、年代記編纂の問題を示唆してもいる。すなわち、親アレクサンドル系の記述が後に親アンドレイ系の記述に取って代われ、しかもそれがその後の親アレクサンドルの編纂者の目を、理由は不明であるが免れた可能性があるということである。あるいは、親アンドレイ系の記述が原初的であって、大公位争いに最終的に勝利したアレクサンドル側の編纂者の改訂の手を、これも理由は不明であるが免れたということもありうる。いずれにせよ、アレクサンドルの勝利が全国家的大勝利とは少なくとも一部の者には認識されていなかった可能性があるのである。フェンネルはここを鋭くついたといえる。

フェンネルのアレクサンドル論の核となるのは、アレクサンドルの大公位就任（一二五二年）をめぐる状況の解釈であろう。このときには早い時期の年代記断片と考えられる『帝都の総主教ニキフォールの簡略年代記』^{レトドセツ}のきわめて簡潔な記述によれば、ヤロスラフ大公が「九年間大公位にあった」後（の一二四六年）にモンゴルからの帰国途上没し、その跡を弟のスヴァトスラフが継ぐ。しかし一年後にはかれは「ヤロスラフの子」つまり自身にとつては甥にあたるアンドレイによつて追われている。⁽⁵⁵⁾フェンネルはこれを、後者による軍事クーデタとみているが、いずれにせよ、その結果新大公アンドレイ、その兄アレクサンドル、そして両者の叔父で前大公のスヴァトスラフが相次いでサライへ

でかけ、それぞれの立場の正当性をカンに訴えることになる。カンの裁定なしにはだれ一人確固たる立場を築くことができなかったのであろう。そのうちアンドレイとアレクサンドルはバトウの命でさらにカラコルムへ向かい、グユク・カーンの寡婦、オグルーガイミシュの決定でアンドレイがウラジーミル大公位を、アレクサンドルが「キエフと全ルーシ」を獲得することになる。この決定をどうみるかについてフェンネルはパシュートに従って次のように考えている。それによれば、決定の背景にはカラコルムとサライ間の対立があった。すなわち、オグルーガイミシュはバトウと敵対しており、しかもアレクサンドルがバトウと近い関係にあるとにらんでいたために、反バトウという意味でアンドレイに肩入れしたのだという。スヴァトスラフの動向については何も伝えられていない。ただかれが一二五三年に没したことだけが知られている。⁽⁵⁶⁾

両兄弟は一二四九年の冬ルーシに帰還する。アンドレイ大公の五年にわたる治世についてはほとんど何も知られていない。その間両公の間に何らかの対立があったかどうか不明である。あつたとしても、後の大公の年代記作者たちがそれに関する記述を削除した可能性が考えられる。いずれにせよ、一二五二年に両者間に破局が訪れる。この年アレクサンドルがオルダーへ向かい、その間タール部隊が大公国を襲い、大公アンドレイが国外へ逃れる。そしてオルダーから戻ったアレクサンドルが大公位についたのである。はたして何が起ったか、事態の急変について諸史料が伝えることは少ない。『伝』はただバトウがアンドレイに(唐突に)怒りを発し、ネヴリユイ麾下の部隊を送ってスーズダリの地を討たせたとするばかりである。そこにはカンの怒りの理由も、アンドレイが大公であつてアレクサンドルがそれにとって代わったということも記されていない。⁽⁵⁷⁾

この間の事情については、既述のごとく、フェンネルが特別の論文において詳しく論じている。そこでそれを参考

にしな以下にこの点について検討してみたい。フェンネルによれば、この件についての史料の記述は基本的には二つに分けられる。一つは『ラヴレンチー（スーズダリ）』にみられるもの、他は『ソフィヤ第一年代記（古輯、オボレンスキー写本）』にみられるものである。⁽⁵⁸⁾

その他の記述（『ラヴレンチー（スーズダリ）』、『ソフィヤ第一』両年代記と同じく、事件の起きた時点に比較的近い時期に執筆された『ニキフォルの簡略年代記』、『スーズダリ年代記続編（アカデミー写本）』、『ノヴゴロド第一』（新輯、コミシオンヌイ写本）』、『ノヴゴロド第四』などの年代記は断片的、簡潔で、多かれ少なかれ類似の内容をしている。⁽⁵⁹⁾ また多くの後代の編輯本も一二五二年の経緯の「歴史的」復元という意味ではあまり参考にならない。（そうしたもののなかでたとえば、『一四七二（あるいは一四七二）年の集成（ニカノロフスカヤ年代記）』は『ソフィヤ第一』の記述とほぼ一致する。『一四七九年のモスクワ大集成（一五世紀末のモスクワ年代記集成）』も『ソフィヤ第一』のやや短縮された版である。『エルモリーン年代記』、『ニコン年代記』、二つの『トヴェーリ年代記』（『ロゴシユキヤ年代記』、『トヴェーリ年代記と呼ばれる年代記集成』）なども、上の二つの基本的な年代記の記述やそれを受け継いだ諸集成の繰返しや、混合、またときにはそれらを膨らませたものである。⁽⁶⁰⁾ それゆえここではもっぱら上の二つの基本的な年代記について見ていく。

『ラヴレンチー（スーズダリ）』一二五二年の項は次のようになっている。

「六七六〇年、ノヴゴロド公アレクサンドル・ヤロスラヴィイチがタタールの下へでかけた。かれらはかれに全兄弟中の最年長者の地位を与え、大いなる榮譽とともに帰国を許した。同年、アンドレイ・ヤロスラヴィイチ公がおのが貴族らと相談し、ツァーリに仕えるよりは逃げる方がよいと考え、おのが公妃、おのが貴族らとともに見知らぬ地へと逃

げた。タタールはかれの跡を追ひ、ペレヤスラヴリの町の近くで追いついた。だが神とかれの父の祈りがかれを守った。タタールは各地に散開し、ヤロスラフ公妃を捕らえ、その子らを虜にした。また軍司令官のジドスラフを打ち殺し、公妃をも殺害した。ヤロスラフの子らは虜として「サライへ」送り、無数の民と馬と家畜を連行し、多くの悪事を働いて去った……、同年、大公アレクサンドルがタタールからヴォロジメルの町へ帰着した。かれを黄金の門の傍らで府主教と全修道院長、町人たちが十字架をもつて出迎え、かれの父ヤロスラフの「大公の」座に据えた……ヴォロジメルの町とスーズダリの全土に大いなる喜びがあつた。⁽⁶¹⁾」

この記述は以下のように四つの部分に分けることができる。(一)アレクサンドルのオルダー行きと、カンによるかれへの兄弟中の「最年長者」の地位の付与。(二)アンドレイの逃亡。(三)タタールのアンドレイ襲撃と後者の危機脱出。タタールによるヤロスラフ公妃殺害。(四)アレクサンドルの帰還と府主教らによる歓迎。こうした構成から、『ラヴレンチー(スーズダリ)』の記事はいくつかの異なる記述を組み合わせて作成されたものであることが推測される。まず、(一)、(四)と(二)、(三)との間には、それぞれの作者のスタンスに明らかな差がある。すなわち(一)と(四)が親アレクサンドルの立場から記されているとするならば、(二)と(三)はアンドレイに同情的なのである。次に、(二)と(三)の間にも論理的に大きな溝がある。アンドレイは「見知らぬ地」へ逃げているにもかかわらず、タタールはこれを追ひ、追いついていとされているからである。また(三)の冒頭で唐突にタタールが登場するのやや説明不足である。タタールが何故アンドレイを追うのか、アンドレイが服従を拒否し逃亡したからであると考えられるが、逃亡したことを知ったタタールがそれから追いかけて始めてこれに追いつき、襲ったというのは現実的ではない。そして最後に、(三)の内部でも不整合が目につく。すなわち、アンドレイを追っているはずのタタールがヤ

ロスラフ（アレクサンドルとアンドレイ兩人の弟でトヴェーリ公）の妻や子らを捕らえ、公妃の場合は殺害までしたとされているが、ここは当然説明が求められるところである。ここは論理的には逃げたアンドレイではなく、スーズダリの地に残ったかれの同盟者（と推測できる）ヤロスラフ・ヤロスラヴィチこそがタタールに追われ、その妻たちが悲劇にあつたと考えるならば、通りがよくなるところである。

いずれにせよ、（一）と（四）が論理的には結びついており、フェンネルによれば、この二つの部分はアレクサンドル大公の年代記とでもいふべきものに起源をもっている。他方、（二）と（三）は後代の記述で、やや不細工な挿入である。（二）は後にふれるアンドレイの私的年代記（『ソフィヤ第一年代記』の当該箇所）にみられる事実の、後代における改作とみることができ。『ラヴレンチー（スーズダリ）』ではアンドレイの逃亡の真の理由（すなわち『ソフィヤ第一年代記』に見られるようなタタールとの戦における敗北⁽⁶²⁾は削られており、とつてつけたような理由（ツァーリに仕えるよりは、逃げるほうがよい」とアンドレイが考えたこと）に代えられている。真の理由を隠す必要があつたのであろう。（三）のヤロスラフの妻らの悲劇の運命についての記事は、おそらくヤロスラフ公の私的年代記（初期のトヴェーリ系年代記、すなわち上記『ロゴシュキー年代記』と『トヴェーリ年代記と呼ばれる年代記集成』）からの抜粋であらうと推測される。

さてそこでアンドレイの立場をより明確に示している『ソフィヤ第一年代記（古輯、オボレンスキー写本）』の同事件に関する記述をみてみる。以下に訳出しよう。

「同年〔六七五九年〕⁽⁶³⁾、ネヴリユイとコチャ、そして勇敢なるオラブガが多くの軍司令官とタタールの軍勢を率いてスーズダリの地へ、大公アンドレイ・ヤロスラヴィチに向つてやつて来た。大公ヤロスラフ崩御の後、ヴォロジ

メル大公位はその子アンドレイ公に与えられていたのである。それはボリスの日の前日であった。神を知らぬタートルはヴォロジメル付近でクリヤジマ川の浅瀬を渡り、ペレヤスラヴリの町を目指してゆつくりと進んだ。翌朝、ボリスの日に大公アンドレイはおのが部隊を率いてかれらに立ち向かった。両軍が衝突し、激しい戦が起った。われらの罪が増し加わったために神の怒りが発せられ、汚れし者たちが勝利し、大公アンドレイは辛うじて逃げおおせた。かれは大ノヴゴロドへやって来たが、ノヴゴロド民はかれを受けいれなかった。そこでかれはブスコフへ向ったが、そこには短期間しかいなかった。おのが公妃のくるのを待ったのである。かれのもとへ公妃がやって来ると、大公アンドレイは公妃とともにニエムツイの町コルイヴァンに向った。かれはそこに公妃を残して、自身は海の向こうのスヴェイ「スウェーデン」の地に渡った。スヴェイの君主はかれを迎え、榮譽とともにかれを受け入れた。かれ「大公」はコルイヴァンへ人をやり公妃を呼び寄せた。かれはスヴェイの地にしばらくの間留まったが、その後ニエムツイとの戦闘で戦死した。神を知らぬタートルはペレヤスラヴリの町を荒し、そこからおのが地に戻っていった。⁽⁶⁴⁾

一五世紀に成立したと考えられるこの『ソフィヤ第一年代記』⁽⁶⁵⁾では、ネヴリユイ軍の攻撃は『ラヴレンチー（スーズダリ）』のそれとはまったく異なる様相をみせている。ここでは後者に比しはるかに整合的でまとまった描かれ方がされている。それはまたアンドレイを正当にも「大公」と呼んでおり、かれにたいしはつきりと同情的である。そこではタタール軍の襲来の日時が明記され、それがクリヤジマ川の浅瀬を渡ったことを伝えるなど記述は具体的である。またアンドレイとその公妃の逃亡経路、逗留地、目的地なども明記されている。これらのことはそれが同時代人の手で書かれたことを物語っているようにみえる。場合によっては、アンドレイの側近の手で書かれた可能性もある。⁽⁶⁶⁾

かくして、『ラヴレンチー（スーズダリ）』、『ソフィヤ第一』における一二五二年の事態に関する記述は少なくとも

三つの別個の諸公年代記に起源をもつことが推測されよう。すなわち、ヤロスラフ大公の三人の子、アレクサンドル、アンドレイ、ヤロスラフそれぞれの年代記である。三人のヤロスラヴィチはそれぞれ、一二五二～一二六三年、一二四八～一二五二年、一二六三～一二七一年にウラジーミル大公位に就いている。この時期にウラジーミル・スーズダリを中心編まれた年代記はそれぞれの大公の行為を正当化し、それぞれの大公を称えるという傾向をもっていたことは否定できない。それゆえ大公が代われば、年代記記事の調子にも変化が生じざるを得なかったと考えられる。三人がオルダーに対するその態度において異なっていたと考えられたとするならば、なおさらのことであつた。

一二三〇年代から一二七〇年代のこの地方における年代記編纂の様子は『ラヴレンチー(スーズダリ)』、『トロイツカヤ』、『スーズダリ続編(アカデミー写本)』や、後代の諸年代記(たとえば『ノヴゴロド・カラムジン』や『ソフィヤ第一』、『ノヴゴロド第四』また『一四七九年集成』など)から推測することができるが、⁽⁶⁷⁾こうして推測された当時の年代記編纂のあり方は大公位の占有者の交代がもたらす諸変化をよく表わしている。すでに記したように、『ラヴレンチー(スーズダリ)』中の該当部分の記述はアレクサンドルの、『ソフィヤ第一』のそれはアンドレイの、トヴェーリの初期の年代記はヤロスラフ・ヤロスラヴィチの立場を伝えるものであつたのである。

もちろん問題は、時の大公の年代記編纂者たちによる書き替え、修正、編集が不斷に行われていたのに、何ゆえ先の大公の立場を代弁する記述が後々まで保たれ、残されるということがあつたのかということである。たとえば、アレクサンドル公の年代記記述者は先の大公アンドレイ期の記事中の、自己の君主であるアレクサンドルに不都合な箇所は間違いなく削除するか、書き替えたであろうと推測できる。同様に次の大公ヤロスラフの記述者はアレクサンドルへの称賛の度合いを弱め、ヤロスラフ公の同盟者であつたアンドレイ公への「不当な」扱いに修正を加えようとし

たであろう。そしてこうした修正と書き替えの歴史はその後もかれらの後継者や子孫の時代に至るまで続き、やがて過去に起ったことの詳細にその時の記述者が大きな関心をもたなくなつたときに、初めて過去の出来事に関する記述は確定されることになつたと考えられる。

過去の原初的な記述が後々まで保たれる理由にはいくつか考えられる。後代の記述者・編纂者がそれほど厳しく点検しなかつたとか、あるいはかれらの不注意もあつたかもしれない。あるいは年代記編纂が各地で行われるようになるにつれ、必ずしも中央の意図が地方に浸透せず、偶然地方において残される結果になつたことも、また逆に地方中心地の積極的、野心的な意図から意識的に保存されるようになったということもあつたかもしれない。

一二五二年記事に関して具体的に考えると、アンドレイの年代記記事が『ソフィヤ第一』に保たれた経緯は、フェンネルによれば、次の如くである。まず、アンドレイ公の年代記はスーズダリ・ニジニーノヴゴロドの地の年代記に受け継がれたと考えられる（ニジニーノヴゴロドはアンドレイの世襲領国であり、スーズダリはかれが一二五六年に国外から帰国した後にアレクサンドルから与えられたと考えられる）。すなわち、一四世紀中頃にこの地を領有したドミトリー・コンスタンチーノヴィチ公（スーズダリ公）⁽⁶⁸⁾はアンドレイ公の玄孫であつたが、一三六〇年にキプチャク・カンから大公のヤルルクを獲得するといふことがあつた。その際に当地の年代記編纂が活性化したが、おそらくはこの地で保たれた親アンドレイの記述がその後仮説的な『一四四八年集成』に受け継がれ、それを『ソフィヤ第一年代記』が採用し、今日に伝わることとなつた。こうして親アンドレイの記事が後代に残されることになつたというのである。あくまでもフェンネルの仮説であるが、傾聴すべき見解であるといえよう。

さてテクストの継承関係の真相はさておき、これまでの検討から『ソフィヤ第一』の一二五二年の項が原初的な形

態を少なくとも部分的には伝えていることは明らかである。それはウラジミールや、それを継承したモスクワという中央の意向に沿った記述が一般的となる傾向の中で、中央の絶えざる監視の目をくぐり抜けてきた貴重な証言であるといつてよい。それゆえ史的アレクサンドル像を探索する試みにおいては、こうした反中央の史料を除外することができないことは明らかであろう。『伝』や『ラヴレンチー（スーズダリ）』だけではなく、あるいは逆に『ニコン年代記』など後代のモスクワ的色彩の強い諸年代記ではなく、『ソフィヤ第一』のような史料をも十分に考慮に入れて考えていく必要があるということである。

アンドレイ系年代記の存在は、アレクサンドルの親モンゴル路線が当時の人々にとって必ずしも承服できるものではなかったことを証言している可能性がある。タタールとのあからさまな同盟関係はモンゴル支配が樹立された直後のルーシにおいては、同時代人の全面的な承認は得られなかったと考えられる。おそらく一三世紀六〇年代までのルーシ人の感覚はモンゴルの支配にたいし消極的とはいえず、明らかな承認を与えた後代（少なくとも一三世紀末から一四世紀後半にかけて）の年代記作者たちの感覚とは、大きく異なるものであった。このような一般的雰囲気があったからこそ、公式的な『ラヴレンチー（スーズダリ）』はまずネヴリユイの襲撃があったこと、続いてそれに対し大公アンドレイが果敢に抵抗し、そして敗北・逃走したことを記さなかったのである。すなわち、当時のルーシ人にとってはタタールの暴虐ぶりは明らかだったのであり、アレクサンドル系年代記作者にとっては、それに抵抗をもって対することをしなかったアレクサンドルの迎合的態度が浮き彫りになるような記述は好ましくなかったのである。『ラヴレンチー（スーズダリ）』は突如としてルーシを襲ったネヴリユイ軍の攻撃の意図を理解できず（あるいはむしろ、理解しながらそれを隠そうとして）、大公アンドレイが「ツァーリに仕えるよりは逃げるほうがよいと考え」、そして実際に

カンの支配下から脱走したためにネヴリユイの攻撃を受けたとしたのであったが、それは後になって自身の立場からアンドレイの行動を説明してみせようとした苦肉の策にほかならなかったのである。

アレクサンドル・ネフスキーは多くの研究者の描くように、時の状況のなかで何よりもまず「国民」の利益を考え、そのため止むを得ずモンゴルに屈し、しかし西方の敵の攻撃には敢然と立ち向かった愛国者・英雄、賢明なる為政者であるというよりは、自ら積極的にモンゴルのカンと結び、それを利用して弟を追いつ落とし、代わって大公位を手に入れ、モンゴルのための徴税制度の導入を促進した張本人、かれこそがモンゴルのルーシ支配を可能にし、具現化した人物とするフェンネルの立場は一見して奇抜で聖像破壊的ではあるが、上のような史料分析に基づいており、本稿の筆者にはより実像に近いもののように思われる。⁽⁶⁹⁾

最後に付け加えておくべきなのは、以上のフェンネルの考察から『ラヴレンチー（スーズダリ）』は不正確で、『ソフィヤ第一』は正確であるという結論を導き出すわけにはいかないということである。そうではなく、両年代記の当該箇所はそれぞれアレクサンドルとアンドレイの立場に立つて一二五二年の事件を伝えようとしているにすぎないのである。他方、両年代記はそれにもかかわらず、後代の一五、一六世紀の諸年代記に比べれば、当時の状況を相対的に正しく伝えている可能性が高いということが言えるのである。

フェンネルのアレクサンドル・ネフスキー論はソヴィエト時代、とりわけ前世紀三〇年代における（そしてまた今日のロシアにおいても依然として認められる）アレクサンドルの過度の理想化・英雄視の風潮にたいするアンチテーゼとなっており、共感を覚える点が少なくない。しかし言うまでもないことだが、そこに問題点がないわけではない。とりわけ気になるのは、フェンネルの分析が公の政治的行動に極端に集中している点である。かれの分析にはいわば

社会・経済的視点が欠けているのである。たとえば、かれはバトウの侵入時の破壊、すなわちルーシが蒙った被害の程度を低く見ようとしているが、それはかれがこのときの破壊についての諸年代記の記述を考古学研究などの成果により点検することを怠っていることに一つの原因がある。考古学資料は多くの都市や村落の消滅、住民の南部から北東ルーシへの大規模な逃亡・移住などについて明確に物語っている。すなわち、侵入は当時のルーシの社会・経済状況に多大なる変化をもたらした可能性が大なのである。⁽⁷⁰⁾ フェンネルがアレクサンドルをもって「くびき」が始まったとし、その行動を反ルーシ的とみなすのも、この点にたいする配慮に欠けていることに一つの原因があるようにみえる。侵入による大打撃、以前から続く諸公間の内訌、西方からの度重なる軍事攻撃、このような状況下で公が他のいかなる行動の可能性を有していたのか、フェンネルは理解していないとソヴィエトの歴史家たちが批判するのも、一理あるのである。⁽⁷¹⁾

フェンネルのアレクサンドル論は、アレクサンドルが大公位に就任するに至った経緯などに関して、上に示したようにきわめて説得力のあるものであったが、アレクサンドルの治世、またその個性を別の意味で過度に重視するという結果に行き着いているようにみえる。「くびき」のすべての源泉をアレクサンドルの治世に求めるなどは明らかに無理であった。その意味でフェンネルのアレクサンドル論は示唆に富み有意義ではあるが、一つの極端な試論といわざるをえないのである。

二 最近の諸研究

ソ連邦の崩壊後ロシア史学は大きな転換の時を迎えているように思われる。もとより中世史研究の分野において事態が目に見えて劇的に動いているというわけではない。また大きな変化を見せているように思われる場合にも、その方向性はさまざまでこの段階で明確に一つの傾向を指摘できるというわけでもない。むしろかつての画一的な枠組みが取り払われた現在においては、混沌とした状況が支配しているようにみえる。それゆえ本稿のテーマに関しても何か一定の変化を指摘することができないわけではないが、ただアレクサンドル・ネフスキーへの関心が高まっていることはいえそうな気がする。これまでの例であれば、アレクサンドルへの関心の高まりは大祖国戦争などの際のように、国家が外国からの侵略の危険性に晒されるなど危機的状況にあるときにとくに強く認められた。前世紀の九〇年代以降の状況はそれとは異なるが、今回の関心の高まりは体制転換後の社会的混乱と国家的威信の低下を国家・民族の危機とみる民族主義的傾向の増大と関係があるようにみえる。⁽⁷²⁾

最近一〇年ほどに限定しても、アレクサンドル・ネフスキーを対象として取り上げたロシア史研究者は十指を越える。そのなかから主な者を挙げれば、V・A・クーチキン、V・L・エゴロフ、A・N・キルピーチュニコフ、A・A・ゴールスキー、Ia・S・ルリエー、Iu・K・ベグノーフ、I・P・シャスコリスキー、N・ローゾフ、A・L・ホロシケウイチ、I・O・スルミナ、Iu・F・ソコロフなどである。⁽⁷³⁾

以下では、このうち本稿の筆者にとつてとくに興味深く思われるクーチキン、エゴロフ、キルピーチュニコフ、

ゴールスキーをとりあげ、論じてみる。ルリエー、ベグノーフ、スルミナも重要であるが、史料の批判的研究に取り組んだこの三人については、また別の機会にとりあげたい。⁽⁷⁴⁾

(二) V・A・クーチキン

まずクーチキンである。かれは一九九六年の『祖国史』第五号に「アレクサンドル・ネフスキー—中世ルーシの為政者にして軍事指導者」という論文を発表している。⁽⁷⁵⁾

この論文のなかで上に記してきたこととの関連で重要と思われる事柄をとりあげてみる。まず著者によれば、アレクサンドル・ネフスキー公に関しては歴史・伝記小説、絵画、映画、音楽などを通じて広く知られているにもかかわらず、これまで『完全な学問的伝記は書かれていない』という。このことを示すためにかれはいくつかの伝記的事実に注目するが、たとえば、公の母親は誰かという単純な問題についてすら史家の間に深刻な見解の対立があると指摘する。「単純な」というのは『伝』には、当時としては珍しく、母親は「フェオドーシヤ」と名前まで明らかにされているからである。クーチキンによれば、ロシア史学では長いことフェオドーシヤとはトロペツ公ムスチスラフ・ムスチスラヴィチ・ウダートヌイ（「成功に恵まれた」、「強運な」の意）の娘であるとされてきた。ところが一九〇八年に諸公の系譜研究で名高いN・A・バウムガルテンが、フェオドーシヤとはリヤザン公イーゴリ・グレーヴオヴィチ（一九五年歿）の娘であるとする見解を表明して以後、パシュートラ多くの研究者はこの説をとるようになったという。これにたいしクーチキンはこの説が成り立ちがたいことを論じて、旧説の正しいことを主張する。かれによれば、このようにアレクサンドル・ネフスキー研究の指導的な学者たちですら、基本的事実の認識において依然として一致し

ていないのが現状であるというのである。クーチキンはいくつかの認識から、『伝』を中心とする研究で名高いI・u・K・ベグノーフや軍事史家のA・N・キルピーチュニコフらの、伝記的事実上のさまざまな点に関する見解を批判しつつ、本論文で伝記的事実の自身による確認作業を行おうとしている⁽⁷⁶⁾。

たとえば、まずアレクサンドル公の生年については次のように論じる。ベグノーフや多くの研究者は一二二〇年を公の生年とする。一九九五年は公生誕七七五年目の記念の年と言われた。しかしクーチキンによれば、兄のフョードルが同じ母から一二二〇年二月に生まれているので、次のアレクサンドルがこの年に生まれたと考えることはできない。公は翌二一年のおそらくは五月一三日に生まれた。かれの守護聖人が軍人アレクサンドル・リームスキー（その記念日が五月一三日）であると考えられるからである⁽⁷⁷⁾。

ついで公に関する最初の直接的記述である年代記の一二二八年の項の検討に移り、そのようにして公の生涯を慎重に辿ろうとしている。そのなかで注目されるのは、『伝』（クーチキンはこれをベグノーフのように一三世紀八〇年代初ではなく、公の没後すぐに執筆されたと考えている。『伝』の成立や写本伝統に関しては別稿で論じる）に記される「西方の国から」来たとされるアンドレアス（アンドレヤシ）某の取り扱いである⁽⁷⁸⁾。この人物は『伝』のなかで公を誉め称えるのであるが、通常は公賛美のために作者が創造した非歴史的人物と考えられている。これにたいしクーチキンはこれが現実に存在した帯剣騎士団の副団長アンドレアス・フォン・ヴェリヴェンであり、このとき（クーチキンは一二三六年とする）対リトアニア戦のための同盟を求めてノヴゴロドのアレクサンドル公のもとにやって来た⁽⁷⁹⁾と主張する。この同盟交渉は結局実ることはなかったが、このとき若きアレクサンドル公がみせた対応（ノヴゴロドとしては同盟関係に入らないが、附属都市プスコフが騎士団のために兵を提供することは妨げない）はきわめて現実

的、賢明なものであったとする。⁽⁷⁹⁾

次に、一二三七年末から三八年の始めにかけてバトゥ軍がルーシを襲うが、このとき公はノヴゴロドにいた。バトゥ軍は北東ルーシ諸地方を席卷し、三八年三月にはシチ河畔で時の大公ユーリー・フセヴォロドヴィチ（アレクサンドルの伯父）を敗死させ、その後トルジョクを落としつゝノヴゴロドへ向う。ところが一〇〇キロメートルほど手前のイグナチ・クレストで前進を止め、南方へと転進していった。⁽⁸⁰⁾アレクサンドルはシチ河畔の大公軍にたいし援軍を送らず、またトルジョク攻防戦の際にも動かなかつたのであるが、それはどうしてであらうか。クーチキンによれば、それは強力なモンゴル軍と戦つていたずらにノヴゴロドの勢力を浪費することを恐れた公の自立的な決断と考えるべきではなく、若き公は父ヤロスラフの方針に従つただけであらうという。すなわち、父ヤロスラフはこのときキエフを統治していたが、シチ河畔で待つ兄、大公ユーリーに援軍を送らず、兄との約束を果たさなかつたのである。（それがどういふ考えからであるかは不明である。だがいづれにせよクーチキンは、ヤロスラフは遠くにいたために時宜になつた援軍派遣ができなかつたのではなく、何か思うところがあつて意図的に援軍を派遣しなかつたのだと考えている。史料はこの点については何も伝えていないのであるが）子のアレクサンドルも父の方針に従つて援軍派遣を控えたと考えられるという。アレクサンドルがこのころすでに成人に達していたとはいえ未だ一六歳であつたことを考えると、クーチキンの考察には説得力があるといえよう。いづれにせよ、すでにこの段階で、後に特徴的になる意識的な親タタールの態度をアレクサンドルのなかにみてとることは正しくなからう。⁽⁸¹⁾

若きノヴゴロド公にとって最初の危機は一二四〇年の夏にやつてきた。スウェーデン軍がネヴァ河口に進出してきたのである。当時モンゴル軍はいまだルーシにおいて作戦中で、ノヴゴロドに援軍を送れるような地方はどこにもな

かった。敵軍接近の報をうけたアレクサンドルはラドガが敵の目的と判断してそこへ急行するが敵はおらず、イジョラ地方の長老ベルグイ（洗礼名フィリップ）からの情報でネヴァ川にイジョラ川が注ぐ地点に向う。アレクサンドル軍の急速な移動はその主力が騎馬であったことを物語っている。一四世紀の『ラヴレンチー（スーズダリ）』中の『伝』の最古の断片（同年代記六七七一―一二六三年の項）によれば、スウェーデン軍はこの地点に「陣営と壕」、すなわち半ば恒久的な軍事拠点を設けようとしていたという。かれらが比較的長期間そこにいたことがノヴゴロド軍による攻撃を可能としたのである。アレクサンドル軍は七月一日、日曜日の早朝これを急襲し、大勝利をえた。『ノヴゴロド第一（古輯）』はルーシ側で倒れたのは「二〇人……ないしそれ以下」と記す。これを根拠にフェンネルは、ネヴァ川の戦は日常的な小競り合いで、アレクサンドルの勝利は特別のものではなかったと主張するが（上述）、それは誤りである。犠牲者二〇人というのは、単に「貴族や自由人」のみのことをさすと考えるべきであり、犠牲者総数はそれよりはるかに多くなるはずであるという。たとえば、一二三八年にバトウがトルジョクを攻略した際に倒れたトルジョクの上層民はわずか四人と記され、また一二六二年のルーシ軍のユーリエフ攻撃の際にルーシ側で倒れた貴族は二人にすぎなかったという。従って、戦いには数千人が加わっていたと考えられ（スウェーデンの襲撃用帆船には四〇人が乗船可能であり、このときの艘数を一一六四年の攻撃のときと同じ規模、すなわち五五艘と仮定すれば、二二〇〇人となる。ノヴゴロド側も数百人はいたと考えられる）、一三世紀においては大战争であったといえる。若きアレクサンドル公はこの戦いにおいて始めて自立的な行動をとり、同時に有能な軍事指導者としての片鱗をみせたといえるとする。⁽⁸³⁾ノヴゴロドにとって次の危機はドイツ騎士団からやってきた。騎士団はデンマーク王、デルプト（ユーリエフ）司教、ルーシのヤロスラフ・ウラジーミロヴィチ公などと同盟してイズボルスクを落とした後、プスコフを囲み、貴族

トヴェルジル・イヴァンコヴィチら親騎士団派の助力をえて、一二四〇年九月それを占領、ノヴゴロドをうかがうに至った。この危機のときにアレクサンドルがノヴゴロドを去るという事態が出来る。その原因は知られていない。おそらくそれはプスコフが敵の手にわたるのをアレクサンドルが阻止しえなかったこと、それになりたいノヴゴロド民が大いに不満をもったことにあると考えられる。クーチキンによれば、アレクサンドルにとってプスコフを防衛できなかったのは止むを得ないことであつた。かれは自己の従士団を主力としてスウェーデンと戦い、相当の損害を受けたばかりであり、次の危機に十分に対応することができなかったからである。いずれにせよアレクサンドルはノヴゴロド市当局との衝突が原因で市を去り、父の下に戻るものであるが、それを待っていたかのように、同年冬ドイツ騎士団が攻勢に出る。かれらは一二四一年初にはノヴゴロドまで三〇露里の地点にまで進出する。同市は再び大公に公の派遣を求めざるをえなくさせられた。大公は今度はアレクサンドルではなく弟のアンドレイを派遣する。しかし危機は続いた。そこでノヴゴロド民は今回はほかならぬアレクサンドルの派遣を乞い求める。一二四一年三月アレクサンドルが再度ノヴゴロド公としてやってきた。公は早速出撃し、敵が築いた砦を破壊し、敵に内通した原住民(ヴォジ、エスト人)を捕らえ一部を処刑した。危機は回避された。

翌年早々、騎士団本隊との衝突が避けられなくなった。アレクサンドルは父に援軍を求め、アンドレイ公がウラジミール軍を率いてノヴゴロドに到着した。こうして史上名高い一二四二年四月五日の「氷上の戦」が行われる。戦そのものについて記すことはここでの課題ではない。敗れた騎士団側はそれまでに獲得したすべての占領地を放棄し、捕虜を釈放し、またその交換に応じた。このときの条約は一五世紀に至るまで一定の効果を保ち続けた。⁶⁴ノヴゴロド公であつたアレクサンドルは、一二四二年以来ヴォルガ川下流域のサライを拠点にルーシを含む周辺地

域に支配をうちたてたキプチャク・カン国との直接的な接触をある程度免れることができた。しかし父の大公ヤロスラフはそうも言つてはいられなかった。一二四五年かれはモンゴル皇帝グクに臣従の意を表すべく、帝国首都のカラコルムへむかつた。⁽⁸⁵⁾そしてモンゴル滞在中かれは死去する。その遺体は青く変色していた。皇太后(皇帝の母)トゥラーキナの饗応を受けた後のことと伝えられるので、おそらくはかの女による毒殺であろう。一二四六年九月三〇日のことであつた。⁽⁸⁶⁾ルーシの次期大公をどうするか。カラコルムはもつとも有力、つまりカラコルムにとつてもつとも危険なのは前大公の長子アレクサンドルであると考え、アレクサンドルのもとに急使を送り、かれに大公位を授けるので出頭するよう求めた。アレクサンドルは行こうと思うが、結局は行かなかつた。危険を察知したからである、というのがクーチキンの解釈である。(この点はプラノ・カルピニの見解に近い。)

ルーシにおいては次期大公問題は一二四七年のウラジーミル諸公会議において決定された。⁽⁸⁷⁾大公となつたのは前大公の弟スヴァトスラフであつた。かれは甥たちに諸公国を分け与えた。しかしアレクサンドルら甥たちは不満であつた。かれの弟の一人ミハイル・ホロヴリトは叔父スヴァトスラフを力づくで追い払い、自らが大公位についた。しかしミハイルは間もなくリトアニアとの戦いにおいて戦死する。⁽⁸⁸⁾もう一人の弟アンドレイはサライに出かけ、直接バトウにたいし大公位を願ひ出た。これを知つたアレクサンドルも跡を追ひ、サライに向つた。⁽⁸⁹⁾バトウはこの段階ではまだ単独で判断を下すことを避け、二人の兄弟をカラコルムへ送つた。もつともクーチキンによれば、バトウはグク・カーンとその母とは折り合いが悪く、二人の兄弟公をしばらくサライに留め置き、グクの死去が明らかになつた後で、二人と一緒にカラコルムへむかわせたという。⁽⁹⁰⁾一二四六年の再現、つまり親サライ(親バトウ)派大公(ヤロスラフ)の毒殺という事態の再現を阻止するためであつた。もつとも実際にカラコルムで示された解決策はサライの思

惑を超えるものであった。すなわち、カラコルムは兄のアレクサンドルを名誉の上では高いが、実質的にはあまり意味のない「キエフと全ルーシ」の大公に任じ、アンドレイをウラジーミル大公としたのである。クーチキンによれば、これはもつとも実力のあるアレクサンドル（とかれを推すバトウ）の力がこれ以上に強くなるのを阻むためであったという。この決定にたいするアンドレイの態度は不明である。かれ自身が望んでウラジーミル大公位を得たのか（その場合、かれはカラコルムの宮廷で反アレクサンドル、反バトウ的な運動をしたのかもしれない）、それともモンゴルの決定に大人しく従っただけであるのかであるが、クーチキンは後者の方がより蓋然性が高いという。⁽⁹⁾

ここでのクーチキンの説明はややあいまいである。かれによれば、カラコルムはアレクサンドルにキエフを与えたことで、反アレクサンドルの、反バトウ的決定を下したことになるが、バトウがこの時点ではつきりと親アレクサンドルの、反アンドレイ的であったかどうかは微妙である。少なくとも、クーチキンはこの点について論証していない。年代記ではバトウ（ないしその子サルタク）とアンドレイの対立が顕在化するのはいずれの、まさに一二五二年になったからのことである。それゆえ、カラコルムの上の決定をカラコルム・サライ関係（それが、少なくともモンケ・カーン登場以前において緊張したものであったことは確かであるが）と直接的に関連づけて理解することには慎重であらねばならない。カラコルムはルーシの現状を十分に正確に把握しておらず、従来通り、キエフをルーシの中心とみなして年長のアレクサンドルをそこに据えたという可能性も考えられるのである。

さて兄弟は一二四九年末に帰国する。アレクサンドルはその後数ヶ月間ウラジーミルに滞在したと考えられる。一二五〇年二月までウラジーミル大公アンドレイはいうまでもなく、アレクサンドルも、また両者の別の兄弟たち（ウグリツキー公、ヤロスラーフスキー公、ロストフ公、ペロゼールスキー公）もがウラジーミルにいたことが知られて

いるので、クーチキンはこのときも首都において諸公会議が開かれたものと推測している。ここではモンゴル支配下における諸公間関係などが議論されたであろうが、その後諸公間に何らの対立も知られていないので、とくにアレクサンドル、アンドレイ両公は「権力とそれぞれの権利の分割について了解に達することに成功した」とクーチキンは考える。

アレクサンドルはその後ノヴゴロドに戻る。かれはキエフ公でもあったが、モンゴルによる激しい破壊にさらされ、昔日の面影をまったく失っている旧首都に赴くことは無意味であった。ノヴゴロドの方が政治的、経済的に実質的な意味があったと考えたのであろう。一二五二年かれはオルダー、つまりサライに向う。これはその前年にカラコルムで新カーン・モンケが即位したとの報がノヴゴロドにもたらされたことと関連があろう。クーチキンによれば、このオルダー参りの目的はウラジーミル大公位のためのヤルリク（勅許状）の獲得にあった。それはすでに二年前のウラジーミル諸公会議の際に諸公間で了解されていた可能性がある、とクーチキンは推測している。それにもかかわらず、アレクサンドルの出立後かれの二人の弟たち、アンドレイとヤロスラフがモンゴルに叛旗を翻し、ルーシをオルダーの支配から独立させようとした。カラコルムにおけるカーン位の交替が両公に好機到来と考えせたという。だがかれらの思惑ははずれ、モンケとバトウはルーシにネヴリユイ麾下の鎮圧軍を差し向けた。アンドレイはスウエーデンに逃れ、ヤロスラフはルーシに留まったが、一時的に政治的影響力を失った。

歴史家の多く（たとえばV・N・タチーシチェフ、S・M・ソロヴィヨフ、A・V・エクゼムプリヤールスキーなど）は、アレクサンドルが強力なタタールに反抗するというアンドレイの愚行を利用して、オルダーで大公位へのヤルリクを獲得し、アンドレイにたいし懲罰軍を差し向けさせるよう謀ったとする。⁽⁹²⁾これにたいしクーチキンは次

のように反論する。すなわち、こうした考えは後代の年代記に基づいている。これに関する最古の年代記（『ラヴレンチー（スーズダリ）』）の記述によれば、アレクサンドルが大公位へのヤルリクを獲得すべくオルダへ向つたのは、アンドレイの反抗の後ではなく、前である。加うるにアレクサンドルは「大公位に関する諸公との古くからの取り決め」に従つて行動したにすぎないという。

ここでクーチキンがいう「古くからの取り決め」というのは公位の年長制による継承のことであろうと考えられるが、それならば何故始めから、あるいはアレクサンドル、アンドレイ両公がモンゴルから帰国したときに直ちに、そうならなかつたのかという疑問がでてくる。またアレクサンドルのオルダ行きが、アンドレイの反抗を知つた後のことではなく、それ以前のこととする確認も別の疑問を引き起こす。すなわちもしそうならば、アレクサンドルこそがまずオルダで反アンドレイ的陰謀を企て、ネヴリユイ軍を差し向けさせ、アンドレイは止むを得ずこれに反抗したということになる可能性もあるのではないかということである。

すなわち、上の点に関するクーチキンの説明は十分に説得的であるとはいえないのである。これについては諸年代記の慎重な分析が必要であるが、ここでは次の点を指摘しておくに留める。まずクーチキンは、一二五二年にアレクサンドルがサライへ行くようになった経緯（目的は大公位の獲得であるとする）を十分に説明しているようにはみえない。かれはカラコルムにおけるモンケ・カーン（バトゥの同盟者）の即位がアレクサンドルのサライ行きのきっかけであつたとし、それは一二四九く五〇年諸公会議において予め了解済みのことであつたと解している。しかしかりにこのときに諸公会議が行われたと仮定しても、その場で確かにアレクサンドルが二年後に（あるいは近い将来において）大公位を求めてもよいなどと決定されたとする証拠は一切ないのである。むしろそんな決定に現大公のアンド

レイが簡単に承服したとは考えにくい。次にアレクサンドルが一二五二年にサライに出かけた理由を、少なくとも年代記は明瞭には語っていない。もしかりにそれがアンドレイの反抗以前であつたとしても、オルダーにおいてアレクサンドルがバトウに諸公会議において自身が新たな大公に決定したと伝えることで、バトウが簡単にヤルリクをかれに与えるであろうかという疑問がでてくる。もしルーシ諸公の決定通りにヤルリクを交付するだけであるなら、キプチャク・カンには真の権力などないことになる。少なくともアレクサンドルは、カンにたいし直々に弟の不在という状況下で、自身が弟よりカン国にとってより有益で忠実な公であること、カンへの貢納額も格段に多くなるであろうこと、持参した手土産も莫大なものであることなどを示さなければならなかつたであろう。あるいはそれだけではなく、かれはバトウの前で弟にたいする誹謗、中傷の挙にでたかもしれない。その場合、もしそれが年代記に記されたりしたならば、かれは後世の人々からの非難を免れることはできなかつたであろう（それゆえにこそ、『ラヴレンチー（スーズダリ）』などの親アレクサンドル系年代記作者はこのことに触れなかつたのであろう）。第三に、もしかれのオルダー行きが、クーチキンの主張とは逆にアンドレイの反抗、ネヴリユイ軍の襲来のことであつたとするならば、その場合、アレクサンドルの行為の意味は明瞭である。すなわち、かれは弟を蹴落としてでも大公位を得ようとしたのである。かれは自身が反抗的な弟とちがつてカンの威光に従順であることを訴えて、自身のルーシにおける支配権の確立をはかつたことになる。

スウェーデンに逃れたアンドレイはその後ルーシに戻る。アンドレイがスウェーデンと結んで大公のいわば不倶戴天の敵となることを危惧したアレクサンドルにより呼び戻されたと、クーチキンは推測している。帰国したアンドレイはスーズダリを与えられた。

一二五五年ノヴゴロド民が大公アレクサンドルの子で代理のヴァシーリーを追いだし、プスコフのヤロスラフ（アレクサンドルの前出の弟）を公として迎えるという事件がおきる。（ヤロスラフはトヴェーリ公であつたが、当時トヴェーリを去り、プスコフにいたのである。ヴァシーリー追放の具体的原因は分らない。）これはアレクサンドルへの明白な敵対行為であつた。アレクサンドルはただちに兵を集め、ノヴゴロドへ進発する。ノヴゴロド側も応戦の構えをみせるが、結局ヤロスラフ公が町を去ることを余儀なくされ、ヴァシーリー公が復帰してことは収まる。反アレクサンドルの市長は更送された。つまるところこの結果はノヴゴロド自体の利益になつた。つまり、強力な公（それは言うまでもなくノヴゴロドの自立性を制限する危険性もあつたのであるが）と結びついたノヴゴロドはこの後スウェーデンの圧力をはねかえし、自領を保全することに成功したのである。一二五六年アレクサンドルはナロヴァ川東岸ノヴゴロド領内に攻撃拠点となる要塞を築こうとしたスウェーデン軍にたいし、遠征軍を組織する。これに恐れをなしたスウェーデン軍は撤退していった。アレクサンドル軍はそのままスウェーデンの占領下にあつたエミ人の地を解放した。これはアレクサンドルの軍事指導者としての最後の目だつた行動であつた。⁽⁹³⁾

一二五七年、ウラジミールに戻つたアレクサンドルは他の諸公とともに新カン・ウラグチに敬意を表するため「ヴォルガ・オルダー」（サライ）⁽⁹⁴⁾に赴いた。同年、カラコルムからルーシ住民の「数」を調べ、徴税を行うべく役人がやつてきた。ノヴゴロドにその噂が達すると、市民の間に動揺が走る。ノヴゴロド公ヴァシーリーも反モンゴルの住民の側に立つた。アレクサンドルはモンゴル徴税人に協力することを余儀なくされ、一二五七―五八年に自ら軍勢を率いてモンゴル役人とともに同市に入り、プスコフへ逃亡したヴァシーリーを逮捕、その側近らを厳しく処罰した。一二五九―六〇年にモンゴル徴税人が再びやつてきたとき、住民は再度反抗するが、アレクサンドルの介入があつて騒ぎ

は静まり、この度は戸口調査が行われ、徴税が実施された。⁽⁹⁵⁾

一三世紀六〇年代初、「ヴォルガ・オルダー」はモンゴル帝国から独立した。カラコルムとサライ間に亀裂が走ったのである。これを突いてルーシの多くの都市で「『モンゴル』帝国役人」にたいする反乱が起った。アレクサンドル自身も「タタールを打て」という回状を回してこれを支持した。サライはこれがカラコルムに向けられた反乱であることから、これを黙認した。しかしサライは当時イル・カン国と緊張状態にあり、イランからの脅威に対抗するためにルーシにおいて徴兵を行おうとしていた。一二六二年アレクサンドルはサライに出向いて、この徴兵をせめて部分的にせよ回避しようとした。公はその冬オルダーに留め置かれ、その地で発病、翌年帰国途上病没する。⁽⁹⁶⁾

一二六二年の事態に関するクーチキンのこのような解釈は本稿の筆者とは大きく異なっているが、それについてはすでに別稿で示したので繰り返さない。筆者の結論を簡潔に記すと、一二六二年諸都市民の暴動は単に「帝国役人」にたいするものではなく、サライにたいするものでもあったこと、それゆえこれに対する反乱はサライからの懲罰を覚悟のうえでなければ行いえなかったと考えられること、したがってアレクサンドル自身が暴動を支持、いわんや指示したとは考えられないことである。⁽⁹⁷⁾

このようにクーチキンのアレクサンドル・ネフスキー論は、個々の点で疑問がないわけではないし、また愛国的英雄としての公にたいする先入観から著者が完全には自由になっていない側面もあるが、これまでの研究における正確な点を史料に基づいて正そうとする志向ははっきりしており、また公に関する過度の情緒的評価（肯定的、否定的とを問わずである）にたいしては批判的姿勢に貫かれているので、研究のあるべき方向性を一定程度示唆したものと評価することができる。

(二) V・L・エゴロフ

さて次に取り上げるのはV・L・エゴロフである。かれは一九九七年の論文（「アレクサンドル・ネフスキーとチングス・カンの子孫たち」）において、アレクサンドルのモンゴル支配との関連をより直接的に論じている。⁽⁹⁸⁾

エゴロフによれば、ノヴゴロド公であったアレクサンドルはキプチャク・カン国（とそのルーシ支配）⁽⁹⁹⁾が樹立されてから四年あまりの間は、オルダーへの出頭を免れていたという。その間かれはモンゴルからくるすべての難題を父のヤロスラフ大公が引きうけていたこともあって、自らはモンゴルからは自立的な行動をとりえたという。著者は、この間アレクサンドルが莫大な金銀をオルダーに送ってその捕虜となっていた多くのルーシの民を贖いだすという行為を行ったことを指摘し、公の「ルーシの捕虜たちの保護者」としての側面を強調する。⁽¹⁰⁰⁾

上述のごとく、一二四五年コンスタンチン公がカラコルムから帰国したが、おそらくかれは父ヤロスラフ大公自身がカラコルムへ出頭するように伝えるように厳命されていた。それゆえであろう、ヤロスラフはコンスタンチンの帰着後ただちにサライに向かい、そこからさらにカラコルムへと旅立っている。エゴロフはこのヤロスラフの死因については、ウゲデイ・カーンの后トゥラーキナによる毒殺と断定している。大公は年代記が伝えるように、「カーンのもとの帰路」ではなく、プラノ・カルピニの記すとおり、トゥラーキナによる饗応の七日後にかれに割り当てられた天幕のなかで没したという。その際かれの体は「驚くほどに青色になっていた」とする。⁽¹⁰¹⁾

ヤロスラフの死後ただちにトゥラーキナは急使を派遣して、アレクサンドルに父の後を継ぐべくカラコルムへ出頭するようにとの命令を伝える。カラコルムからの急使は二ヶ月でウラジーミルに着き、かくしてアレクサンドルは亡きカーンの妃の命令書を一二四六年の末には受け取っていた、とエゴロフは推測する。興味深いことは、ここから

もうかがえるように、カラコルムではこの時ヤロスラフの後継大公が誰であるべきかについては、自明のことと考えられていた。一方ルーシでは、もしアレクサンドルがこの時カラコルムへ向ったならば、父と同じ運命が待ちかまえていた可能性を感じ取っていたように思われる。カルピニもアレクサンドルは公然と命令を無視し、出立しなかった、もし行つたならば、父と同じことになったであろうと記しているとする。⁽¹⁰⁾

エゴロフはアレクサンドルがこの時以降大カーシンの意向に必ずしも従わず、むしろ公然と自立的な態度をとり始めた主張するが、そのことを公の次のような行動の中に見て取ろうとする。すなわち、アレクサンドルは亡き父の遺体がウラジーミルに搬送された後に挙行された埋葬式に（一二四七年四月以降）ノヴゴロドから駆けつけるが、そのときの様子が父の葬儀への子の通常の参列というのではなく、大人数の従者を物々しく武装させての、自立的な権力を誇示するかのような示威的なものであったというのである。こうした説明それ自体が適切であるかどうかは問題となるところであるが、それだけでなくエゴロフが依拠する『ソフィヤ第一年代記（古輯）』のこの点に関する記述⁽¹¹⁾が、明らかに聖者伝的な特徴を示すものであることを忘れるべきではあるまい。年代記作者はここで『伝』のテクストを利用しつつ、アレクサンドルの英雄性、聖人性を強調しているのである。『伝』の叙述を根拠にしてアレクサンドルがこの時点で実際にモンゴルを前にこのような態度をとっていたと考えるわけにはいくまい。確かに、かれの上の説明はアレクサンドルがその後どのようにしてタタル支配を容認するようになったのかに關する、かれ自身の後述する説明の伏線となっている。すなわち、かれは後にアレクサンドルは遠路はるばるカラコルムを訪れた後（片道七千キロメートルの旅である）、モンゴル帝国の強大さを思い知り、モンゴルとの親密な関係を重視する戦略を意識的に採用しだしたとするのである。エゴロフによれば、モンゴルへの旅こそが公の戦士である自立的アレクサンドルが

従順な公、外交家、政治家へと変貌するきっかけとなったのである。その意味では上の説明もあながち荒唐無稽というわけではない。しかしアレクサンドルがノヴゴロド公であった時代、いかにモンゴルの実情に疎かったとしても、一二三七年以来のバトゥの侵入がルーシを恐怖のどん底に突き落としたこと、すなわちモンゴルの強大さを知らなかったわけではあるまい。一二四七年からの最初のオルダ、ついでカラコルムへの旅にいたって、突如として親モンゴル路線に転換したかのような説明は、劇的で巧みではあるが、やや極端な印象は免れないように思われる。

さて葬儀の後アレクサンドルは次期大公の選出について協議し、故大公の弟スヴァトスラフを選出した。その甥たちは特別の異議を申し立てることもせずに、父から割り振られ、新大公によって確認された自己の都市へと散っていった。ただ新大公は、何故か理由は不明であるが、ただちにオルダへ向って自己の地位の承認をえることをしなかった。いわばこの手続き上の不備をついたのがかれの「兄弟」(と著者は記すが、甥の間違いである)のミハイル・ホロプリト(アレクサンドル、アンドレイ両者の弟)で、かれはスヴァトスラフを追放し(どのようにしてか詳細は不明)、自ら大公位を奪ったが、一年足らずで自身が戦死する。^(通)

一方アレクサンドルであるが、一旦はカラコルムからの出頭命令を拒絶した形となっていたが、スヴァトスラフの即位とミハイル公によるその追放という状況の中で、かれ自身が大公位へのヤルリクをえるため、サライないしカラコルムへの訪問を考えざるをえなくされていた。もつともそれを実行したのはアンドレイがサライへ出立してからのことである。エゴロフはアレクサンドルの出立は一二四七年五、六月のことと考えている(ベグノーフは既述のように一二四九年とする)。そしてアレクサンドルとバトゥの両雄の最初の対面がヴォルガ川下流のいずこかで行われたが、それは同年の七、八月のことであった。年代記(と言いつつエゴロフはここで『ソフィヤ第一(ツァールス

キー写本による、『新輯』を引いている）によれば、このときアレクサンドルはバトウに強い印象を与え、バトウは「多くの贈り物を与えてかれに敬意を表し、大いなる栄誉とともにかれがルーシへ帰ることを許した」という。もつともこの『ソフィヤ第一』の記述（この点に関する『伝』の記述も同様であるが）は奇妙である。というのも第一に、バトウはカン国成立後五年もの間サライに出頭しなかったアレクサンドルにたいし、おそらくは不信感を抱いていたと推測できること（『ソフィヤ第一』の上の記述でも、「汝一人がわが権力に従うことを望んでいない」とバトウに言わせている。⁽¹⁸⁾もしエゴーロフが言うごとく、バトウが出頭を一度ならず要求していたというのであれば、なおさらのことである）、第二に、他の年代記によれば、このときバトウは次期ウラジーミル大公に関して自ら裁定を下すことはせず、二人の公をカラコルムへと向わせているからである。「ルーシへ帰ることを許した」というのは明らかに事実と異なる。その意味で『ラヴレンチー（スーズダリ）』の抑えた記述の方が事実に近いようにみえる。⁽¹⁹⁾

アンドレイ、続いてアレクサンドルが何時カラコルムへ出立したかは不明である。しかし諸般の事情から、それはおそらく一二四八年秋のことであつたとエゴーロフは推測する。というのもカラコルムではウゲデイの後、その子グユクが一二四六年八月にカーンとなるが、かれはバトウとは犬猿の仲で、両者の確執はグユクが大軍を率いてバトウを攻めようとするほどに激しかった。しかしそのときグユクはサマルカンド近郊で急逝する（一二四八年夏）。その後バトウの「同盟者」「オグルーカイミシュ」が実権を握り、やがて「かの女の子モンケ」がカーンとなる（一二五一年）。それゆえアレクサンドルらはグユクの死の報がサライに入つて後初めて、カラコルムへ向う条件ができたのである。これをまとめると次のようになる。まずウラジーミル出立―一二四七年夏の始め。バトウのもとにおける滞在―一二四八年秋まで（ここでエゴーロフは、先に引用した『ソフィヤ第一』の一度「帰ることを許した」という記述

は採用していないことが分かる)。カラコルムへの出立——一二四八年秋。一二四九年末アレクサンドルは(アンドレイもともにであるが)すでにウラジーミルに帰着している(ウラジーミル・コンスタンチノヴィチ公の葬儀に参列)。

アレクサンドル、アンドレイ両公のカラコルム訪問は大成功であつた(「おそらく一三〇一—一四世紀を通してのルーシ—オルダ—関係の全歴史において、このときほどにすばらしい成果をえたことはなかつた」⁽¹⁰⁾)。かれらはバトウの「同盟者」オグルーカイミシユにより友好的に迎えられ、それぞれ責任ある地位に任じられた。エゴーロフはこのときのカラコルムの裁定は形式的にみて当然のものであつたと考えている。すなわち兄が「キエフと全ルーシ」を、弟がウラジーミルの方を得ているのは格式からいえば当然の決定であるというわけである。ただこの裁定が当時のルーシの実情には合わなかつたこと、従つてとりわけアレクサンドルの側に不満が残つたことが、後の問題の因となつたと理解する。この理解はすでに記したような本稿の筆者のそれに近い。

ただ上の説明で一つ問題となるのはオグルーカイミシユに関するエゴーロフの理解である。かれはオグルーカイミシユをモンケの母、バトウの「同盟者」としているが、これは明らかな誤りである。エゴーロフは典拠としてラシードーアッディーンを引いているが、かれはこれを誤読している。オグルーカイミシユはグユクの寡婦であり、それゆえバトウの同盟者であるはずもなければ、モンケ(その母はソルコクタニ、チンギス・カンの末子トウルイが父である)を次期皇帝に推すはずもないであらう⁽¹¹⁾。

さて両公のルーシ帰還後しばらくは、事実上の中心地ウラジーミルの大公位をめぐる深刻な争いはおきていない。一旦放逐されたスヴァトスラフ公は両公がカラコルムへ旅立っている間は、名目的には唯一の大公であつたが、アンドレイがヤルリクをえて帰国するや、その権利を失うことになった。もつともスヴァトスラフは諦めず、一二五〇

年秋にサライに赴き、失われた権利の回復を求めたが、バトウがこれを認めるはずもなかった。(その後大公位をめぐつて、後述のように、アレクサンドル、アンドレイ両公が争うことになるが、それにたいしスヴァトスラフ公が介入するとか、何らかの役割を果たすかとする記述は年代記にはない。エゴロフはこのころスヴァトスラフはおそらく病床にあり、何ら積極的役割を果たすことができなかったとする。それを裏付けるかのように、かれは一二五三年二月三日に没している。)⁽¹²⁾

一方アレクサンドルは帰国後ウラジーミルを経てノヴゴロドへ向う。タチーシチエフによれば、かれはそこからキエフへむかう意向であったが、「タタール」からの危険」のゆえをもって「ノヴゴロド民が反対したために、実行しなかったという。⁽¹³⁾それは大いに考えられることである。そうでなくてもキエフはバトウ侵入の際の破壊のゆえに、経済的、政治的意味を失っており、無理にそこに向う必要性はなかったであろう。キエフとガールリチ・ヴォルィニ地方にはさらにリトアニアの勢力も伸び始めており、北東ルーシとは切り離される傾向にあった。⁽¹⁴⁾

アレクサンドルの立場の根本的变化は一二五二年に起る。⁽¹⁵⁾両兄弟の關係が緊迫化するのである。衝突の具体的な原因は、エゴロフによるならば、キエフ大公であったアレクサンドルが北東ルーシをも含む全ルーシにたいする最高権力を求めたことにあった。キエフ大公権とウラジーミル大公権双方の間のヒエラルヒー的關係の明確化をはかったということになるが、いうまでもなくモンゴル・カーンから直接ウラジーミルに任じられていたアンドレイはこれに激しく反発した。当時ウラジーミル大公位の方が実質的により重要な意味をもっていたからには、なおさらのことであった。エゴロフが主張するこの原因は、両公がカラコルムでそれぞれの任命を受けた段階ですでに明らかであったのであるから、やや理解しにくい。少なくとも、エゴロフは何故二年後にアレクサンドルがこうした行動に出た

のかについての説明は与えていない。

それはともかくとして、ここで重要なのはアレクサンドルがこのとき弟を攻撃し、当時諸公間の紛争に際しよくみられた内訌・内戦という事態を引き起こさなかったことである。すなわちかれは問題をサライのバトゥの前にもち出したのである。かれは一二五二年初めの冬ないし初春に、弟にたいする告発状を携えてサライへと向った。カンとその側近にたいする莫大な贈り物を手土産に持参したことはいうまでもない。告発の要点は次の三点であった。(1)年下のアンドレイが大公位をえたのは不当である。(2)アンドレイは兄に帰属すべき父からの相続財産である諸都市を奪つて自らのものとした。(3)アンドレイはカンにタタール税(「ヴィーホドとタムガー」)を然るべく支払っていない。アレクサンドル側のこうした告発をいれて、オルダはただちに皇子ネヴリユイ麾下の大部隊を送り込んだ。タタール部隊は「ボリスの日」の前日にウラジミル大公国に姿を現し、アンドレイがいたベレヤスラヴリを攻略、広大な地域を荒らし回って、夥しい数の農民と家畜を連れ去った。アレクサンドル自身はオルダに留まっております、この部隊の行軍には加わっていない。かれはオルダで「全兄弟中の最年長者」の地位を認められ、「大いなる榮譽を与えられて」帰国したが、それはネヴリユイ軍がルーシから立ち去った後のことであつた。

以上の一二五二年の大公交代劇の経緯に関するエゴロフの説明は、ウラジミル大公位獲得のイニシアティブをアレクサンドルに帰している点で、きわめてユニークでかつ説得力に富むとさえいえるが、一つの重大な欠陥を含んでいる。それはアンドレイの「反抗」についてまったく考慮するところがないという点である。実は一二五二年にアレクサンドルがオルダに赴いて、アンドレイのことをカンに告発したとするのはタチーシチェフで、エゴロフは(18)かれに依拠しているのであるが、かりにタチーシチェフ説が正しいとしても問題は残るのである。すなわち上にも記

したが、アンドレイがまず反モンゴルの姿勢を明らかにして後に、アレクサンドルがサライに向ったのか、その場合、アンドレイの「反抗」の真意はどこにあるのか、何故かれは反抗したのか、それとも（クーチキンが主張したように）まずアレクサンドルがサライに行き、その後アンドレイが反モンゴルの立場を明らかにしたためにネヴリユイ軍が襲来したのか（その際クーチキンは、エゴローフと違って、アレクサンドルがサライで反アンドレイの陰謀に従事したとは考えていない。もつともかれはアンドレイの反モンゴルの態度表明の原因についてはふれない）、それともネヴリユイ軍はアレクサンドルが大公位をえるために利用したものではないのか（エゴローフ説である）、そもそもネヴリユイ軍派遣の理由はどこにあったのかなど多くの問題があり、未解決のままに残っているのである。エゴローフはこれらのすべての可能性を十分に考慮、勘案した上で、なおかつ原因はアレクサンドルにあったという結論に達したというわけではないのである。

ところでエゴローフはアレクサンドルがオルダーで拝謁を乞い、いわば交渉した相手はバトウではなくその子サルタクであったことを指摘しているが、これは重要である。バトウはその頃モンゴリアに行っており、モンケの皇帝（カーン）選出に立ちあつていたという⁽¹¹⁾。この点はアレクサンドル、サルタクが義兄弟の契りを結んだとするグミリョフの主張との関連でも注目されることである。もつともエゴローフは堅実な歴史家として、グミリョフ説そのものには否定的である。かりにアレクサンドルがこのとき拝謁したのがサルタクであつたとしても、それ以上のことが年代記に記されていない以上、グミリョフ説は論証されえないという。妥当な批判である⁽¹²⁾。

エゴローフは一二五二年から五七年までアレクサンドルが、あたかもオルダーによるルーシ支配という現実を忘れたかのように、堂々たる自立的な行動をしていたと主張している⁽¹³⁾。かれは大公位を得て以後一度もバトウとサルタク

のもとを訪れたことがなく、オルダーに伺いを立てることもなく自立的に内政を行っていたとする。外政においてもカン国からの軍事援助をまつまでもなく自力で行っていたとして、ここでもカン国の軍事力を当てにしていたとするグミリョフを批判している（「この点でのすべての功績は悉く完全にアレクサンドル・ネフスキーのものであった」！とエゴロフは記している）。アレクサンドルのこのような自立的な行動はかれ自身の堅固な性格によっても支えられていたが、そのみならず、かれの採用した政治路線が現実的であることによっても可能とされた。加うるにバトウ治世のキプチャク・カン国は建国以後戦争を行ったことがなく、そのために支配下の諸民族にたいする兵員提供の要求が厳しくなかったこともアレクサンドルには幸いした。アレクサンドルの対モンゴル恭順政策はその時期の北東ルーシ諸公から内紛をおこす可能性を奪い、ルーシがバトウの侵入により蒙った大打撃から立ち直るきつかけを与えることにもなったと評価される。

アレクサンドルのモンゴルにたいする関係が以上のようにであり、それが当時のルーシにとって全体としてよい結果をもたらしたであろうことは理解できる。ただエゴロフがアレクサンドルのこうした対モンゴル恭順策を次のような仕方で説明するとき、やや疑問である。すなわち、この恭順策はアレクサンドルにとって止むを得ぬ「不可避的な悪」であったのであり、公がモンゴルにたいし卑屈で隷属的な態度をとったわけでは決してなかったと強調する説明方法のことである。これはすぐ上に紹介したような、一二五二年から一二五七年の間のアレクサンドルが自立的で、堂々たるルーシの大公であったかのような主張にも表れていたが、さらには次のような形でも説明される。たとえば、一二五五年バトウが没し、ウラグチが跡を継いだとき、何人かのルーシ諸公はただちにオルダーにでかけ、臣従の意を表したのにたいし、アレクサンドルは自らが赴くことは「これみよがしに」、つまり意識的にせず、単に贈り物を送

り届けただけであったというのである。⁽²⁰⁾ 一方このときアレクサンドルは新カンの下に派遣した使者を通じて、先にタールに反抗した弟のアンドレイに代わって謝罪し、弟への赦免を求め、そしてそれは受け入れられたという。自らは出頭もせずに、使者だけを派遣して嘆願し、しかもそれを受け容れさせるなどという都合の良いことが本当にできたのであろうか、はなはだ疑問である。エゴロフはここでもタチーシチェフに依拠しているが、タチーシチェフによれば、アレクサンドルは間接的にアンドレイのために赦免をねがったのにたいし、直接カンに嘆願したのはアレクサンドルの（従ってアンドレイのでもある）再従兄弟のボリス・ヴァシリコヴィチ（ロストフ）公で、このボリス公がアンドレイへの赦免を獲得したとされているので、エゴロフの言うところはやや不正確でもある。⁽²¹⁾ エゴロフの主張はさらに続く。その後アレクサンドルは一二五七年になつてようやく、今度はアンドレイを伴つてカンのもとを訪れ（三度目である）、何らの咎めも上げることがなかったという。そして以上は「ウラジーミル大公の輝ける外交的才能」を物語るものであるという。

こうした説明において問題となるのは、まず年代記のきわめて簡潔な記述からここまでのことが言えるかということである。確かに『ラヴレンチー（スーズダリ）』には、一二五六年にアレクサンドルがオルダーに出かけたとは記されていない。単にオルダーに「贈り物を与えた『送った』」と記されているだけである。それ以上のことは何も書かれていない。アンドレイの赦免のことはタチーシチェフに出てくるが、それも上に示したように、赦免を得たとされているのはロストフ公である。それゆえエゴロフの上の見解は一つの仮説にすぎないのである。他方ひるがえつて考えるに、アレクサンドルが一二五二年に大公位を得たときの状況は、エゴロフ自身がある程度認めているように、明らかにかれがバトウに取り入り、その寵を取り付け、カンの力を借りて弟の追い落としに成功したというものであつ

た。アレクサンドルがタタール支配を「不可避免的な悪」として受け入れることを余儀なくされたというのは、確かである。しかしその事実を、かれがそれでも卑屈に振る舞うことはしなかったという「仮説」によって、いわば中和しようとするのは、理解できないことではないにせよ、後世の学者のあまりに「愛国的、民族主義的な」願望（アレクサンドルには愛国的英雄であつてほしいと願う気持）にちがいはあるまい。

アレクサンドルのタタールにたいする態度の問題を考えると、これに続く一二五七―五八年の、ノヴゴロドを含むルーシにおける人口（戸口）調査とモンゴル徴税システム樹立の試みは決定的であつた。⁽¹²⁾ エゴロフによれば、徴税のための人口調査の実施はモンゴル側にとつても容易ならざるものであつた。一二五七―五八年の北東ルーシにおける最初の実施の試みは比較的スムーズに行われた。五八年の冬に「調査人」はノヴゴロドにもやってきた。自由の精神に富むノヴゴロド市民はこれまでウラジミール大公を介して間接的にモンゴル支配に服していたにすぎず、このとき初めてタタール役人を眼の当たりにし、激しく動揺した。とくに人口調査はかれらにとつて何やら異教的で魔術的な秘儀にみえた。アレクサンドルは市民の騷擾を厳しく弾圧せざるをえなくされた。

このときの人口調査に関するナソーノフのよく知られた解釈にたいし、エゴロフは批判的である。とりわけかれは「調査人」の到来の際に万人長から十人長にいたるモンゴル人司令官に率いられる軍事組織が設立されたとする見解に反対する。エゴロフによれば、この見解は疑わしいのみならず、非現実的でもある。千人長や万人長に率いられるほどの規模の軍はこの時代においては、その扶養、武装、組織・編成などからいつてまったく考えられないというのである。むしろ万人長以下の組織は徴税制度と関係がある。モンケ・カーン治世のモンゴルは全帝国規模で、中央から派遣する役人を用いて人口調査を実施した。かれらはルーシにおいては「戸」数を調査し、十進制原則に基づ

く単位を定め、住民の中から万人長以下の徴税責任者を任命した。ルーシ全土のダーニは最終的にウラジミールの大バスカクのもとに集められ、そしてモンゴル皇帝及びサライの칸のもとへと送られた。ノヴゴロドの民がこの調査に激しく反発した原因の一つは、税が各戸から、貴族も商手工業者も関係なく、等しく徴収された点にあった。⁽¹³⁾

注目すべきは「調査人」は北東ルーシにおいてのみ知られ、南西ルーシにおいては知られていないことである。この事実はエゴロフによって次のように説明されている。バトウのルーシ遠征には二人のチンギス・カン直系の皇子たちが参加していた。キエフが一二四〇年一月二月に占領された後、バトウ軍に参加していた皇子たちの、後にカーンとなるグユクやモンケを含む多くはモンゴリアへと去り、バトウのみが遠征を続行した。それゆえキエフ以西の地はもっぱらバトウの独占的支配下にはいることとなった。まさにそれゆえにこそ、南西ルーシにはモンゴル本国の「調査人」は現れなかったのである。この地のバスカクはキプチャク・カン国の役人で、カラコルムの代表ではなかったとエゴロフは考えている。南西ルーシがカラコルムとサライの二元的支配下になかったことは、ガリチのダニール公を含むこの地方の諸公がだれ一人としてカラコルムの大カーンのもとに出頭しなかったことによつて裏付けられているとする。⁽¹⁴⁾

一二六一年サライに正教会の主教座が置かれるが、エゴロフはこれをルーシから奴隷として連れ去られたキリスト教徒が増え、かれらのことを案じたアレクサンドルの働きかけで可能となったとする。とりわけそれが自らイスラムに改宗し、カン国をイスラム化しようとしていたベルケ・カンの治世であったからには、アレクサンドルの精力的な働きかけなしには不可能であつたであろうとする。⁽¹⁵⁾ すべてをアレクサンドルの功績にしようとする著者の傾向がここにも現れているようにみえるが、少なくとも年代記には主教座設立を伝える記述以外に、アレクサンドルの関与を推

測せしむる記述は存在しない。

一二六〇年代初頭の北東ルーシ諸都市（ロストフ、ウラジミール、スーズダリ、ペレヤスラヴリ、ヤロスラヴリ）における徴税請負人にたいする反乱についての説明も興味深い。エゴロフはこれらの反乱への諸公の関与は否定する。しかし反乱の過程で徴税請負人たちが単に追放されただけで、殺害されたわけではなかったことを指摘し、それをアレクサンドルの対タール有和策の具体的表れとする。あたかも諸公やその役人らが激高する民衆を巧みにコントロールして、過激な行動に出るのを阻止したかのような説明は、非現実的に思われるが、どうであろうか。いずれにせよそのような記述は年代記にはない。またエゴロフは反乱がカンによる懲罰軍の派遣などという深刻な結果を引き起こすことがなかったのは、大公の外交手腕によるところ大であったと、ここでもアレクサンドルの功績を（確たる根拠もなしに）強調している。⁽¹⁸⁾

一二六二年アレクサンドルは四度目にして最後のオルダー参りを行う。⁽¹⁹⁾ この年キプチャク・カン国とイラン（フラグ・カン治世のイル・カン国）との間に戦争が勃発し、ベルケ・カンは総動員を行い、ルーシにも兵の派遣を求め、徴兵部隊を送り込んできたからである。⁽²⁰⁾ アレクサンドルは「この不幸」を回避すべく自らオルダーに赴いたのである。同時にかれは弟ヤロスラフに兵を与えてユーリエフ攻略に向わせている。⁽²¹⁾ ルーシ軍は現在作戦中であることをカンに示すためであったという。豊かな贈り物とすぐれた「外交手腕」のおかげで大公の使命は果たされ、ルーシは兵の派遣を免れた。ただアレクサンドルはカン国で越冬を余儀なくされ、発病し、帰国途上、ヴォルガ河畔のゴロジエツで死去する。一二六三年一月一四日のことであった。アレクサンドルはその生涯において合計四年あまりの間オルダーで過ごした計算になるという。このことは公がいかにオルダーを重視していたかを示している。後のモスクワのイヴァ

ン・カリターやその子セミョンを想い起こさせる。だがここでエゴローフはアレクサンドルの最後のオルダー行きが、前年の諸都市における反タタール暴動とまったく関係がなかったのか、また公は何故オルダーで越冬を余儀なくされたのか、などについての説明を与えてはいない。⁽¹⁹⁾

エゴローフは論文の結論部において、アレクサンドルの外交政策の正しさとかれの外交手腕の卓越性について再度強調する。かれはガリーチのダニール公と違って西欧と結ぶことを拒否し、それに対しては断固戦ったこと、他方抗うことの不可能な東方の敵とは結んだこと、そのことのロシア国家にもたらした利益について指摘する。西方の敵はルーシの領土に関心を示し、現にガリーチ・ヴォロイニなどはリトアニア、ポーランドの手でルーシから切り離された。他方モンゴルは領土には関心を示さず、結局のところダーニの徴収さえ保証されるならば、それ以上のことは要求しなかったことが力説される。モンゴルが正教会を保護したことも、アレクサンドルの対モンゴル恭順策の妥当性を物語るものであるとする。アレクサンドルのこうした立場は決して順応主義（コンフォルミズム）ではなく、状況を正確に把握しての現実主義であり、柔軟な外交的理性に基づくものであったという。

エゴローフのアレクサンドルにたいするこうした評価は、すでに紹介した「ユーラシア派」のそれと驚くほど似ている。かれ自身、一三世紀の状況下ではアレクサンドルのとりえた道としてはこれ以外にはなかったことを主張する。アレクサンドルの外交上の戦略はその後、オルダーとリトアニアの二国に同時に効果的に対峙したドミトリー・ドンスコイに受け継がれ、ロシア国家の躍進を可能としたという。エゴローフ論文は従来十分に論じられることのなかったアレクサンドルとモンゴルとの関係を主題にしたという意味で大きな意義をもつ。それはまたグリヨフなど異なつて歴史家としての立場を十分にわきまえた論考であることも疑いない。モンゴリアにおけるアレクサンドル、ア

ンドレイ両兄弟にたいする措置の解釈や、一二五二年の事態などの理解においては、クーチキンらとちがつて十分に説得的であつたことも重要である。しかしそれにもかかわらず、ここには国民的英雄であるアレクサンドルの国家指導者としての先見の明や、すぐれた外交手腕を称賛する志向があまりに強く現れており、著者は結局のところアレクサンドルの新たな英雄視、神聖化に行き着いていると言わざるをえない。

(三) A・N・キルピーチュニコフ

軍事史家として名高いキルピーチュニコフも一九九六年の『歴史の諸問題』誌上に「アレクサンドル・ネフスキー―西方と東方のあいだ」という論文を発表している。^(註)もつともこれは何ら新しい知見も、視点をもたらすものではない。本来であればここでとりあげる必要はないのであるが、昨今のネフスキー・ブームを示す一つの例として簡単に触れることにする。

著者によれば、アレクサンドルは「非凡なる軍事指導者、外交家、政治家」として名高いが、公の「国家関係上また地政学上の活動」にはこれまで十分な注意が払われてきたとは言いがたいという。ここで言われていることの正確な意味ははつきりしない。アレクサンドルが西方からの侵略者にたいして国を守つただけでなく、東方の敵にたいしても独特の仕方で国を守つたことに十分留意すべきだと言わんとしていると推測できるのであるが（もつともそうであるとしても、それは別にあらためて主張するまでもないことのように思える）、いずれにせよ著者の本論文がかれの言う欠陥を正すものとなっているかどうかは大いに問題である。

父ヤロスラフ大公のカラコルムからの「帰国途上における」死については、これを単に遅効性の毒物によるものと

するだけで、誰が何故大公を毒殺したかについての背景説明はなされない。^(註)生涯において少なくとも一二度の会戦を経験し、そのすべてにおいて勝利を博した公の軍事的天才ぶりが力説されるが、その際いわゆる「氷上の戦」を「最大規模の会戦」と断定するなど、最近の研究動向などまるで念頭にないかの如くである。一二三七年に侵入したモンゴル軍が「一国民^{ナロード}の完全な抹殺」を目的としていたとするのもステレオタイプ的である。侵入軍の規模がルーシ諸公軍の何倍もあつたとするのも史料的裏付けに欠ける。

アレクサンドル公は「親タタールの」と非難されることがしばしばあるが、これにたいし著者は反論する。公は状況を勘案し、「より少ない悪」を選択したにすぎないというのである。著者は大公位をめぐってアレクサンドルと争つたその弟アンドレイを、皇子ネヴリユイ軍のルーシへの襲撃を招いた張本人と非難する。ここではアレクサンドルこそがウラジミール大公位をアンドレイから奪い取り、タタール軍を呼び込んだ可能性のあることを完全に無視している。アレクサンドルは五度も（前述エゴロフは四度とする）サライへ（一度はさらにカラコルムへも）向かい、最初はキエフ大公位への、ついでウラジミール大公位へのヤルリクを得たとあつさりと記すのも、アンドレイとの陰湿な大公位争いを無視している点で問題である。

一二五七―五九年のモンゴル役人による戸口調査と徴税に際して起つた諸都市の暴動を鎮圧し、徴税を実施させたアレクサンドル公の行動は、タタール軍からの脅威の存在によつて正当化される。そして公のタタール支配容認政策によつてノヴゴロドや北東ルーシがタタールによる避けがたい破壊の惨劇から救われたとする。「徴税責任者」であるバスカクは大都市に配置されたが、ノヴゴロドとプスコフには配置されなかつた。これも（根拠もあげずに）大公の功績であつたとされる。

興味深いといえるのは、アレクサンドルが東西からの軍事的脅威のなかで發揮した「賢明さ」のやや特異な指摘である。すなわち著者によれば、公は対西方にたいしても単に戦うのみであつたわけではなく、時には柔軟な交渉政策を進めたというのである。一二五三年のドイツ騎士団との講和、五四年のノルウェーとの講和、六二年のリトアニアとの条約締結などである。つまり公はその内外政策一般においてきわめて柔軟、賢明であつたというのである。例外は信仰・宗教問題であつた。かれが教皇庁からの教会合同また対モンゴル同盟の提案にたいして断固たる拒絶の態度をとつたことが称賛されるのである。これなども、後述するゴールスキーが指摘しているように、必ずしもそれほど単純であつたわけではないのであるが、キルピーチュニコフはあつさりアレクサンドルの信仰深さを強調してことを終わらせている。また著者は公がその生涯の後半においてモンゴルとの協調策を選択したとする一般的見方にたいし、次のように反論している。すなわち、こうした見方は一方的で、公の政策の「西と東の諸勢力との間におけるバランス感覚」に留意していない。公の政策は「ヨーロッパ・アジア的」である。ただしここでキルピーチュニコフはこのことの意味を具体的に敷衍しようとはしていない。おそらく公の政策が広い視野に立つたものであること、また後半生の親タタル路線も、全面的な、単なる隷属路線ではなく、意識的で計算された是々非々のそれであつたことを言わんとしているようにみえる。一見して手の込んだ扱いをしているようでありながら、その実史料による十分な裏付けをみない、一層の英雄崇拜論となつていゝと言つてよい。

一二六二年の諸都市における反タタル暴動についての著者の説明にもとくに目新しいものはない。まず、このとき諸都市に現れた「徴税請負人」はモンゴル皇帝クビライから派遣されたとする。ナソーノフ説である。諸都市で同時に暴動が発生したのは、『ウスチュグ年代記』にあるように、アレクサンドルの指示があつたからであるとする。公

はモンゴル本国から派遣された徴税人に対する反抗は、サライのカンからの懲罰を引き起こさないことを知っていたとする。かくして事実上初めての外国支配のくびきにたいする反抗が成功したという。このように、ときとしてタール・カンへの無条件的臣従者とみられることのあるアレクサンドルの、いわば名誉回復がはかられているのである。暴動直後の公のサライ行きはベルケ・カンからの召喚に応じたものとされるが、帰国途上死没したことに関連して父と同様のことがあったのではないかと推測している。⁽¹³⁾ すなわち、暴動への懲罰が行われた可能性があるというのである。もしそうであるならば、公のいわば計算（サライからの懲罰はないという）ははずれたことになるであろうが、そのことについては何も述べられない。それにしても、著者はこの暴動を「大公『アレクサンドル』によりルーシの主敵に投げつけられた挑戦状」と理解しているのであるが、もしこの「主敵」がサライではなく、カラコルムを意味しているとすれば、何故アレクサンドルはサライにおいて毒を盛られる必要があつたのであろうか。ここには説明上の矛盾があるとしか言いようがない。いずれにせよキルピーチュニコフの場合には、諸研究者を悩ませ、さまざまな説明が試みられている諸問題において、そうした状況をまったく考慮せずにあつさりと断定的に結論を下すという安易な態度が目につくといえる。

(四) A・A・ゴールスキー

最後にとりあげたいのは、一九九三年に出たゴールスキーの「アレクサンドル・ネフスキー」である。⁽¹⁴⁾ これは『祖国』という雑誌にでた一般向けの文章で学術論文ではないが、第一に著者自身はこの時代に関するすぐれた専門家であり、第二に文章の内容自体が注目すべき点を数多く含んでおり、さらに第三に著者は、後述するように後にこの文

章とほぼ同じ趣旨の内容の学術論文を著しているので、ここで検討しようとするものである。

著者はアレクサンドルの出生について、母をムスチスラフ・ウダートヌイ公の娘フェオドーシヤ、生年を一二二一年とする点で先のクーチキンと同様である。ノヴゴロド公アレクサンドルは一二四〇年ネヴァ河畔でスウェーデン軍を撃破するが、著者はこのときのスウェーデン軍の指揮官を後にスウェーデンの事実上の支配者となるヴィルゲルとする説と、スウェーデン軍の目的をノヴゴロドとする説の双方を退けている（自らはラドガ説をとる）。これは学術論文ではないといえながらも、著者が正確さを期そうと努めている点で注目される。戦闘経験もあまりないはずの若きアレクサンドルが成功した理由として著者は公の断乎たる決断力をあげる。

一二四二年の対ドイツ騎士団戦における大勝利の記述において注目されるのは、戦闘の規模、具体的には騎士団側の損失をめぐる著者の見解である。既述の如く、『ノヴゴロド第一年代記（古輯）』によれば、戦闘において騎士団側では四〇〇人のドイツ人と「無数のチュジ人が倒れ」、五〇人のドイツ人が捕らえられたという。他方リヴォニアの『韻文年代記』は、騎士二〇人が倒れ、六人が捕虜となったとする。史料間にみられるこの食い違いについて、これまでさまざまな解釈が出されてきた。本稿でもたとえば、上にフェンネルのそれを紹介した。ゴールスキーの解釈はこれを食い違いとはみなさないというものである。すなわち、ルーシ側は敵の犠牲者の総数をあげ、リヴォニア側は厳密に正式の「騎士」のみを数えたというのである。かれによれば、このころリヴォニアには厳密な意味での騎士団員は一〇〇人ほどしかおらず、しかもそのうち相当数はバルト系クルシ人との戦に出向いていた。それゆえ二六人というのである。（なお上記クーチキンも一二四〇年のネヴァ川の戦についてであるが、同様の趣旨の議論を展開してい

た。

対モンゴル關係に目をむけながら著者も、一二四六年のモンゴリアにおける大公ヤロスラフの死をグユク・カーンの母トゥラーキナによる毒殺ととらえている。ヤロスラフはバトウの走狗とみなされたというのである。トゥラーキナはこの後子のアレクサンドルに出頭を命じたが、後者はこれを拒絶したとする。ついで一二四七年末のアレクサンドルと弟アンドレイのサライ、さらにはカラコルムへの旅についての説明であるが、著者はこれを大公スヴァトスラフ（兩公の叔父）への不満から自ら大公位を求めて旅立ったとする。この点についての諸史家の見解はすでにみたが、ここでのゴールスキーの説明は明らかにおかしい。すでに示したように、スヴァトスラフはミハイル・ホロヴリト、あるいはアンドレイその人によりすでに廃位されているからである。もつともではどう解釈すべきかについての判断はここでは控えざるをえない。

いずれにせよ留守中のアレクサンドルのもとヘローマ教皇からの使節がやってくる。それはアレクサンドルにカトリックをうけいれ、教皇の權威を認めるよう説得し、タタールからの脅威に対抗するために助力を申し出るものであったが、これについてのゴールスキーの説明は興味深い。⁽¹⁸⁾ まず、教皇側がアレクサンドルに接触を求めようとした動機であるが、これを第一に、大公ヤロスラフがカラコルムで教皇使節プラノ・カルピニと出会った際に、教皇の庇護下にはいる（対モンゴルのためである）ことに同意していたこと、第二に、教皇はカルピニからアレクサンドルがグユク・カーンの母の出頭命令に従わなかったことを知らされていたことのうちに求めている。これらは大いに興味をそえられる説明である。ヤロスラフが教皇の庇護を受けいれることに同意したとする根拠は、教皇インノケンティウス四世のアレクサンドルへの第一書簡（一二四八年一月二二日付け）にあるとされる。⁽¹⁹⁾ ヤロスラフがカラコルムでプラノ・

カルピニにそのようなことを伝えたというのである。しかしこのいわば幾重にも間接的な情報を、教皇庁がその書簡で伝える通りに受けとるわけにはいくまい。ゴールスキーはここからヤロスラフが教皇の庇護を受けいれ、教皇庁を対タール外交のカードの一つとして利用しようとしたかのように推測しているが、それはあまり説得力をもたない。ルーシのカトリックに対する反感はこの時代にはまだ後代のモスクワ時代におけるほどに強くはなかったと考えられるが、それでもすでにコンスタンティノープルのフランク人による征服、ラテン帝国の成立（一二〇四年）の「暴挙」はルーシにも伝えられていた。規模はともあれルーシはすでにスウェーデン、ドイツ騎士団とも干戈を交え始めていた。次第に反カトリックの感情は強くなつていたと考えられる。それ以上に重要なのは、ヤロスラフがカラコルムにおいてカーンの圧倒的な権力と帝国の勢威をみせつけられていたことである。そのようななかでかれがカーンの威光にそむき、これに抗すべく別の同盟相手になびきかけたなどということは考えにくい。⁽¹⁸⁾アレクサンドルのいわゆる坑命についても、はたしてそもそもアレクサンドルの行動が意識的な反タール行動であつたと考えられるかどうかという問題がある。ゴールスキーの見解は仮説に留まるというべきであろう。

またアレクサンドルの留守中にルーシに届けられた二通の教皇書簡のうちの一通（上の一二四八年一月二二日付け書簡である）が、サライにいたアレクサンドルのもとへ廻送され、それにサライ滞在中でカラコルムへの出立を前にしたアレクサンドルが答えたときされるが（一二四八年九月一五日付けの第二書簡⁽¹⁹⁾はアレクサンドルがカラコルムへ向けてサライを出立した後のことで、公の手には届かなかつたという）、このときの今日に伝わらない回答の内容についての説明も興味をそそられる。すなわち、通常アレクサンドルは正教の熱心な擁護者で、教皇の誘いにたいしては、断固たる拒否回答をしたとされるのであるが（たとえば『伝』においてはそうである）、ゴールスキーはアレクサンドル

ルがこのとき教皇に対しあいまいな、というよりはむしろ基本的には教皇の庇護を受けいれるような返事をしたというのである。バトウの本營でいまだ不確かな状況におかれていた公はさまざまな選択肢をもちたいと望んでいたという。もしそれが事実なら、きわめて重要な指摘である。しかしここでも上のヤロスラフについて記したのと同じようなことが言える。また本当にこの書簡がノヴゴロドないしウラジーミルからサライへ廻送され、アレクサンドル自身がそれに答えたのかどうか、答えたとすればどのようなルートでかなど多くの疑問が生じる。そもそもこの教皇書簡の宛先が真にアレクサンドル・ネフスキーであつたことを疑う研究者も多い。たしかにこの点についてのゴールスキーの見解⁽¹⁰⁾には説得力があり、書簡の受け取り手がアレクサンドル・ネフスキーであつたという可能性は高い。しかしいづれにせよ、ここでも多くは推測に頼るほかないのでこれ以上論評することは控えることにする。

カラコルムにおいてグユク・カーンの寡婦オグリーガミシュ（とゴールスキーは綴る）は、アレクサンドルをルーシ諸公の長と認めてキエフに、アンドレイをウラジミールに任じた。著者は何故モンゴル側がそのような任命を行ったのかについて論じてはいない。ただ帰還後アレクサンドルが荒廃したキエフには向わず、ノヴゴロドを治め続けたことを記すのみである。そしてこのとき教皇からまだカラコルムに滞在中のアレクサンドルのもとに使節がやつてきて、かれの最終回答を求めたという。このようなことが本当にありえたのかどうかには信じがたいが、いづれにせよゴールスキーによれば、これにたいしアレクサンドルは断固たる拒絶をもつて答えたという。アレクサンドルが前回の教皇書簡の場合と異なつて、今回は拒絶回答をしたその態度の変化の理由については明らかにされていない。一二五二年のアレクサンドルの大公位獲得の経緯についての著者の説明も興味深い。それによれば、ウラジミール大公位を得てカラコルムから帰つたアンドレイは反タールの傾向で名高い南ルーシのダニール公と同盟を結び、そ

の娘を妻に迎え、キプチャク・カンから自立的な政策を行おうとしたという。そのようなことが可能であったのは、そもそもかれを大公に任じた当時のカラコルム宮廷がバトウと対立していたからであった。だが一二五一年にバトウに近いモンケがカンとなるや、バトウはアンドレイ及びダニールの排除にかかり、一二五二年後者にたいしてはクレムシ軍を、前者にたいしてはネヴリユイ軍を差し向けた。かくしてアンドレイはスウェーデンに逃れざるをえなくさせられた。一方、同年いまだネヴリユイ軍が押し寄せる前に、アレクサンドルはバトウのもとへ向い（何のためにかは明らかにされていない。下記から判断するならば、バトウに呼びだされたということのようである）、ウラジミール大公位へのヤルリクを獲得し、ウラジミールへ大公として戻った。その間ネヴリユイ軍が北東ルーシを荒し、アンドレイは国外へ逃げ去っていた。おそらくバトウはすでに一二四八年時点で決断していながら、かれに敵対的なオグリーガミシユによつて阻まれていた策（すなわちアンドレイを叩き、アレクサンドルを大公とする）をこのときついに実行したのである。ただ、アレクサンドルが教皇の申し出を拒否したことが明らかになった段階でこれを決断した可能性も排除できない、とゴールスキーは考えている。

こうした説明はどのように評価できるであろうか。注目すべきは、ここでゴールスキーはアレクサンドルの大公位獲得に関し、そのイニシアティブをもつばバトウに帰していることである。そしてアンドレイは始めから反バトウ的な存在であったと考えている。カラコルムでアンドレイがウラジミール大公位を得た理由もその点に求められている。その他の局面ではそのすぐれた外交手腕を称えられるアレクサンドルが、ここではまったくの受け身の受益者とされているのである。こうした描き方は著しく説得力を欠くようにみえる。第一に、そこまで反バトウ的な態度で知られるアンドレイが何故後にスウェーデンからあつさりと帰国を許され、スーズダリ公に任じられたのであろうか。

一二四八年時点でバトウがアンドレイよりアレクサンドルに傾いていたという証拠は一切存在しない。もしその時点でアンドレイの反バトウ的態度を認知していたなら、バトウはあらゆる方法でかれを排除し（ことに先のエゴーロフによるならば、アンドレイは一二四七年のおそらく夏には、兄のアレクサンドルとほぼ時を同じくしてサライにやって来ており、一二四八年の秋にはアレクサンドルと共にカラコルムへ向けて出立するまでは、そこに留まっていたのであるから、もしバトウが望むなら、このときアンドレイを亡き者にすることもできたはずである）、少なくともカラコルムへ向わせないような手を打ったであろうと考えられるのである。アレクサンドルの積極的働きかけを考慮にいれることなしに、かれの大公位へのヤルルイク獲得を説明することは難しいように思われる。

大公位に就いてからのアレクサンドルは富める町ノヴゴロドへの支配権を固めようとした。それまでのノヴゴロドは自己の公をスーズダリ、スモレンスク、チェルニゴフなどルーシの諸公国から招いていた。アレクサンドルのウラジミール大公即位後は、ノヴゴロドは同大公を自公とするようになる。アレクサンドルはノヴゴロドに子のヴァシーリーを送り込むが、それも独立の公としてではなく大公の名代としてであった。かくてノヴゴロドはアレクサンドル期をもって北東ルーシとより密接な、そしていわば宿命的な関係に入り込むことになったといえるという。

一二五七年、及び一二五九年のノヴゴロドにおけるタタールの人口「調査人」にたいする反対運動と、アレクサンドルの行動に関する著者の記述には、他と異なる点はとくにない。アレクサンドルはサライおよびカラコルムの意向をうけて自ら部隊を率いて「調査人」に同行し、かれらを助けて調査及び徴税を強行させたとされる。五九年の暴動を鎮圧した後は、それに加担した子ヴァシーリーの代わりに別の子ドミトリーを代理公に任じている。

一二六二年の北東ルーシ諸都市における反タタール蜂起に関しては、アレクサンドルの直接的関与を裏付ける証拠

はないものの、かれがそれにたいし好意的、少なくとも中立的態度をとったことを物語る間接的史料は存在するとする。サライからの懲罰がなかったのも、当時モンゴルの大カーンからの自立を志向していたキプチャク・カン、ベルケにとって、ルーシが大カーンの役人を追放したことを罰する理由はなかったからだとする。直後のアレクサンドルのサライ行きはこの蜂起とは関係がなく、ベルケが対ペルシア（イル・カン国）戦争との関連でルーシにたいし兵を要求してきたことと関連するものとらえている。アレクサンドルの蜂起への関与の有無、あるいはその度合いに関しては、すでに紹介したクーチキンやエゴロフらと異なる立場に立っているが、最後のサライ行きの理由については先の二者と同じ観点に立っている。

アレクサンドルはほぼ一年間オルダに留まった。何故かれが長期間留まったのか、それとも留め置かれたのかについての説明はない。かれの使命は達せられたようにみえる、と記されているので、ゴールスキーはアレクサンドルが何らかの点で咎められてそこに留め置かれたとは考えていないようである。使命が達せられたとするのは、ルーシからキプチャク・カン国へ兵員が派遣されたとする記述はどこにもみられないからである。しかしいづれにせよ、ルーシへの帰路アレクサンドルは発病し、一二六三年一月にゴロジエツで死去する。ゴールスキーは毒殺説には否定的である。確かにかれの考えからはベルケが公を毒殺する理由はでてこない。

ゴールスキーは最後に従来の諸研究におけるアレクサンドル像、とりわけその両極端であるユーラシア派（ヴェルナツキー、および後のグミリョフ——アレクサンドルは東方勢力と手を結ぶことにより、ルーシを救ったとする）とフエンネルの見方（アレクサンドルは対敵協力者であり、かれの治世をもって「タタールのくびき」は始まったとする）を紹介し、双方を批判しつつ自説を展開している。それによれば、ビザンツ帝国が一時的に存在をやめていた当

時にあつては、ロシア人にとっては「ツァーリ」はモンゴルのカンにほかならなかった。それゆえアレクサンドルのモンゴル・カンへの恭順策は決して対敵協力などではなかった。もつともかれは最初から親モンゴル派であつたわけではない。かれがモンゴル支配を受けいれることを決断したのは一二五〇年になってから、すなわちカラコルムへの旅から戻つて後のことであつた(この点エゴロフに近い)。かれはそれまではノヴゴロド公としてもつぱら西方からの侵入者と戦つており、モンゴルと干戈を交えたことがなかつたことは、かれの後のこの決断を容易にした。またカラコルムで、またそこへの、そしてそこからの旅の途上において、モンゴルの強大さを眼の当たりにし、モンゴルとは折り合つてゆかねばならないことを理解した。またモンゴルがルーシの領土には関心をもち、正教にたいしても抑圧的でないことを知つた。一二五二年バトウがアンドレイとその同盟者ダニールにたいし懲罰軍を差し向けることが明らかになつたとき、アレクサンドルの前には三つの選択肢があつた。(1)弟アンドレイと結び、反タタールの立場に立つ、(2)ノヴゴロドに退き待機主義的立場をとる。タタール懲罰軍とアンドレイとの戦いは静観する。(3)これを好機ととらえ、積極的に大公位獲得に乗り出す。アレクサンドルは最後者の立場を選択し、バトウから大公位を獲得し、その結果北東ルーシを襲つたネヴリユイ軍はもつぱらアンドレイとその弟ヤロスラフの領国のみを荒らして引き上げた。それはアレクサンドルの外交手腕によるものであつた。

アレクサンドルのこうした行動は意識的にある方向性を選択した結果というよりも、むしろ時代の精神と状況を十分に配慮した「現実主義」的なものであつたといえる。かれはかれ自身と当時のルーシにとつてもつとも有益な道を選択したにすぎない。戦うことが必要で勝利が予測できるときは戦い、交渉が必要であるときにはそれを行った。こうした政策の結果、かれの大公位在位中にはルーシに対するタタールの襲撃はなく、西方からも小規模な攻撃が二度

みられただけであつた。かれはウラジーミル大公としてノヴゴロドに対する支配権を確実にし、将来のモスクワ・ロシア国家の発展の基礎を築いた。以上がゴールスキーの見解である。

ゴールスキーはその後二〇〇〇年に出た『ルーシの地よ、御身はよろずのものに満ちている……』^(四)において、再度アレクサンドル論を展開している。こちらは詳しい注を付された学術論文の体裁をとっているが、全体の趣旨、というより文章そのものも相当程度先の論文と一致している。ただその末尾の部分で二つの点についてより詳細に論じているので、ここで補つておく。

第一の点は、アレクサンドル公を、ユーラシア派のように、ロシアを東方へ向わせる歴史的運命的な選択をした救国の英雄と見るべきか、それともフェンネルらのように、私利のために兄弟とルーシを裏切つた対敵協力者と見るべきかという問題に戻りながら、その両者を批判しつつ論じている箇所に関連する。著者によれば、アレクサンドルが反西方、反カトリックの立場（そして親東方、親モンゴルの立場）を明確にさせたのは、かれがカラコルムから戻つた一二五〇年以後のことである。それは何か明確な歴史的使命感のようなものに導かれたのではなく、現実政治的な判断によるものであるという。かれがそのとき反カトリックの立場を固めるに至つたのには、次の四つの要因が大きな意味をもつた。そのいくつかはすでに前論文でも指摘されていたところであるが、それを改めてここに記すと、(1)二年間のカラコルムへの往復の旅において、モンゴルの強力さとモンゴル人の他国の領土への野心の少なさ、宗教的寛容性を知つたこと、(2)帰国後、教皇庁を頼つたダニール・ガリツキー公が西方からの軍事援助も受けられず、結局オルダーに屈したことを知るにいたつたこと、(3)帰国の年（一二四九年）にスウェーデンが教皇庁の後押しを受けてノヴゴロドの支配下にあるエミ人の地に侵入してきたこと、(4)先にかれのもつに届けられていた教皇書簡（第二、一

二四八年九月一五日付け）にプスコフにカトリック司教座を設立するやうにという要望が表明されており、これをアレクサンドルは教皇庁の侵略的意圖を示すものと受け取つたこと、である。要するに、アレクサンドルはルーシを代表する一人の公として具体的政治的判断から反西方、親東方的に行動したに過ぎないといふのである。

次に、一二五二年の大公位就任の経緯に関するいわばかれ自身の見解への補筆である。確かにこの問題はアレクサンドルの歴史的評価に際して一種の試金石となる重要な問題である。著者によれば、多くの歴史家の見解では、このときのアレクサンドルの行動は時の大公アンドレイに対する裏切であるかどうかは別にしても、少なくともかれ自身のイニシアティヴでなされたものであつた。すなわち、公はサライへ自ら向い、バトウに対しアンドレイのことを告発し、ネヴリユイ軍はその結果派遣されたのであると考えられてきた。歴史家のなかにはこれをあからさまな裏切行為と非難する者もいることはすでに指摘した通りである。⁽¹⁸⁾これに対しゴールスキーは次のやうな理由で反論する。すなわち、アレクサンドルがアンドレイのことを告発したとする史料の根拠はない。確かにすでに触れたやうに、タチーシチェフがこのことに言及し、その後の多くの歴史家はタチーシチェフの記述が今日に伝わらない史料に基づいていると考えたが、それは誤りで、この説はタチーシチェフの推測にすぎないとする。ゴールスキーはタチーシチェフ説が成り立たないことを次のやうに説明する。すなわち、アンドレイはカラコルムでウラジミール大公に任じられて以來明らかに反バトウの立場に立つていたこと、それに対し一二五一年にバトウの推すモンケが大カーンに就いてからは、バトウはアンドレイを排除にかかつたこと、従つて一二五二年の一連の事件はアレクサンドルのイニシアティヴでなされた（アレクサンドルの告発に対するバトウの対応）というよりは、もっぱらバトウの意向に基づいて行われたと考える必要があるといふことである。ここでは、ゴールスキーの見解はアレクサンドルを再び受け身的な受益者

とするものであること、かれの説はまた、モンゴル・カーン（グユクないしその寡婦オグリ・ガミシユ）が反バトゥという意味でアンドレイをウラジーミル大公に就けたとする、あくまでも明白な根拠に欠ける「仮説」に基づくものにすぎないことを指摘しておくに留める。

これに続きゴールスキーはこの件につきもつとも信頼のできる史料として『ラヴレンチー（スーズダリ）』の記述を引き、アレクサンドルがまずサライに立上り、その後ネヴリユイ軍が襲撃してきたこと、そしてタタル軍が去った後にアレクサンドルが帰国して、大公位についたことを述べ、アレクサンドルはネヴリユイ軍襲撃には関与していなかったと結論づけている。先のクーチキンとほぼ同じ立場に立っている。これにたいし本稿の筆者としては、ここでも、『ラヴレンチー（スーズダリ）』が大公系の年代記で、アレクサンドルに不都合なことは極力述べようとしていないことを指摘しておくに留める。

かくして、ゴールスキーの最近の補論もけつして疑問点を解消するものでないことは明らかである。かれの研究はクーチキンやエゴロフのそれと並んで、これまでのアレクサンドル研究において問題となりながら曖昧なままに放置されていた多くの論点をとりあげ、史料と諸研究を十分に渉猟しながら本格的なものであると評価できる。とりわけ教皇庁の公に対する働きかけについて具体的に論じた点は重要である。しかしここでもアレクサンドルの肯定的評価という大義名分が支配しており、そのために自説に都合よい形で議論を展開させることになっているようにみえる。

結論に代えて

冗長でしかも叙述が錯綜したが、以上に近年のロシア人研究者のアレクサンドル論のいくつかをみてみた。そこで明らかにになったことは、第一に、ロシアの諸研究者はさまざまなニュアンスを示しつつも、アレクサンドル公を英雄視し、その軍事・外交指導者、そして為政者としてのすぐれた資質と愛国者の活動を高く評価するという点ではおおむね一致した立場を示しているということ、第二に、それにもかかわらず、アレクサンドルの具体的な行動の解釈、意義付けにおいて、研究者間には相当大きな差異が見られること、また第三に、ときには基本的な事実に関してすら研究者間に意見の一致がなく、これまで数多くの伝記的作品や研究が発表されてきたにも拘わらず、現実にはある程度信頼できる経歴すら描くことが困難であることであつた。これらのことはすべて次のことを示しているようにみえる。すなわち、史的アレクサンドル像を明らかにするためには、史料に遡つたより根底的な検討がいまだに求められ続けているということである。従つて筆者の次の課題は史料の分析と検討ということになる。^(註)

注

なお本稿で利用する年代記は基本的には近年モスクワの「ロシア文化の諸言語」出版から順次刊行されている『ロシア年代記全集』*Polnoe sobranie russkikh letopisei*の各巻である(第一巻『ラヴレンチー年代記』は一九九七年の刊行で、一九二六—一九二八年版のりプリントである)。これは基本的には一八五〇年代から一九二〇年代にかけて出版された同全集の復刻版である(一部は一九五〇年代のりプリントも含む)。まだ未刊行の巻については、第一巻(『ラヴレンチー、スーズダリ年代記』)が一九六二年にモスクワの「東方文学出版」

アレクサンドル・ネフスキーとモンゴルのルーシ支配

から刊行され、今日なお刊行され続けている科学アカデミー歴史学研究所編の全集を利用する。それを筆者の個人的理由で使用する事ができない場合には、さらに一八四一年にサント・ペテルブルクの古文書委員会編で出された同全集のリプリント版を使用する。いずれも、初出にあたって出版地と出版年をあげ、以後はPSRLと略記し、すぐ後に巻数をラテン数字で、頁ないし欄を算用数字で記す。

1 これに勝利を得たことで、かれは後に一五世紀になって、「ネフスキー」すなわち「ネヴァ川の」英雄と呼ばれるようになる(『ノヴゴロド第一年代記(コミシオンヌイ「委員会」写本に先行する諸記述』PSRL, III (M., 2000): 468に次のように記されている。「ヴォロジメルの町にはアレクサンドル、偉大にして、勇敢な、ネフスキー」がやってきて公位に就いた」。かれにはニエムツィとの間に六度の戦があり、神がかれを助けられた。そしてかれは王を打ったのである)。ベグノーフはこの記事を同年代記の一四二三年の項のものとしてゐる(sm. Begunov lu. K. *Pamitnik ruskoj literatury XIII veka. Slovo o pogibeli ruskoj zemli*, M.-L., 1965, s. 31-32)。この部分は当年代記刊本の編者によれば、一五世紀前半から中葉にかけての草書体で記されているという。PSRL, III: 7)。またこのエピソードは、一六世紀第三四半期の写本で伝えられている『ウラジーミルスキー年代記(レトヒーセツ)』の一二四一年の項にも現れる。ただしこの場合奇妙なのは、この年代記は一二四〇年のネヴァ河畔の戦についてはまったく言及するところがないということである。そこでは「ニエムツィがプレスコヴォ「ブスコフ」を大ノヴゴロドから奪った」と記されているのみである。ネヴァの戦に言及せずに、しかも翌年の項でアレクサンドルを「ネフスキー」と呼ぶのはいかにも奇妙である。この年代記は、すでにその編纂時にアレクサンドルを「ネフスキー」とする呼称がルーシに広く普及していることを反映していると同時に、自らはネヴァの戦に大きな意義を認めぬ立場に立っていることをもはからず暴露しているようにみえる(PSRL, XXX [M., 1965]: 90)。

- 2 この面での代表的な研究としてさしあたり次を参照。Pashuto, V. T. *Aleksandr Nevskij i bor'ba russkogo naroda za nezavisimost' v XIII veku*. M., 1951; Shaskolskij I. P. *Bor'ba Rusi protiv krestiannoj agresii na beregah Baltiki v XII-XIII vv.* L., 1978.
- 3 拙稿「アレクサンドル・ネフスキー」史料の検討(上)、『西洋史論集』(北海道大学大学院文学研究科・西洋史研究室)第六号、二〇〇三年、六三一―一〇七頁。(この論文は以下「アレクサンドル・ネフスキー」史料(上)」と略記する。なお、この論文の(下)は同『西洋史論集』第七号に掲載される。)

- 4 アレクサンドルはすでに一二二八年に兄フョードルとともに、父ヤロスラフの代理公としてノヴゴロドに滞在している(同様のことは一二三〇年にも確認される)。そして一二三六年に父がキエフ大公位を得るべく南方へ向うと、その後釜として単独のノヴゴロド公と

なった。この地位は一二三八年に父がウラジーミル大公となって以後も続き、自らが大公となる一二五二年までは（一時の中断を除いて）これは基本的にノヴゴロド公の位にあった。拙稿「アレクサンドル・ネフスキー」史料（下）「三」を参照。

5 Nasonov A. N. *Mongoly i Rus'. Istoriia tatarskoi politiki na Rusi*. M. L. 1940 (Reprint, 1969), s. 32-55; 拙稿「ルーシとモンゴル——モンゴルによるルーシ支配の始まり——」『西洋史論集』第五号「二〇〇二年」二二—二七頁を参照。

6 Nasonov A. N. *Istoriia russkogo letopisaniia XI-nachala XVIII veka*. M., 1969, s. 21. この点については、Lur'e Ia. S. *Rossia Drevniaia i Rossia Novia*. S.-Pb., 1997, s. 122 等、またそのルリエを批判した Krivosheev Iu. V. *Rus' i mongoly. Issledovanie po istorii severo-vostochnoi Rusi XII-XIV vv.* S.-Pskogo universiteta. 1999, s. 197, prim. 146 を参照。

7 ユーラシア派のこの点に関する見解については、さしあたり拙稿「ロシア史におけるモンゴル支配の意味について」『ロシア史研究』五八、一九九六年、四—六頁を参照。

8 Vernadsky G. Dva podviga sv. Aleksandra Nevskogo. *Evroziiskii vremennik. Ucherzhdenie evraziitseu*. kn. 4, Berlin, 1925, s. 318-337. 「二つの偉業」論文において表明されたアレクサンドル観は、本質的な点では、著者が後にアメリカ合衆国に渡ってから著した Vernadsky, G. *The Mongols and Russia*. New Haven, 1953, pp. 148-149 においても維持されている。この書においても、著者はアレクサンドルをガリーチのダニール公と対比させて、次のように論じている。両公のタタールにたいする態度の違いは、まず第一に、かれらの領国のおかれた地理的な位置の違いによって説明できる。すなわち、ガリーチは北西・北東ルーシに比しサライからより遠く離れており、そのためダニールは西方からの助力を期待しつつ、より容易にカンからの自立的な態度をとりえた。第二に、これとの関連で指摘すべきは、両公が直面しなければならなかった「西方諸勢力」の性質に顕著な差異があったことである。ダニールはポーランドやハンガリーとしばしば衝突したが、これらの国々の君主は時にはかれの友でもあったのであり、つまりは敵というよりライヴァルであった。これらの国々とガリーチ・ヴォルィニ地方はある種共通の文化圏を形成していた。これにたいしアレクサンドルが対峙したドイツ騎士団やスウェーデンは、十字軍的志向を前面に掲げる侵略的で、危険きわまりない敵であった。アレクサンドルはこの「西方」の隣人から助力をうけるならば、必ずやルーシはその主権を奪われることになるであろうことを見抜いていた。かれはこれら西方の敵と戦うためにモンゴルに屈することを余儀なくされたのであった。第三に、両公の間には、その宗教観においても顕著な違いがあった。ガリーチでは早くからカトリック圏との交流があり、ダニールにとってカトリック教会は対等の立場に立ちうる隣人の同じキリスト教

アレクサンドル・ネフスキーとモンゴルのルーシ支配

の教会であった。他方アレクサンドルにとって騎士団のカトリックは十字軍の戦闘的・侵略的宗教にほかならなかった。さらに第四に、両公の宗教心、精神的性格にも違いがあった。すなわち、アレクサンドルはダニールよりはるかに熱心な正教徒であり、思慮が浅く西欧の騎士道にひかれるダニールに比し、より真剣で、祖国とその民にたいする深い責任感を有していた。ヴェルナツキーのアレクサンドル観が、とくに最後にふれたような観点を含んでいることは、それから著しく説得力を奪う結果になっていることは指摘するまでもない。(以下本稿において、諸文献あるいは史料からの引用文中の「」は本稿の筆者による説明ないし補足である。)

9 Presniakov A. E. *Obrzovanie velikorusskogo gosudarstva*, Pg., 1918 (Reprint: The Hague, 1966), s. 55-58. プレスニャコフは、ウラジーミル諸公のなかに「反タタールおよび親タタールの二つの政治路線の担い手が存在することを説いたが、その際、前者の代表としてアンドレイ・ヤロスラヴィチ公(アレクサンドルの弟で、南西ルーシにおける反タタールの旗手であったダニール・ガリツキー公の娘を妻としていた)、またこのアンドレイの(従ってアレクサンドル自身の)弟のトヴェーリ公ヤロスラフを、他方、後者の代表としてほかならぬアレクサンドル・ネフスキーをあげている。

10 Iushkov S. V. *Razvitiie russkogo gosudarstva v sviazi s ego bor'boi za nezavisimost'. Uchenye trudy vsesoiuznogo instituta iuridicheskikh nauk*. M., 1946, vyp. 8, s. 141-142.

11 Grekov B. D., Iakubovskii A. Iu. *Zolotaia Orda i ee padenie*. M.-L., 1950, (reprint: M., 1998), s. 227-228, 231-232 (s. 171, 174); ヤクボフスキー・ヤレフン(播磨記)『金帳汗国史』生活社、昭和十七年、二三五―二三六、二四二頁。Budovniks I. U. *Obshchestvenno-politicheskaia mysl' Drevnei Rusi. (X-XIV vv.)*, M., 1960, s. 354; Kargalov V. V. *Vnesnepoliticheskie faktory razvitiia feodal'noi Rusi. Feodal'naia Rus' i kocheniki*. M., 1967, s. 148-154.

12 Budovniks, *Obshchestvenno-politicheskaia mysl'*, s. 303-307. 『ガリーチ年代記』からの引用は、PSRL. II [M., 1998]: 807.

13 Philipp W. *Heiligkeit und Herrschaft in der Vita Aleksandr Nevskijs. Forschungen zur ostereuropaischen Geschichte*, 18 (1973), SS. 60-62.

14 Pashto V. *Aleksandr Nevskii*. M., 1974, s. 153 (Moskva/Ekaterinburg, 1995 年版では s. 145)°

15 *ibid.* s. 5 (同1995 年版 s. 5)

16 *ibid.* s. 61 (同1995 年版 s. 57-58)

- 17 ibid. s. 61 (同1995年版, s. 58)
- 18 ibid. s. 62 (同1995年版, s. 58)
- 19 たとえば Shaskol'skii, *Bor'ba Rusi*. s. 147-157 ; 同様に Hoesch E. Vostochnaia politika nemetskogo ordena v XIII veke. v kn.: *Kniaz' Aleksandr Nevskii i ego epokha*. S.-Pb., 1995, s. 67-71; Lur'e, *Rossiiia Drevniaia*. s. 127-128. または Nazarova E. L. Krestovyi pokhod na Rus' 1240 g. (organizatsiia i plany), v kn.: *Vostochnaia Evropa v istoricheskoi retrospektive. K 80-letiiu V. T. Pashuto*. M., 1999, s. 190-201 の批判を加えている。
- 20 Pashuto, *Aleksandr Nevskii*. s. 69 (同1995年版, s. 64)
- 21 ibid. s. 71 (同1995年版, s. 66-67)
- 22 ibid. s. 73 (同1995年版, s. 68)
- 23 ibid. s. 77 (同1995年版, s. 72)
- 24 ibid. s. 79 (同1995年版, s. 74)
- 25 ibid. s. 116 (同1995年版, s. 108)
- 26 ibid. s. 117 (同1995年版, s. 110) ; *PSRL*. III [M., 2000]: 80-81. 『古代ロシア史研究』XVII (一九九二), 三〇頁。(なお従来『ノヴゴロド第一』は *NPL (Novgorodskaiia Pervaia Letopis' starshego i mladshego izvodov*. M.-L., 1950) 版で引用されるのが常であったが、ここで引いた *PSRL*. III はその復刻版であり、頁数も一致している。)
- 27 拙稿「ルーシとモンゴル」一一一―一七頁。
- 28 Pashuto, *Aleksandr Nevskii*. s. 146 (同1995年版, s. 137)
- 29 ibid. s. 146, 150 (同1995年版, s. 138, 142)
- 30 拙稿「ルーシとモンゴル」二五頁、注72を参照。
- 31 研究者ですら特別の留保なしにかれに言及し、ときにかれに依拠することすらある。たとえば, Krivosheev, *Rus' i mongoly.*, s. 119 sl.
- 32 これについては、もしあたり拙稿「L.N.グミリョフのエトノス史論とロシア」、『民族と国家の文明史的研究』、東京(財団法人 地

アレクサンドル・ネフスキーとモンゴルのルーシ支配

球産業文化研究所）、一九九四年、一五—二三頁を参照。

33 以下は主に Gumilev L. N. *Of Rusi do Rossii*, S.-Pb., 1994, s. 109-123 にある。（同じ内容の書物は『*Of Rusi k Rossii*』というタイトルで同年モスクワでも出版されている。また近年はこの書をはじめかれの著作は様々な形で続々と出版されている。）またより詳しくは Gumilev L. N. *Drevniaia Rus' i Velikaia step'*, M., 1989, s. 466-684 を参照（アレクサンドル・ネフスキーについては『*ibid.*』s. 520-545）。

34 中村喜和『ルーシの地の滅亡の物語について』、『スラヴ研究』五、一九六一年、七三—九五頁。中村喜和編訳『ロシア中世物語集』、筑摩書房、一九七〇年、二三八—二三九頁。原テクストは今では Begunov, *Pamiatnik russkoi literatury XIII veka*, s. 153-157 をとよ。

35 モンゴルの侵入がルーシにもたらした被害の程度に関する問題については、たとえば Karger M. K. *Kiev i mongol'skoe zavoevanie*, S4, 1949, t. XI, s. 55-102; Rybakov B. A. *Remeslo Drevnei Rusi*, M., 1949; *Ocherki russkoi kul'tury XIII-XIV vv.*, ch. 1-2, M., 1969-1970; Goehrke C. *Wuestungsperioden des fruhen und hohen Mittelalters in Osteuropa*, *JbGGO*, 16-1, 1968, SS. 9-52; 拙稿『ロシア中世都市における手工業と手工業者（II）』、『商学討究』（小樽商大）三三—四（一九八三年）、四三—六八頁、また拙稿『ロシア史におけるモンゴル支配の意味について』、六—九頁などを参照。

36 Gumilev, *Of Rusi do Rossii*, s. 115-116. 引用文中の（ ）は原文。

37 カルビニ／ルブルク（護雅夫訳）『中央アジア・蒙古旅行記』光風社、平成元年、八一頁。

38 *PSRL*, I [M., 1997]: 523. ただし一二四八年の項においてである。

39 フォードル・ヤルノヴィチのことはおそらく『ソフィヤ第一年代記（古輯）』（*PSRL*, VI-1 [M., 2000]: 325-326）に初めて現れる。
40 カルビニ／ルブルク『中央アジア・蒙古旅行記』八三頁。Pashuto V. T. *Ocherki po istorii Galitsko-Volynskoi Rusi*, M., 1960, s. 268-269, prim. 7.

41 拙稿『ルーシとモンゴル』八一—九頁。

42 Gumilev, *Of Rusi do Rossii*, s. 120.

43 *ibid.* s. 124.

- 44 ibid. s. 121; Gumilev L. N. *Chernaia legenda: Druz'ia i nedrugi Velikoi stepi*. M., 1994, s. 359.
- 45 ただしグミレフがアレクサンドルの死因について考察しているのは、ときに歴史家にも要求される創造的想像力の発揮の例として興味深い。後述するように、歴史家でこの問題を真剣に論ずる者が少ないことを思うとき、このことは重要であるようにみえる。
- 46 Fennell J. L. I. Andrej Jaroslavich and the struggle for power in 1252: An investigation of the sources. *Russia Mediaevalis*, t. I, 1973, pp. 49-62.
- 47 Fennell J. L. I. The Tale of Baty's invasion of North-east Rus' and its reflexion in the chronicles of the thirteenth-fifteenth centuries. *Russia Mediaevalis*, t. III, 1977, pp. 41-79.
- 48 Fennell J. *The Crisis of Medieval Russia, 1200-1304*. NY., 1983. 本書はその後蔵記されている。Dzhon Fennel, *Krizis srednevekovoi Rusi, 1200-1304*. Perevod s angliiskogo. Vstupitel'naia stat'ia i obshchaia redaktsiia A. L. Khoroshkevich i A. I. Pliguzova. M., 1989.
- 49 フェネルはアレクサンドル公の生年をベグノーフら多くの研究者と同様、一二二〇年と考えている。これについてはクーチキンらの反論がある。後述クーチキンについて触れた箇所を参照。些細な問題のようにみえるが、ロシア史上最大の英雄の一人の生年についてすら一致した見解が形成されていないのが現状であるということを認識しておきたい。さらに拙稿「アレクサンドル・ネフスキー、史料(下)」三を参照。
- 50 『伝』についてのフェネルの見解は、Fennell J. and Stokes A., *Early Russian Literature*, London, 1974, pp. 107-121 に見られる。
- 51 Fennell, *The Crisis*. p. 104.
- 52 *PSRL*. III: 78. 『古代ロシア研究』XVIII, 二七頁。
- 53 Fennell, *The Crisis*. pp. 105-106; Begunov Iu. K., Kleinenberg I. E. i Shaskol'skii I. P. Pis'mennye istochniki o Ledovom poboishche. *Ledovoe Poboishche. 1242 g.* M.-L., 1966, s. 212; Matuzova V. I., Nazarova E. L. *Krestonosy i Rus'. Konets XII v.-1270 g.* Teksty, Perevod, Kommentarii. M., 2002. s. 234. 『リグオニア韻文年代記』が伝える水上の戦における戦死者数については、すでにクレイネンベルグらがこれを騎士のみの損害であって、かれらに従って従軍したその巨倍にも登る兵士らの損害は含まれていないかっただことを主張している(Begunov, Kleinenberg i Shaskol'skii, *Pis'mennye istochniki*. s. 225-229)°。やはり Matuzova, Nazarova,

アレクサンドル・ネフスキーとモンゴルのルーシ支配

Krestomoshy i Rus', s. 241, kom. 37, s. 326-327, kom. 22 を参照されたい。具体的にフェンネルの紹介したような見解に対しては、ロシアではたとえば、クーチキンなどが先のクレイネンベルグらと同様の立場から批判を加えている。クーチキンによれば、ネヴァ河畔の戦には総数で数千人が参戦した。それゆえそれは一三世紀にあつては大規模な戦いであつたという(さらに後述四一頁参照)。同様の批判は後述ゴールスキーからもなされている。Gorskii A. A. 《Vsego esi ispolnena zemlia russkai, ...》 *Lichnosti i mental'nost' russkogo srednevekov'ia. Ocherki*, M., 2001, s. 47, 70, prim. 14, またフェンネルの著書の露訳者たち(ホロシコケヴィチら)もその序文において「フェンネルの文献偏重主義」年代記の扱い方の問題点、考古学資料の無視などを指摘している。Khoroshkevich, A. L. i Pliguzov A. I., *Rus' XIII stoletia v knige Dzh. Fennela, v: Fennell, Krizis srednevekovoi Rusi*, s. 13 st.

54 次のように記されている。「六七五〇年。大公ヤロスラフはおのが子アンドレイを大ノヴゴロドへ、ニエムツィと「戦おうとする」アレクサンドルを助けるために送った。かれらはブスコフの向こうの湖上でかれら「ニエムツィ」を破り、多くの虜を捕らえた。そしてアンドレイはおのが父のもとに榮譽のうちに帰還した。」(PSRL, I: 470)

55 *Nikijora putriankha Tsesarigrada letopisets uskore* のテクストは「Tikhomirov M. N. Zabytye i neizvestnye proizvedeniia russkoi pis'mennosti. *AE za 1960 g.*, M., 1962, s. 234-239 において刊行されている。同じく s. 239. (このテクストは「チホミロフによれば」最初 PSRL, I [SPB, 1846]: 248-252 において刊行されたという。今日では PSRL, IV-1 [M., 2000]: 627-632 においてもみられるが、本稿ではチホミロフのテクストを利用する)『ノヴゴロド第四』の一九一五年版の編者 (PSRL, IV-1 [Pg. 1915] = PSRL, IV-1 [M., 2000], s. 229, prim. d.) やリハチヨフ (Likhachev D. S. *Textologia*, M.-L., 1962, s. 78) は「スヴァトスラフがミハイル・ヤロスラヴィチ(スヴァトスラフ大公の甥、アレクサンドル、アンドレイ両兄弟の第一上記一九一五年版編者やリハチヨフはこのミハイルの父称をアレクサンドロヴィチと誤記している)により追われたとするが(リハチヨフ上掲書、第二版ヘレニングラード、一九八三年、八二頁)は一二四七年とすべきところを、一二七四年と誤記している。この間違いは二〇〇一年の増補改訂第三版八五頁においても訂正されていない)。フェンネルはこれを批判する。すなわちフェンネルによれば、スヴァトスラフを追ったのがミハイルとするのは『ウスチュグ』や『ニコン』などの後代の諸年代記で、ここで問題となつているのはアンドレイによる反スヴァトスラフのクレーダにはかならないという。かれはさらにアンドレイによるスヴァトスラフ放逐を、『ノヴゴロド第四』などにあるように一二四七年ではなく、一二四九年、すなわちアンドレイ(とアレクサンドル)がモンゴル宮廷から帰国して後のことと考えている (Fennell, Andrei Jaroslavlic.

p. 49-51, 60, n. 10)。⁵⁶この点については明らかに拙稿「アレクサンドル・ネフスキー」史料(上)「七六一七七頁を参照」。

56 Fennell, *The Crisis*, p. 107. スヤヤトスラフの死については『PSRL. I: 473; PSRL. X [M., 2000]: 139 などを参照。』

57 中村編訳『ロシア中世物語集』二四八頁。BeguNov, *Pamiatnik muskoi literatury*, s. 174-175. (邦訳ではこの箇所が「ネヴリイが捕らえられたから」となっているが、正しくは「ネヴリイによる侵略の後 Po plenii zhe Nevriuneve ...」である。)

58 *PSRL. I: 473; PSRL. V-1 [L., 1925]: 237 = PSRL. VI-1 [M., 2000]: 327-328* (後者もオボレンスキー写本によるものであるが、ここではネヴリイ軍の襲来「Маньинейの国外逃亡」の記事は六七五九〔一二五〕年の項について)。『ソフィヤ第一』は明らかにI・N・シヤールスキー写本に基づいて『PSRL. XXXIX. M., 1994』としても刊行されているがこちらは新輯版である。そこではこの記事は六七六〇年の項について。『PSRL. XXXIX: 87 などを参照。』

59 Tikhomirov, *Zabytye*, s. 234-239; *PSRL. I-3: 524; PSRL. III: 304* (この二つは六七五九年の項である)；*PSRL. IV-1 [M., 2000]: 230*。

60 *PSRL. XXVII [M.-L., 1962]: 47* (『エカハロノスツカヤ』六七五九年の項)；*PSRL. XXV [M.-L., 1949]: 141-142* (『十五世紀末ギスタフ年代記集成』)；*PSRL. XXIII [SPb., 1910 = Reprint 1971]: 83-84* (『ホルキーリン』)；*PSRL. X: 138-139* (『ニコノ』)；*PSRL. XV-1 [M., 2000]: 31-32* (『ロトミンキー・ノトビーセン』)；ネヴリイ襲撃は六七五九年「アレクサンドルのオルター行きは翌六七六〇年の項」；*PSRL. XV-2 [M., 2000]: 396-397* (『ナヴェーリ』)ともに六七六〇年の項)。

61 *PSRL. I: 473*。

62 *PSRL. VI-1: 327; PSRL. XXXIX: 87*。

63 既述の通り『ソフィヤ第一(オボレンスキー写本)』では六七五九(一二五)年のこととされているが(*PSRL. VI-1: 327-328*)、これは他の諸年代記、またあらゆる状況から判断して、六七六〇年のことと理解すべきであろう。フェンネルもそう考えている。Fennell, Andrej, Jaroslavlic, p. 54. 同年代記(シヤールスキー写本)では、六七六〇年となっている(*PSRL. XXXIX: 87*)。

64 *PSRL. VI-1: 327-328; PSRL. V [S.-Pb., 1851 = Reprint 1973]: 186-187; PSRL. V-1: 237; PSRL. XXXIX: 87* (最後者すなわち「シヤールスキー写本によるソフィヤ第一」では「アンドレイは、スヴェーイの地にしばらくの間留まった後「おのが父祖の地に戻ってきた」とされている。オボレンスキー写本において「アンドレイがスヴェーイの地でニエムツィとの戦で死んだとされている点については、後注66を参照。)

- 65 『ソフィヤ第一』の古輯版は基本的には一四一八年の項で記述が終わっている。この版は二つの写本で伝わっているが、そのうちの一つオボレンスキー写本は一五世紀七〇年代後半から八〇年代初頭（一四八一年七月以前）、もう一方のカラムジン写本もほぼ同じころのもと考えられている。PSRL. VI-1 [M., 2000]: s. V-VII. なお同年代記の「I・N・ツァールスキー写本」は一五〇八年の項まで書き進められており、『ソフィヤ第一』の新輯版を伝えている。成立時期も一五〇八年の直後と考えられている (PSRL. XXXIX: 3-5)。
- 66 ただこの比較的早い時期に成立した年代記において、なぜ「かれ『アンドレイ』はスヴェイの地にしばらくの間留まったが、その後ニエムツイとの戦いで戦死した」とされているのかは、不明である（古輯版、すなわちオボレンスキー、カラムジン両写本において。PSRL. VI-1: 328. またトルストフスキー写本でも同様である。PSRL. V [S-Pb, 1851 || Reprint, 1973]: 187. ただし後者には「ツァールスキー写本ではそれは後に削られ、別の筆跡で『その後おのが父祖の地『世襲地』に戻った』と書かれている」という編者の注記がある。このツァールスキー写本を底本とした『ソフィヤ第一（新輯）』は近年『年代記全集』の第三九巻として刊行されている (PSRL. XXXIX: 87)。各写本の成立年などについては、前注65を参照のこと。事実は「ラヴレンチー（スーズダリ）」の伝えるところが正しく、アンドレイはその後スウェーデンからルーシに戻ったと考えられる。つまり、この点に関しては後代のツァールスキー写本の伝えるところが正しいのであり、その編者により古輯版編者の明らかな事実誤認として訂正されたものと考えられる。アンドレイが「スヴェイの地」で「ニエムツイ」により殺害されたとする誤った情報が、どのようにして『ソフィヤ第一年代記（古輯）』に入り込んだのかは不明である。（『ノヴゴロド第一（新輯、コミシオンヌイ写本）』六七五九年においても、アンドレイは「海の彼方スヴィーの地に逃れ、殺された」とされている PSRL. III: 304. またトヴェーリ系の『ロゴシュキー年代記（レトピーセツ）』六七五九年の項は、スヴェイの地に逃れたアンドレイが「チュジ人」によって殺害されたとする。つまり、アンドレイがいずれにせよ北方の地で歿したとする説は早くから根強く存在したもののように見える。PSRL. XV: 31)
- 67 『トロイツカヤ年代記』は現存しないが、プリシオールコフによりテキストが復元されている。Piselskov M. D. *Troitskaya Letopis'. Rekonstruktsiia teksta*, M.-L., 1950. アンドレイ逃亡¹⁾アレクサンドル即位の記事は六七六〇年の項に記されているが「アンドレイが『見知らぬ地』へ逃げた後のことは記されていない (s. 324)」。『ソフィヤ第一』や『ノヴゴロド・カラムジン』、『ノヴゴロド第四』など（かつてA・A・シャーフマトフが『一四四八年集成』と呼んだもの）はPSRL. VI-1; PSRL. XLII [S-Pb, 2002]; PSRL. IV-1をみよ。『一四七九年集成』はPSRL. XXV [M.-L., 1949]（『一五世紀末モスクワ年代記集成』）をみよ。その六七六〇年の項は『ソフィヤ第一』

に近いが、アンドレイが後に「父祖の地」に戻ったとされている点では新輯版の系統であろう (s. 141-142)。

68 『トヴェーリ年代記』六八六八(一二三六〇)年に、「スーズダリ公トミトリーに、ツァーリ・ヒディロイ「ヒダリ」から大公位が、また同公におのが父祖の地が与えられた」とある (PSRL. XV: 428)。

69 ソヴィエトでもすでに Kargalov, *Vnesnepoliticheskii faktory razvitiia feodal'noi Rusi*. s. 147-148 が類似の見解を表明していた。それによれば、オルダー権力を承認するネフスキーの統一活動(他の諸公・諸公国を併合する活動)こそが、ルーシのモンゴルに対する抵抗力を弱め、オルダーの칸のルーシへの支配を確立させ、拡大させることにつながったという。I・O・スルミナによれば、アレクサンドルのタタール支配に対する迎合的な態度を厳しく批判するカルガロフのような見解は、ソヴィエトでも一九二〇年代には一般的であったという。おそらく革命直後の昂然たる自立的意識が支配していた時代状況と関係があるろう。それが三〇年代末から五〇年代初頭にかけての対独戦、また戦後の冷戦時代になると、モンゴルには服したものの西方とは雄々しく戦ったアレクサンドルへの評価が一変したという。こうした背景の中でフェンネルの研究をみると興味深いものがあるが、ただフェンネルの場合はこのような特殊ソヴィエト的事情とはまた異なったところからなされた立論であることはいうまでもない。Surmina I. O. Aleksandr Nevskii v noveishei otechestvennoi istoriografii. v: *Istoriik i istoriografiia. Materialy nauchnoi konferentsii, posviashchennoi 90-letiiu so dnia rozhdeniia L. A. Derbova*. 5-6 sentiabria 1999, Saratov, 1999, s. 21.

70 上注35を参照。

71 たとえば, Khoroshkevich i Pilguzov, *Rus' XIII stoletia*. s. 20-25 を参照。

72 モスクワの国立公共歴史図書館 (GPIB) のアルファベット順カタログの「アレクサンドル・ネフスキー(及びその人物)」の項を引くと、二〇〇三年初現在で、一八世紀以来の文献のカードが全部で一〇五枚収められている。このカタログはいかなる意味においても組織的、また完全なものではなく、またこの図書館に過去にロシアにおいて出版されたすべての関連文献が収められているわけでもないが、ここからある程度の傾向をさぐることはできる。一〇五枚中出版年代の明記されているものが一〇三ある。そのうち、独ソ戦が切迫性を帯び、また開戦後の緊迫感が持続した一九三八―一九四〇年代末までの時期の文献が三〇(三〇%)弱、ソ連邦崩壊の危機が高まり、現に崩壊した後の今日にいたる時期(一九九〇―二〇〇二年)の文献が三六(三五%)ある。この二つの時期がロシア国民にとって危機の時代であること、またその時期にアレクサンドル・ネフスキーへの関心が強くなっていることは明らかであるようにみえる。

73 これらの研究を以下にまとめてあげておく(すでに挙げたものでも改めてフルタイトルを記す)。ここにあげたものについては、以下では著者名とタイトルの一部のみを略記するに留める。Kuchkin V. A. Aleksandr Nevskii—gosudarstvennyi deiatel' i polkovodets srednevekovoi Rusi, *OI*. 1996-5, s. 18-33; Egorov V. L. Aleksandr Nevskii i Chingizidy, *OI*. 1997-2, s. 48-58; Kirpichnikov A. N. Aleksandr Nevskii: mezhdru Zapadom i Vostokom, *VI*. 1996-11/12, s. 115-118; Gorskii A. Aleksandr Nevskii, *Rodina*, 1993-11, s. 26-31; Lur'e Ia. S. *Rossiia Drevniaia i Rossiia Novaia*. S.-Pb., 1997, s. 100-130; *Kniaz' Aleksandr Nevskii i ego epokha. Issledovaniia i Materialy*. Pod red. Iu. K. Begunova i A. N. Kirpichnikova. S.-Pb., 1995; Shaskol'skii I. P. Nevskaiia bitba 1240 goda v svete dannikh sovremennoi nauki. v: *Kniaz' Aleksandr Nevskii i ego epokha*. s. 15-23; Rozov N. Letopisnyi rasskaz o zhizni i voinskikh podvigakh velikogo kniazia Aleksandra Iaroslavicha v litsevom letopisnom svode XVI veka. v: *Zhitie Aleksandra Nevskogo. Teksty i miniatiury Litsevo letopisnogo svoda XVI veka*. Faksimil'noe vosproizvedenie. S.-Pb., 1990; Khoroshkevich A. L. Konnye pečati' Aleksandra Nevskogo v traditsii srednevekovoi sfragistiki. v: *Kniaz' Aleksandr Nevskii i ego epokha*. s. 140-145; Surmina I. O. *Aleksandr Nevskii. Opyt nauchnoi biografii*. Avtoreferat dissertatsii na soiskanie uchenoi stepeni kandidata istoricheskikh nauk. Saratov, 1997; Sokolov Iu. F. Za zemliu Russkuiu. v: *Zashchita otechestva*. 1990-6, s. 3-53.

以上はいうまでもなくある程度研究と呼びうる文献である。この間ロシアでは、一般向けにアレクサンドル・ネフスキーの『伝』の刊行も相次ぎ(たとえば、M. Khitrov が一八九三年に刊行した『伝』*Sviatyi blagovernnyi velikii kniaz' Aleksandr Iaroslavich Nevskii* などは、一九九一、一九九二年と続けて、それぞれ異なる出版社から刊行されている。これらは研究史上はほとんど意味をもたない。また本注で上にあげた、一九九〇年ペテルブルグで出された『伝』は、一六世紀の『絵入り年代記集成』中の『伝』の部分の刊行であるが、これもテキスト・クリティークという点では問題を抱えている。いずれにせよ、こうした例は枚挙にいとまがない)、一般向けの出版も相当数見られた(たとえば、*Sviatoi i blagovernnyi velikii kniaz' Aleksandr Nevskii*. Sbornik. Sost. T. A. Sokolova. M., 1998, 392 s. も大部の出版物であるが、内容は従来の『伝』や若干の史料、諸研究を寄せ集めたものである)、本稿ではもちろんそれらを取り上げることとはしない。ただそれらは関心の高まりを間接的に物語るものではあろう。また二〇〇〇年三月二〇—二二日にはアレクサンドルの没した地ゴロジエツにおいて「アレクサンドル・ネフスキーとその時代」と題するコンファランスが開催され、相当数の発表がなされ報告書も作成されているが(*Gorodetskie chteniia*. Vyp. tretii. Po materialam Vserossiiskoi nauchno-prakticheskoi

konferentsii. 《Aleksandr Nevskii i ego epokha》, Gorodets, 2000) 発表の内容自体はとくに取り上げる価値に欠けるとしても、これもアレクサンドルに対する関心の高まりを示す一つの現象ではある。こうした中で最近出た『[Karpov A. Iu. Sostavlenie i avtorskii tekst] Velikii kniaz' Aleksandr Nevskii. (Rus', Orda, i zapad v epokhu Aleksandra Nevskogo. Zemnoe i nebesnoe v posmertnoi biografii Aleksandra Nevskogo. Dva podviga Aleksandra Nevskogo), M., 2002, s. 381 は一般向けの書物とはいえ、丁寧な編集で光っている。本書は編者 A. Iu. カルポフの有益で行き届いた序文 (s. 5-19) と諸年代記の記述の抜粋からなるアレクサンドルの系譜 (s. 20-32) に続き、主要部は次の三部から構成されている。第一部はこれも主に各種年代記の記述を年代ごとに配置し、それに編者がコメントをふしながら、アレクサンドルの政治的活動、いわば「地上の」生涯を追っている (s. 34-166)。第二部は「伝」や公に関連する教会関係文献を現代語訳で示しながら、公の死後の、いわば「天上の」生涯を追う (s. 168-242)。第三部はカラムシンに始まる一〇人の史家のアレクサンドル論を掲載している (s. 244-366)。本書の s. 373-379 には、一二二点にのぼる史料と文献のリストが付されている。

我が国ではすでに一九九〇年に松木栄三氏がアレクサンドル公を研究対象として取り上げ、それはごく最近出版された論文集に形を変えて収録されている。ウラジミール大公アレクサンドルとその父ヤロスラフの活動が十三世紀前半から中葉にかけての困難な時代のなかによく位置づけられている。氏の主たる関心はアレクサンドルその人というよりは、ノヴゴロドとの関係におけるアレクサンドル像の探求にあり、その点が本稿とはやや視点を異にするところである。本稿においてさらに探求を続ける余地とまた意味も残されていると考える。松木栄三「十三世紀ノヴゴロドの東と西―アレクサンドル・ネフスキーの周辺」『宇都宮大学教養部研究報告』第二三号第一部 (一九九〇) 一五七―一九八頁。同『ロシア中世都市の政治世界』彩流社、二〇〇二年、(第二章「公アレクサンドルとその一族」) 六九―一四九頁。

74 以下の検討に際してはすでにあげた Ia・S・ルリエーの研究と並んで、さらに Surmina, Aleksandr Nevskii v noveishei otechestvennoi istoriografii. s. 21-25 を参考にした。

75 Kuchkin, Aleksandr Nevskii: 論文は前年の九月にノヴゴロドで行われた「アレクサンドル・ネフスキーとロシア史」と題する研究者集の報告書「一九九六年、ノヴゴロド、後述注 98 参照」の三―二八頁と同内容である。またかれにはすでに一九九〇年に「古ルーシの著作家たちの解釈するモンゴルトターのくびき」一三一―一四世紀第一四半期」という論文があり (Kuchkin V. A. Mongolovo-tatarskoe igo v osveshchenii drevnerusskikh knizhnikov (XIII-pervaia chetvert' XIV v.). v kn.: Russkaya kul'tura v usloviakh

nashetii i voim. X-nachalo XX v. Sb. nauchnykh trudov. vyp. 1. M., 1990, s. 15-69）さらに翌九一年には一般向けの『べびきの下のルーシ。実態はどうであったか？』という小冊子も出版してゐる（Kuchkin V. A. *Rus' pod igom: kak eto bylo?* M., 1991）。後者は一九八九年に出た三本の一般向けの「タタールのくびき論」——内容をともかく、ほぼ同時に三本も現れたということ自体が今日のロシア人のこの問題にたいする関心の高さを物語っている——を批判し、史料研究に基づかない歴史論のあやうさを指摘したものであるが、ネフスキーについても当然中心的テーマをなすものとして触れられている。クーチキンのネフスキーに関する関心はその後も持続され、一九九九年には Kuchkin V. A. *Bor'ba Aleksandra Nevskogo protiv Teytonskogo ordena. v kn.: Vostochnaya Evropa v istoricheskoi retrospektive. K 80-letiiu V. T. Pastula* M., 1999, s. 130-137 など論文を出している。

- 76 この点についてさらに詳しくは Kuchkin V. A. *K biografii Aleksandra Nevskogo. v: Drevnieishie gosudarstva na territorii SSSR, 1985 god. M., 1986, s. 71-80* を参照。後述ゴールスキーによれば、リヤザン公女は三番目の妻とする説もあるが、それは誤りであるという（上の注53にあげたかれの著書『*Vsego est ispolnenu zemlia russkaya*...』s. 42を参照）。なおクーチキンは本稿で取り上げている論文の注1（s. 30）において、アレクサンドル・ネフスキー『伝』に関する研究の権威 Iu. K. ベグノーフをも厳しく批判している。それによると、一九九五年の論文集『アレクサンドル・ネフスキー公とその時代』のなかの、ベグノーフの作成に関わる年表には史料に裏付けられない、誤った記述が数多くあるという。たとえば、公の生年（一二二〇年五月三〇日）、公の剃髪式の時と場所（一二三三年、ペレヤスラヴリ・スパスキー寺院）、一二三八年にアレクサンドルがドミトロフ及びトヴェーリの公であったとする点、一二五二年秋に公が再婚したとする点（相手のリヤザン公女タリヤも史料的に確認されない）などなどである。sm. Begunov Iu. K. *Letopis' zhizni i deiatel'nosti Aleksandra Nevskogo. v: Kniaz' Aleksandr Nevskii i ego epokha. s. 206-209*.

- 77 Kuchkin, Aleksandr Nevskii. s. 19-20.

- 78 中村編訳『ロシア中世物語集』二四二頁。Begunov, *Pamiatnik russkoi literatury*, s. 161. なお本文でふれた別稿とは、拙稿「アレクサンドル・ネフスキー、史料（一）」二である。

- 79 Kuchkin, Aleksandr Nevskii. s. 22-23.

- 80 モンゴル軍が何故ノヴゴロドを襲わなかったかという問題は、これまで多くの研究者の注目を集めてきた。ここはクーチキン（かれはこの点に立ち入っていない）のアレクサンドル論を検討するところであるので、この点について論じることはいらないが、さしあたり、

次を参照。田中陽児「ノヴゴロド『民会』考」(上)『白山史学』第九号(昭和三八年)、一二頁以下、及び同(中)同誌第一〇号(昭和三年)一七二―一頁、さらに松木『ロシア中世都市』一〇八―一〇頁参照。

81 Kuchkin, Aleksandr Nevskii, s. 23. なおシチ河畔で大公ユーリーが弟ヤロスラフとその軍勢を待ちうけていた(すなわち両公の間に何らかの約束があった)とするのは、『ラヴレンチー(スーズダリ)』一二三七年の項である。PSRL, I: 461.

82 Kuchkin, Aleksandr Nevskii, s. 24-25. (戦闘の規模をめぐる問題については上記、注53においてもふれた。)なおここで言及した『ラヴレンチー(スーズダリ)』中の『伝』とは、同年代記の一二六三年の項にみられる(PSRL, I: 477-481. 「陣営と壕」はs. 479にみえる)。ここに含まれている『伝』は途中で中断しているが、そのことを含め、『伝』については拙稿「アレクサンドル・ネフスキー、史料(下)」二を参照のこと。アレクサンドル軍が奇襲をかけたという七月一日早朝というのは、「昼の第六時」とされている。これは今日の時間では朝八時三十分のことであるという。キルピーチュニコフはこれを午前十一時とするが、クーチキンによればそれは誤りであるという。『ノヴゴロド第一(古轉)』からの引用箇所は、PSRL, III: 77. 『古代ロシア研究』XVII (一九八九)、一三〇頁。

83 これに関してはさらに次を参照。Kuchkin, Bor'ba Aleksandra Nevskogo protiv Teytonskogo ordena, s. 130-137.

84 Kuchkin, Aleksandr Nevskii, s. 25-26.

85 以下ヤロスラフ大公のカラコルム訪問と、その地におけるないし帰国途上の死から一二五二年のアレクサンドル公のウラジミール大公位就任までの複雑な経緯に関するクーチキンの見解は、*ibid.* s. 26-28による。なお著者はここで大公ヤロスラフの一二四三年の最初のオルダー行きについてはふれていない。『ラヴレンチー(スーズダリ)』一二四三年の項には次のように記されている。「大公ヤロスラフはタタールへ、バトウのもとへ行つた。そしておのが子コスチャンチンをカノーヴィイ「モンゴル皇帝」のもとへ送つた。」(PSRL, I: 470. ルーシ諸公のなかでももっとも早くオルダーを訪れた例の一つであり、自己の領国を安堵してもらった重要な訪問でもあったので、一言触れておくべきであつたように思う。

86 クーチキンはこのように毒殺説の立場に立つ。この問題をめぐる史料・研究状況については本稿上述二〇―二二頁、Fennell, *The Crisis*, p. 101. また松木『ロシア中世都市』一〇三―一〇五頁などを参照。ここでこの問題に関する本稿の筆者の見解を記しておく。すでにナソーノフがその古典的な研究の中で、ヤロスラフはモンゴル宮廷(新カーンのグユクとその母トゥラーキナ「トレゲネ」)によりバトウの走狗と見なされ、そのために殺害されたとする説を出していた。Nasonov, *Mongols in Rus'*, s. 31-33. この説はその後多くの

アレクサンドル・ネフスキーとモンゴルのルーシ支配

研究者の受けいれるところとなり、今日ではほぼ通説的な地位を獲得していると言つてよい。(ここで取り上げているクーチキン、後に紹介するゴールスキーもナソーノフ説である。エゴロフも背景には触れないものの、毒殺説を採用している。さらに Pashuto, *Aleksandr Nevskii*, s. 91-92 (1995 年版 s. 85-86) ; Vernadsky, *The Mongols and Russia*, p. 143 ; 松木などもナソーノフ説をとっている。)筆者も、プラノ・カルビニの觀察は正確で、十分に信憑性があると考えている。トゥラーキナによる毒殺は十分にありうることであった。問題は、こうした結論から出発してヤロスラフがモンゴル宮廷で始めから不当な待遇をうけたと考え、そのようにカルビニを読む姿勢である (Pashuto, *Aleksandr Nevskii*, s. 91 (1995 年版 s. 85) ; 松木、一〇四頁)。グエクリトゥラーキナとバトゥの間が対立していたことは確かである。バトゥはグエクリタイへの出席を足の病を理由に拒んでいたし、それは当然モンゴル宮廷からみれば不服従の表明であった (Rashid-ad-Din, *Sbornik letopisei*, t. II, M.-L., 1960, s. 80-81, 118; Tizengauzen V. G. *Sbornik materialov oshosizhchitsia k istorii Zolotoi Ord*, t. II, M.-L., 1941, s. 65 ; 海老澤哲雄、宇野伸浩『C. de Bridia 等の Hystoria Tartarorum. 訳・註(2)』、『内陸アジア言語の研究』XI (1996) 七一・七三頁。マーン(佐口透訳注)『モンゴル帝国史2』平凡社(東洋文庫二二八)一九六八年、二二二頁。Spuler B. *Die Goldene Horde. Die Mongolen in Russland. 1223-1502. 2. erweiterte Auflage*. Wiesbaden, 1965, S. 28)。また後にグエクリはバトゥを攻撃しようとしたと云え言われている (Rashid-ad-Din, *Sbornik letopisei*, t. II, s. 80, 121; Tizengauzen. *Sbornik materialov*, II, s. 66, ドーソン『モンゴル帝国史2』二五七頁)。しかしあたかもヤロスラフがバトゥの走狗として始めからカーンの宮廷で「冷遇された」かのような記述はやはり問題である。確かにカルビニにそのように解釈できないわけではない記述もある。かれは、ヤロスラフらが宮廷で「それ相応の礼遇を受けぬのをみました」と記している(カルビニ／ルブルク前掲書、二〇頁)。しかしこれはよく読んでみると、タタール人が他民族にたいして「傲岸不遜」であることを説明する箇所而言われていることで、しかもヤロスラフのみならずその他の外国の使節なども同様の扱いをされたというのである。モンゴル宮廷がとくにヤロスラフを「冷遇」したかどうかはカルビニからは判断できないのである。むしろカルビニは別の箇所で、「われわれ〔カルビニら〕とイエロズラウス〔ヤロスラフ〕公とは、いつでも、一番の首席を与えられました」(同七八頁)と逆の状況を推測せしめる記述をしてさえている。大公が最終的に毒殺されたことがありえたとしても、その相当期間にわたるモンゴル滞在中一貫して不当な扱いをうけたかどうかは分からないといふ言いがたいのである。

87 Kuchkin, Aleksandr Nevskii, s. 27. 『ラヴレンチー(スースダリ)』二四七年の項には「アレクサンドルはおのが父の訃報を聞き、

ノヴゴロドからヴォロジメルへにきたり、おのが年長者のスヴァトスラフとおのが兄弟らとともに父のことを想つて泣いた。同年、フセヴォロドの子スヴァトスラフ公がヴォロジメルでおのが父の座についた……」(PSRL. I: 471) とある。クーチキン⁸⁸は、これを諸公会議が行われ、その決定で大公ヤロスラフの弟スヴァトスラフが次期大公についたと解釈するのである。しかしかりに諸公会議が開かれたことが事実であるとしても、その諸公会議でサライ、あるいはカラコルムの意向を問うことなく次期大公問題の決着が図られたのか、という疑問がわいてくる。クーチキン⁸⁹がこのような問題を考慮にいれていないのはやや問題である。

88 既述のように、スヴァトスラフ大公を追放したのが誰であるか、ミハイル・ヤロスラヴィチであるか、アンドレイ・ヤロスラヴィチであるかについては、見解が分かれている。フェネルはアンドレイ説であった。上述注55参照。また後述のエゴロフはミハイル説で、従つてこの点ではクーチキンと同じ立場に立つ。ここでクーチキンが研究史上のこのような問題に留意せず、あつさりミハイル説を表明するのは、言うまでもなく正しい態度とはいえない。後述六九頁を参照。

89 クーチキンはこれが何年のことか記していない。ペグノーフは一二四九年、後述エゴロフは一二四七年とするなど、史家の間で一定していない。両公の帰国が一二四九年冬のことと『ラヴレンチー(スーズダリ)』には記されているの(PSRL. I: 472)。クーチキン自身もこれに従っている)、エゴロフ説がより現実に思われる。

90 バトウとグユクが対立していたとするクーチキンのこの理解は、上記注86にも記したように、本稿の筆者と同様である。アレクサンドル、アンドレイ両公と一緒にカラコルムへ向わせたとする点についてはエゴロフは反対し、二人は別々にカラコルムへ向つたとする。後掲論文 Egorov, Aleksandr Nevskii i Chingizidy. s. 50.

91 Kuchkin, Aleksandr Nevskii. s. 27.

92 たとえば、タチーシチェフの見解は、Tatishchev V. N., *Istoria Rossiiskoiu*, V. M. L., 1965, s. 40-41 をみよ。かれの見解は折衷的である。そのためあつて部分的に矛盾してすらい。すなわち、一方では、アレクサンドルがカンにアンドレイのことを告発したとし(長兄であるかれから大公位を奪つたこと、タタール税を十分に納めていないことなどの理由である)、他方では、アンドレイ自身がネヴリユイ軍に反抗して敗れ去つたとしているのである。しかも後者に関しては、アンドレイは「タタールと睦み、仕えるよりは逃げるほうがよい」と言いながら、攻め寄せたネヴリユイ軍に対して迎撃したとしており、ここでは明白に矛盾している。ただこの点でのタチーシチェフの矛盾は、たとえば、『ニコン年代記』六七〇年の項にも同様にみられる(というよりここではタチーシチェフがもつ

アレクサンドル・ネフスキーとモンゴルのルーシ支配

ばら『ニコ』に依拠しているようにみえる) *PSRL*. X: 138. ソロヴィヨフの見解は、Solob'ev S. M. *Sochineniia kn. II, Istoriia Rossii s drevnestikh vremen*. t. 3-4, M., 1988, s. 152. ソロヴィヨフの見解もタチーシチェフ同様、弟アンドレイに対し不満を抱くアレクサンドルがオルダーに出かけ、カン・サルタクに弟のことを告発したとするものであるが、興味深いのは、そもそも兄がキエフを、弟がウラジーミルを獲得するようになった経緯について独特の見解を表明していることである。すなわち、兄がキエフを受け取ったのは父の生前に父自身の意志によってであり、のちに弟は、それなら自分にはウラジーミルをと要求し、カンを読み伏せ、カンとしてもアレクサンドルがこれ以上強力になるのを恐れてアンドレイの希望をかなえてやった、とするのである。これに不満を抱いた兄は、一二五二年に弟を告発するということになったという。エクゼンブリャールスキーの見解は、*Ekzempliarskii A. V. Velikie i udel'nye kniazia severnoi Rusi v iutarskoi period, s 1238 po 1505 g. t. I, SPb., 1889*(Reprint: The Hague, 1966) s. 26-27.

93 Kuchkin, Aleksandr Nevskii.. s. 28-29.

94 ここでいわれる「ヴォルガ・オルダー」という表現は不適切であろう。すでに「ヴォルガ」のではないオルダーが存在すること誤解を生ぜしめる。この点、後述のエゴロフもこれを批判している(後掲論文 Egorov, Aleksandr Nevskii i Chingizidy, s. 48)。後者によれば、この語は一五世紀になって史料に現れるという。

95 Kuchkin, Aleksandr Nevskii. s. 29.

96 *ibid.* s. 29-30. クーチキンはこの点で、サライがカラコルムから独立したゆえに兵力の不足を覚えるようになったとし、あたかも独立以前にはモンゴル本国から軍事援助をえていたかのような理解をしているが、これはエゴロフの批判を招いている(後掲論文 Egorov, Aleksandr Nevskii i Chingizidy, s. 48 参照)。

97 拙稿「ルーシとモンゴル」一二一七頁。ここで前拙稿の二五頁注 80 について補足しておきたい。一二六二年暴動へのアレクサンドルの関与を主張する研究者として、ナソノフやここで紹介したクーチキンをあげておいたが、本稿で以下にとりあげるキルピーチュニコフ、さらにはクリヴォシェエフも付け加えておく。とりわけ後者の説は説得的であるかどうかは別にしても、独特で、興味深い。かれはモンゴルの侵入とその支配がキエフ・ルーシ以来の政治・社会体制(都市・国家体制)を破壊したわけではなかったことを説くなかで、侵入後も人民的機関である都市民衆が健在であったことを指摘し、人民と一体的な存在としての諸公の行動は当然のことながら、反タタールの的であったとする視点にたっているのである(Krivoshchev, *Rus' i mongoly*, s. 196-199, 310, 348. こうした立場は

さらに同書⁹⁸ s. 236-237 にもよく現れている。本書については筆者による簡単な紹介を参照されたい。『ロシア史研究』七〇号、二〇〇二年、六八頁。

- 98 Egorov, Aleksandr Nevskii i Chingizidy. 次の同題の頁を参照。Egorov V. L. Aleksandr Nevskii i Zolotaia Orda. v kn. *Aleksandr Nevskii i istoria Rossii*. Novgorod, 1996, s. 42-63. なおエゴロフはこれまですでにキプチャク・カン国の歴史地理学的研究で優れた業績を上げてきた。たとえば、Egorov V. L., *Istoricheskaia geografiia Zolotoi ordy v XIII-XIV vv.* M., 1985. また近年には Egorov V. L. Zolotaia ordamify i real'nost'. *Istoriia*, 1990-9, s. 1-63 という論文も発表している。

- 99 Egorov, Aleksandr Nevskii i Chingizidy. s. 49. 著者のこの記述から、かれはアレクサンドルが最初にオルダーへ向ったのが、後述の「つとて」一二四七年であると考えていることが分かる。これは第一に、『ノヴゴロド第四年代記』や『ノヴゴロド・カラムジン年代記』の六七五〇（一二四二）年の項に記され、一部の研究者がそれに基づいて考えているように、アレクサンドルの最初のサライ訪問が一二四二年のことであるとすると立場にエゴロフは立っていないこと、第二に、逆に最初の訪問が一二四九〜五〇年とするベグノーフなどの立場をも否定していることを暗示している。sm. PSRL. IV-1: 228; PSRL. XLII [S-Pb, 2002]: 117; Potuboiar'nova M. D. *Russkie liudi v Zolotoi Orde*. M., 1978, s. 8; Begunov, Letopis' zhizni i deiatel'nosti. s. 208. アレクサンドルの最初のサライ行きについては、おそらくエゴロフ説が正しいように見える。拙稿「ルーシとモンゴル」二頁は『ノヴゴロド第四年代記』の記述を無批判に採用したが、これは訂正されなければならないだろう。この点についてはさらにまた拙稿「アレクサンドル・ネフスキー、史料（下）」三を参照。
- 100 これとの関連で、エゴロフは一二四三年の大公ヤロスラフの最初のオルダー参りを外交上きわめて重要な成功であったと考えている。『ラヴレンチー（スーズダリ）』に、バトゥが「ヤロスラフを大いなる栄誉をもって受け入れ、そして帰国を許した」と記されているように、ヤロスラフは自己の大公位を承認してもらっただけでなく、バトゥのルーシへの敵対感を幾分かは和らげること成功したからであるとする。またこのときヤロスラフは子のコンスタンチンをカラコルムへ行かせているが、かれも「栄誉とともに」一二四五年に無事帰国している（PSRL. I: 470）。

- 101 アレクサンドルによるオルダーからの捕虜の買い戻しについては、『ソフィヤ第一年代記（古輯）』六七五四（一二四六）年の項に記されている。PSRL. VI-1: 326.

- 102 Egorov, Aleksandr Nevskii i Chingizidy. s. 49. の点については、上述二一二二頁をも参照。

アレクサンドル・ネフスキーとモンゴルのルーシ支配

103 *ibid.* ただしエゴロフはこの点では不正確である。カルビニは実際にはこうは書いていない。喜んで行きたいと思っただけで、行かなかったとされているのである(カルビニ／ブルク、前掲書、八一―八二頁)。何故アレクサンドルが行かなかったのかの理由はそこでは明らかにされていない。

104 *PSRL*. VI-1: 326.

105 Egorov, Aleksandr Nevskii i Chingizidy, s. 51-52.

106 *ibid.* s. 49-50. スヴャトスラフ大公廃位の主役が誰であるかの問題については、上述注55、88を参照。

107 *PSRL* [M., 1994. I・N・ツァールスキー写本によるソフィヤ第一年代記] XXXIX: 86 (六七五五年)；なお *PSRL*. VI-1: 326-327 (ただし六七五四年の項である) もほぼ同内容である。

108 *PSRL*. XXXIX: 86; *PSRL*. VI-1: 326.

109 『ラヴレンチー(スーズダリ)』では次のようになっていいる。「同年「一二四七年」、ヤロスラフの子アンドレイ公がタタルへ、バトゥのもとへ行つた。またアレクサンドル公も兄弟の跡を追つてバトゥのもとへ行つた。バトゥはかれらに敬意を表し、かれらをカネーヴィチ「モンゴリアのカーン」のもとへ送つた。」(*PSRL*. I: 47) ところで、もし「帰ることを許した」という『ソフィヤ第一』の記述が正しいとするならば、それは一二四七年のことではなく、それ以前のこととしなければならなくなるであろう。あるいはもしエゴロフがこの『ソフィヤ第一』の記述を正しいものとして採用しているのならば、次のようにならう。すなわち、アレクサンドルは実際に一二四七年に一度オルダーへ行き、一旦帰国して後に、まもなく再び(今度は後述の如く一二四八年秋までには)オルダーへ向かい、そのときは(アンドレイともども)そのままカラコルムへ向つて、一二四九年末に帰国するということになる。ただこの場合、両公は日程的に相当の強行軍を余儀なくされることになるし、実際には後述のように、エゴロフ自身そうは考えていない。結局エゴロフはアレクサンドルがバトゥに強い印象を与えたという点の論拠として先の『ソフィヤ第一』の記述を引いたが、そこに記されている「帰ることを許した」という記述は(とくに断ることもなく)採用していない、ということになる。

110 Egorov, Aleksandr Nevskii i Chingizidy, s. 51.

111 Rashid-ad-Din, *Sbornik letopisei*, t. II, s. 121-122; Tizengauzen, *Sbornik materialov*, II, s. 66-67; ユーレン『モンゴル帝国史』, 二六六―二六七頁。Spuler B. Stammtafel der Herrscher der Goldenen Horde. I. Die Nachfahren Batus (mit den Gross-Chanen und

den Jichanen) in: Spuler B. *Die Goldene Horde; Vernadsky, The Mongols and Russia*, p. 66; Pashuto, *Aleksandr Nevskii*, M., 1974, s. 99 (Moskva/Ekaterinburg, 1995 年版) 75 s. 92)

112 Egorov, Aleksandr Nevskii i Chingizidy, s. 58 (prim. 32). 大公スヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチの没年月日は『ソフィヤ第一ツァールスキー写本』六七六〇年の項にみられる (PSRL. XXXIX: 87)。ここに示されている六七六〇年二月三日は、エゴロフによれば、三月暦であるので、一二五三年のことと理解すべきであるという。この死没時期は同年代記の「古輯版」(PSRL. VI-1)にはでてこない。また一八五一—一八五三年に『年代記全集』の第五—六巻として刊行された版(トルストフスキー写本を底本とする)では、六七五九年の項の末尾に、ツァールスキー写本と注記して、二月三日にスヴァトスラフ崩御と記されている (PSRL. V: 187)。(ただ上の一九九四年に刊行された『ツァールスキー写本によるソフィヤ第一』では六七六〇年となっているので、この一八五一—一五三年版の編者の注記は不正確であるようにみえる。)後の『ニコン年代記』では六七六〇年の二月三日没と記されている (PSRL. X: 139)。

113 Tatishchev, *Istoria Rossiiskaia*, V, s. 39.

114 *ibid.* s. 51.

115 ウラジーミル大公位をめぐる一二五二年の事態の推移に関するエゴロフの見解は、*ibid.* s. 51-53.

116 タチーシチェフのこの件に関する見解は、Tatishchev, *Istoria Rossiiskaia*, V, s. 40.

117 アレクサンドルがバトウではなくサルタクのもとへ行ったとするのは、『ツァールスキー写本による』ソフィヤ第一年代記』である (PSRL. XXXIX: 87)。(同年代記「古輯版」PSRL. VI-1にはこの記述はみられない。)ただエゴロフは、このときバトウがモンゴリアでモンケ・カーンの選出に立ちあつてゐたとする典拠は示していない。シュプラーによれば、バトウはグユク・カーンとの対立の最中、中央アジアのアラクマクに兵を進め、そこで一二四八年四月に、これまた中央アジアのサマルカンド付近に進んでいたグユクが死去したという知らせに接するが、その後行われるべきモンゴリアにおける新カーン選出に何らかの影響力を行使すべく、しばらくの間そこに留まつたという。それが効を奏したからか、新カーンにはかれのかつての盟友モンケ(トゥルイの長子)が選出された。バトウのこの中央アジア滞在中は、その子サルタクがサライにおいて政務をとり、従つてルーシ諸公をも謁見したという。この点はドーソンも同様である。ルーシの年代記では、一二四九年から一二五〇年の項においてそうした事例が記されている(たとえば、『ラヴレンチー(スーズダリ)』六七五七年の項では、グレープ・ヴァシリコヴィチ公が、翌年の項では、ボリス・ヴァシリコヴィチ公がサルタクに拜

アレクサンドル・ネフスキーとモンゴルのルーシ支配

117 謂うてゐる。PSRL. I: 472)。従つて、バトゥがモンゴリアでモンケ・カーンの選出に立ちあつたとするのは正しいとはいえない。Spuler, *Die Goldene Horde*. SS. 28-29, 44-45。『モンゴル帝国史2』二六六―二七一頁。

118 グミリョフの見解はGumilev, *Drevniia Rus' i Velikaia step'*, s. 534をみよ。グミリョフのこの説を、不可解なことではあるが無批判に受け容れる研究者も存在する。Krivoshchev, *Rus' i mongoly*, s. 240。

119 Egorov, Aleksandr Nevskii i Chingizidy, s. 53。

120 *ibid.*『ラヴレンチー(スーズダリ)』の六七六四(一二五六)年の項に次のように記されている。「……ボリス公はタタールへ行つた。アレクサンドル公は贈り物を与えた。ボリスはウラフチ「ウラグチ」のもとに行き、贈り物を与え、榮譽のうちにおのが世襲地「領国」に帰還した。」(PSRL. I: 474) たしかにここでは、「タタールへ行つた」ボリス公とは異なり、アレクサンドルが「行つた」とは書かれてゐない。

121 Tatishchev, *Istoriia Rossiiskaia*, V, s. 42。

122 Egorov, Aleksandr Nevskii i Chingizidy, s. 53-56。

123 この十進制的組織とバスカク制について詳しくは、拙稿「ルーシとモンゴル」四―七頁、及び拙稿「キプチャク・カン国のルーシ支配の構造」、『前近代ロシアにおける都市と地方の社会的結合の諸形態に関する研究』(平成一〇―平成一三年度科学研究費補助金・基盤研究(A)(1)研究成果報告書(研究代表者・豊川浩一)、平成一四年三月、一―二二頁を参照。

124 Egorov, Aleksandr Nevskii i Chingizidy, s. 54-55。後の大カーン・グユクとモンケがウゲデイ・カーンの命令で途中で(キエフ攻略後である)バトゥ軍を離れ、帰国の途についたことは、たとえば、Rashid-ad-Din, *Sbornik letopisei*, t. II, s. 40, 72, 79, に記されてゐる。

125 *ibid.* s. 55。

126 *ibid.* エゴロフは蜂起の起つた都市を五つあげているが、出典は『ソフィヤ第一(ツァールスキー写本)』である(PSRL. XXXIX: 89)。「ラヴレンチー(スーズダリ)」では、ペレヤスラヴリを除く、四都市しかあがつていない。(PSRL. I: 476)。なおここでエゴロフは、蜂起の際に徴税請負人たちは単に追放されただけで、殺害されたわけではなかったと主張したが、これは不正確である。「ラヴレンチー(スーズダリ)」一二六二年の項では、確かに最初の部分では、キリスト教徒は諸都市から異教徒を「追いだした」と記されるの

みであるが、後半部（背教者ゾシマ殺害の件のところ）では「民はおのが敵であるベセルメン」「ムスリム」に襲いかかり、かれらを追いだし、他の者を打った」とも述べられているのである。年代記作者がこのような言い方で、殺害はせず、単に追放しただけであったことをことさらに伝えようとしたとは考えにくい。（「打った」という語は、むしろ「打ち殺した」と解することができる語である。）あるいはもし追放されただけであると年代記作者が意識的に記したと仮定しても、それが事実であったことを必ずしも意味せず、むしろ反乱という重大な事実を「和らげる」意図でそう記したととるべきであるように思われる。この時点で大公の立場を代弁する年代記の作者が、ルーシ人の反モンゴルの態度を強調するようなことは控えようとしたと考えられるからである（PSRL. I: 476）。（ちなみに後代の『ニコン』でも、「ルーシ諸公はタタールを追いだし、ある者は打ち……」としている PSRL. X: 143. ここでも「打ち」は先の場合と同じ語である。）

127 Egorov, Aleksandr Nevskii i Chingizidy, s. 55-56. なおアレクサンドルがその生涯において何度オルダへ出かけたかは、研究者によって見解に相違がある。エゴロフは四度と考えているが、たとえば、ベグノーフ（sm, Letopis' zhizni i deiatel'nosti Aleksandra Nevskogo. v. Kniaz' Aleksandr Nevskii i ego epokha, s. 206-209）は五度と数えている（後述のキルピーチュニコフも同様である）。本稿の筆者はベグノーフと同様に五度と考えているが、具体的にどの時点でサライを訪れたかについては、ベグノーフと大きく異なる立場に立っている。各訪問の時期については筆者はむしろエゴロフ説に近い。筆者とエゴロフの違いは、『ラヴレンチー（スーズダリ）』に記されている一二五七年と五八年の連続してのサライ行きを二度と考えるかどうかにある。筆者はこの場合年代記は正しく事実を伝えていると考えている。拙稿「アレクサンドル・ネフスキー、史料（上）」九六―九七頁及び注四を参照されたい。

128 PSRL. XXXIX: 89.

129 アレクサンドル最晩年のこの行為（弟ヤロスラフ公のユーリエフ遠征への派遣）についてエゴロフは特別コメントをしていないが、この行為はそれ自体のもつ意味はともかくとして、『伝』の成立の問題と関連してある重要な意味をもっていることに注意を喚起しておきたい。これについては、さしあたり拙稿「アレクサンドル・ネフスキー、史料（下）」（中の「伝」におけるアレクサンドルの章）を参照されたいが、ここでは次のことだけを指摘しておく。この点に関し、エゴロフは『ソフィヤ第一（ツァールスキー写本）』（PSRL. XXXIX: 89）を引いている。そこではアレクサンドルの弟ヤロスラフを主に、子ドミトリーを従に描いている。他方、たとえば、『ノヴゴロド第一（古輯）』（PSRL. III: 311-312.『古代ロシア研究』XVIII, 三三頁）はドミトリーを主にし、ヤロスラフを従に描いている

のである。そして『ノヴゴロド第四』(PSRL. IV-1: 233-234)ではこれがまた逆になっている。このようにヤロスラフ・ヤロスラヴィチ(トヴェリ公)を主とするか、それともドミトリー・アレクサンドロヴィチ公を主とするか、とりわけ後者をどう扱っているか、が後の政治状況との関連で大きな意味をもっているという指摘がなされているのである。Begunov, *Pamiatnik russkoi literatury*, s. 17-21, 60-61.

130 ここで記した問題、すなわち、一二六二年にアレクサンドルが最後にサライを訪れた際に、かれが何故長期間そこに留まり、越冬せざるを得なくされたか、という点をエゴロフはとくに問題としてはいない。実は本稿で取り上げたロシアを代表する相当数の研究者のうち、この点を問題と考えてそれについて論じた研究者は一人もない。しかしそれは大いに問題である。というのも、早い時期の史料である『ノヴゴロド第一年代記(古輯)』の六七七〇(一二六二年)の項に次のように記されているからである。「同年、アレクサンドル公はタタールのもとへ赴いた。そこでベルカがかれを留めおき、ルーシに帰ることを許さなかった。〔かれは〕「タタール〔の地〕で冬を過ごし、発病した。」(PSRL. III: 83: 「古代ロシア研究」XVIII, 三三頁。なお邦訳者たちはこの箇所を「ベルカイが彼を拘禁し、ルーシに帰さかった」と、より断定的に訳している。)この記述はその後『ソフィヤ第一(古輯)』(PSRL. VI-1: 338)や『一四七一年の全ルーシ的集成』(『ニカノロフスカヤ』六七六九年の項 PSRL. XXVII: 48, 『ヴォログツコーペルムスカヤ』六七七〇年の項 PSRL. XXVI: 89)、また『一四七九(一四八〇)年のモスクワ集成(一五世紀末のモスクワ年代記集成)』(ただし六七七一年の項で。PSRL. XXV: 144)などにおいても採用されている。すなわち、ここではアレクサンドルはベルケ・カンによって意図的に「留め」おかれ、そのためすぐには帰国できなかったとされているのである。興味深いのはこの件に関する『ラヴレンチー(スーズダリ)』の編者の態度である。すなわち、同年代記はそもそも六七七〇年にアレクサンドルがサライに出かけたことを記録していないのである。大公系年代記として、大公の動向には敏感な同年代記がこれについて言及していないということは、それ自体深い意味をもっている可能性がある。すなわち、このときの訪問が単なる儀礼のそれではなく、あるいはいつもものと異なると、カンからの召喚による危険の多いものであったこと、現にそれは重大な帰結をもたらしたことを熟知した同年代記編者が、それを隠すべく、そもそのサライ行き自体に触れなかったのではないかと推測されるのである。もし先の『ノヴゴロド第一(古輯)』の記述が事実を反映しているとするならば、そのときアレクサンドルはカンによって何らかの過失を咎められたということになる。その過失とは何か、容易には判断しがたいが、もつとも自然なのは、直前の北東ルーシ諸都市における反タタール蜂起(それをかれが直接指示したか、ないしそれに関与し

たのか、あるいはそれを阻止できなかったことが問題とされたのか、はともかくとして」と考えることであろう。そしてさらに、もしそうであるならば、アレクサンドルの死因に関しても、単なる病死であったかどうか、少なくとも疑問を提起する余地は生じてくるであろう。もともとアレクサンドルの場合、父ヤロスラフと同様のことがあったかといえ、本稿の筆者としては否定的に考えている。カンがもしアレクサンドルを厳しく罰しようとしたならば、直ちにより直接的にことを運んだであろうと考えるからである。少なくともどの史料にも、カンがアレクサンドルの生命を奪おうとしたことを推測させる記述はない。研究史上、キプチャク・カンによるアレクサンドル毒殺説を明確に主張した人物を本稿の筆者はあまり知らない。後述するキルビーチュニコフはその一人であるが、明確な根拠があげられているわけではない。他には、たとえば、フェネルが「毒殺についての情報はどの史料にもみられない」と否定的、間接的にこのことについて触れているだけである(Fennell, *The Crisis*, p. 120)。また上述のグミリョフも同様に否定的に毒殺説に言及していた(上述二三頁、また注45参照)。松木氏は、父と弟(ヤロスラフ・ヤロスラヴィチ)の例を出して、毒殺もありえたとする微妙な立場を表明している(松木前掲論文、一七九頁、及び松木前掲書、一四六―一四七頁)。いずれにせよこの問題は、その解釈によっては、一貫して親タールのと評価され、その親タールの政策が当時のルーシを大きな悲劇(すなわち、タールによる徹底的破壊)から救ったと称えられてきたアレクサンドルの、その政治・外交手腕(及びその評価)にも影を落とさざるを得ない側面をもっている。すなわちかれは、一般に言われるほどサライと良好な関係にあったわけではないことが、ここに暗示されている可能性があるのである。こうしたアレクサンドルの全体的評価に大きく関係してくる重要な問題にたいし、多くの研究者が注意を向けないでいること、というより口をつぐんでいるようにみえることは、不可解としか言いようがない。この件に関しては、さらに拙稿「アレクサンドル・ネフスキー、史料(上)」中の『ソフィヤ第一年代記』を扱った箇所(その末尾)を参照されたい。

¹³¹ Kirpichnikov, Aleksandr Nevskii. 同著者にはさらに最近の論文として、「アレクサンドル公のスウェーデン人やドイツ騎士団との有名な戦つたについて再考」した Kirpichnikov A. N. *Ledovoe poboiische 1242 g. (novoe osmyslenie)*. VI. 1994-5, s. 162-166; ego zhe, *Nevskaia bitva 1240 goda i ee takticheskie osobennosti*. v kn.: *Aleksandr Nevskii i istoriia Rossii*, s. 29-42 などがある。

¹³² もともと著者がここで引用する『ウスチュグ年代記』の情報によれば「ヤロスラフは帰国途上ではなく、「オルダー」で非業の死を遂げた」となっている(六七五六年、すなわち一二四八年の項において) *Usiuzhskii letopisnyi svod*. M.-L., 1950, s. 47; PSRL. XXXVII

アレクサンドル・ネフスキーとモンゴルのルーシ支配

[L., 1982]: 70)°

- 133 Kirpichnikov, Aleksandr Nevskii, s. 118. すでに記したごとく、キルピーチュニコフはここで珍しくアレクサンドルの死因（しかも毒殺の可能性）について触れている。その推論が正しいとは思えないのではあるが。この問題については上注⑩を参照。

- 134 Gorskii, Aleksandr Nevskii, s. 26-31. ななコーンスキーには最近のアレクサントル論とつづらぬ。 Gorskii A. A. Dva "neudobnykh" fakta iz biografii Aleksandra Nevskogo. v kn.: *Aleksandr Nevskii i istoriia Rossii*, s. 64-75, Gorskii, 《*Vsego esi ispolnena zemlia russkaja*,...》(上掲注52)° s. 41-61, 69-74 など。

- 135 上掲注55を参照。

- 136 上の注に關つてはなな Gorskii, Dva "neudobnykh" fakta. 論文でなな詳細に論じられてゐる。

- 137 Innocentii P. IV. ad Alexandrum Ducem Susdaliensem. *Акты исторические, относящиеся к Россii, изъелченныe из inostrannykh arkhivov i bibliotek A. I. Turgenevym*. t. I, S.-Pb., 1841, No. 78; Matuzova, Nazarova, *Krestonosy i Rus'*, s. 262-263. など最近の刊本である後者によれば、教皇のこの書簡の日付は一二四八年一月二三日となつてゐる。

- 138 前注であげた最近の刊本のテキストへの註解のなかで、E・L・ナザロヴァはゴールスキーより慎重な姿勢をみせてゐる。かの女によれば、ブラン・カルピニは、ヤロスラフ大公がカトリック受け容れの意志を表明したかのような記述はまったくしていないこと、おそらくヤロスラフはカルピニと会談した際に、教皇庁との交渉に合意したにすぎないこと、しかもそれはカトリックへの改宗についてではなく、対モンゴル同盟に関わるものであったこと、全体としてカルピニが教皇に報告した際に、自己の功績を強調せんとして、ヤロスラフの改宗の約束についての勇み足的な発言をした可能性はあること、などを指摘してゐる。 Matuzova, Nazarova, *Krestonosy i Rus'*, s. 266.

- 139 Rosko G. Innokentii IV i ugroza tataro-mongolskogo nashestviia: poslania Papy Rimskogo Daniila Galitskomu i Aleksandru Nevskomu. *Simvol*. Paris, 1988, s. 112-113; Matuzova, Nazarova, *Krestonosy i Rus'*, s. 268-269.

- 140 Gorskii, Dva "neudobnykh" fakta, s. 64-66.

- 141 Gorskii, 《*Vsego esi ispolnena zemlia russkaja*,...》本書は『5』との関連でよく問題となる『ルーシの地の滅亡の物語』中の一句をめぐつての書名とつづらぬ (Begunov, *Pamiatnik russkoi literatury*, s. 154; 中村編訳『ロシア中世物語集』二三八頁)。ルーシの

四人の英雄Ⅱ公（イーゴリ・スヴァトスラヴィチ、アレクサンドル・ネフスキー、ユーリー・ダニロヴィチ、ドミトリ・ドンスコイ）をとりあげて論じた小型本であるが、アレクサンドルは第二章第一節「アレクサンドル・ネフスキー——英雄か、対敵協力者か？」で扱われている。

¹⁴²すでに触れた通り、こう考えるのは主に革命前の研究者、たとえばタチーシチェフ、ソロヴィヨフ、エクゼムプリヤールスキーである。またフエンネルもこうした見解を有していることはいうまでもない。もともと、ゴールスキーの判断とは異なつて、本稿の筆者はロシアの最近の歴史家には、こうした立場をとる者は決して多くないとみている。本稿でとりあげた歴史家の中では、エゴロフだけがこうした立場に立っていた。

¹⁴³タチーシチェフの見解は、Tatishchev, *Istoriia Rossiiskaia*. V, s. 40をみよ。

¹⁴⁴最後にいくつかの補足しておく。まず注73にあげた諸研究のうち、一九九〇年のソコロフ論文について一言する。他の、上で取上げなかった研究者については、別の機会に取り上げることであろうかと考えるのにたいし、ソコロフについてはその限りでないからである。歴史学博士候補（カンジダート）で、中世軍事史の専門家であるソコロフのアレクサンドル論（「ルーシの地のために」）は五〇頁を越える論文である。しかしその発表雑誌の性格からも明らかであるが、それは学術論文ではなく、内容的にかなりの問題がある。目的が国家防衛者としてのアレクサンドル公の歴史的意義の再評価、というより一層の賛美と聖化にあることがはっきりしているからである。副題にあるように、公誕生七七〇年を記念しての文章であることもそれを物語っている（ちなみに、すでに記したような最近の研究者の見解では、誕生七七〇年目に当たるのは一九九〇年ではなく、その翌年である）。史料に基づかなかつたり、十分に整合的でなかつたり、端的に誤りであつたりする箇所が多いのである。

二つだけ例をあげる。一二五二年のアレクサンドルの大公位就任の経緯について、著者は次のように記す。まず、一二五〇年に大公アンドレイが（反バトゥのダニール・ガリツキー公と結んで、またアレクサンドルの忠告を無視して）バトゥにたいするダーニ支払いを拒否する。一二五二年バトゥは反抗的諸公懲罰を決意し、ネヴリユイ軍を北東ルーシに差し向ける。アンドレイは逃亡する。アレクサンドルはバトゥのルーシへの怒りを鎮めるべく止むを得ずオルダーへ向かい、何とかカンをなだめ、代わりに大公位を獲得することに成功する（Sokolov, *Za zemliu russkuiu*. s. 37-38）。ここには年代記の記述に反したり、記されていないことを書いたりする姿勢がはっきりと現れている。

アレクサンドル・ネフスキーとモンゴルのルーシ支配

次は一二六二年の諸都市における反タタール暴動とアレクサンドルの行動に関してである(s.46-47)。暴動自体は民衆のイニシアティブによるものとされる。アレクサンドルの態度は次のように説明される。かれは暴動がタタールからの懲罰を呼ぶ可能性があるという意味でその危険性を十分に認識していたが、他方ムスリム徴税人を保護することもしなかった、と。ここには公が暴動を鎮圧したようなことを伺わせる文言はない。むしろ公は国家指導者としての政治理性を付与されつつ、一方では民衆の心性の理解者としても描かれている。暴動、タタール徴税請負人の追放の後、公は、自らの生命の危険をおかして(犠牲的精神!)ただちにオルダーへ出かける。ルーシの民のためにカンの前に申し開きをするためである。そして公はこの困難な使命を果たすことに成功する。懲罰は回避されたのである。だがそれだけではない。公はさらにカンに徴税請負制度の欠陥を説いて、これを廃止させ、以後ダーニ徴収権はルーシ諸公の手に委ねられるという約束を取りつける。成果はこれに尽きない。公は当時イランとの戦争のために軍兵を必要としたカンからの兵員要求を撤回させることにも成功したのである。確かに公は天才的政治指導者といえるかもしれない。本当にこのようであったならば、であるが。ここでは上記の研究者らが年代記の解釈をめぐり頭を悩ませてきたことがまったく考慮されておらず、あっさりとしてすが都合よいように一つにまとめられ、すべてがアレクサンドルの功績とされているのである。

次に、アレクサンドル・ネフスキーは政治的、軍事的指導者であったが、それと同時に、『伝』が著され、一五四七年には正式に正教会によって列聖されたことから分かる通り、霊的、教会的存在でもあった。したがってかれの存在には、いわば地上的、現世的な側面と天天的、彼岸的側面とがあるといえる。それゆえこれまでかれの生涯や行動はロシア正教会によっても記録され、叙述の対象となってきた。もとよりそれを「研究」と呼ぶことはできない。しかしそれでもアレクサンドルに関する一定の像が形成され、それが広く一般のアレクサンドル像のあり方に少なからざる影響を与えてきたことは否定できない。そのような意味で、現在ロシア正教会がかれをどのように見ているのかについて、以下に記しておきたい。まず正教会のカレンダーをみてみよう。現在正教会は年に二度アレクサンドルを記念してかれにトロバリ(讃歌)を捧げている。一度目は八月三〇日(新暦で九月二日)で、これはアレクサンドルの遺体がビョートル大帝の命令でウラジミールからサンクト・ペテルブルクに移された日(一七二四年八月のその日―これは北方戦争勝利後のニシュタットの講和の締結日でもある)を記念している。二度目が十一月二三日(新暦二月六日)で、これはアレクサンドル(スヒマ僧としてはアレクシー)の命日を記念したものである。そこではかれはロシアとロシア国家の守護者とみなされている。アレクサンドルの聖化は今日においても続いているのである (*Pravoslavyi iskhodnyi kalendar'. 2002. S. prilozeniem toparai, kondakov, velichani*

i zadoshnikov na kazhdyi den' goda. Mezhdunarodnyi Pravoslavno-Prosvetitel'skii tsentr pri Moskovskoi Patriarkhii, M. 2002.)。次に、モスクワの正教会聖テオホン神学研究所発行の『聖アレクサンドル・ネフスキー—ロシア国土の守護者』と題する書物をみてみよう (*Sviatoi Aleksandr Nevskii. Zashchitnik zemli russkoi*, M., Pravoslavnoi svyato-Tikhonovskii Bogoslovskii institut, 2001)°。この書物は長司祭 A・サルティコフによる「信仰厚き大公聖アレクサンドル・ネフスキーと現代」と題する序文に続き、公の略伝、フェオフアン・ザトヴォルニクの説教、教会で唱えられるアカフィスト（賛詞）と祈禱、M・ヒトローフによる詳細な伝記的記述 (Khitrov M. *Sviatyi blagovernyi velikii kniaz' Aleksandr Nevskii. Podrobnoe zhizn opisaniye s risunkami, planami i kartami*, M., 1893, 278s.)、さらに付録として「正教会の典礼における聖アレクサンドル・ネフスキー」、ロシアの詩文学における聖アレクサンドル」、「同時代人・目撃者の語る聖アレクサンドル」、「ロシアの歴史家のみた聖アレクサンドル」、「年表」、また史料・文献表、注からなる小型版ではあるが五〇〇ページをこえる本格的なものである。ただ、たとえばその略伝部分において、『伝』は古ルーシにおいては五版が知られており、最初の簡略版は公の同時代人によって編まれ、最後のものとも詳細な版は一七世紀になってからのものとするなど、歴史学による研究成果を然るべく取り入れているとは言いがたい状況にある。最近の研究、たとえば『伝』研究をもっとも精力的に行っている L.K. ベグノーフによれば、『伝』には全部で二〇もの版があるとされているのである（これについては別稿「アレクサンドル・ネフスキー—史料（下）」を参照されたい）。正教会においてはアレクサンドルはひたすらロシアを守護する神の使いとしてみられている。今日のアレクサンドル研究がこうした見方に強く影響されているとはもちろん言えないが、教会的な見方が長期にわたって大きな意味を持ち続けてきたことを忘れるべきではなからう。